

# 日本写真家協会会報

NO.174  
(2020. Sep.)

- 創立 70 周年特集 「JPS と私」
- 座談会 「表現の変貌をどう捉えたか」
- 2020 年新入会員展 「私の仕事」

JPS 70



Photo Uchibori Takeshi

# ヨドバシカメラの ゴールドポイントカードが Mt.石井スポーツ ART SPORTS でも ご利用いただけようになりました。

1  
ポイント

=  
1  
円



として

ご利用いただけます!

石井スポーツ / アートスポーツで  
ご購入いただいた商品も  
**10% ポイント還元**

\*ポイント還元率はお支払い方法により異なります。  
\*一部商品により還元率が変更となります。



新規会員  
募集中 日本写真家協会会員様専用の  
ゴールドポイントカード

**12% ポイント還元**

※現金・デビットでのお支払時。一部対象外商品ございます。



専門知識豊富な販売員が親切丁寧にご案内いたします!  
**ヨドバシカメラ**  
[www.yodobashi.com](http://www.yodobashi.com)

新宿西口本店  
〒160-0023  
新宿区西新宿1-11-1  
☎03(3346)1010

マルチメディア新宿東口  
〒160-0022  
新宿区新宿3-26-7  
☎03(3356)1010

マルチメディアAkiba  
〒101-0028  
千代田区神田花岡町1-1  
☎03(5209)1010

マルチメディア錦糸町  
〒130-8580(駒ビルテルミニア・2-3階)  
墨田区江東橋3-14-5  
☎03(3632)1010

マルチメディア上野  
〒110-0005  
台東区上野4-10-10  
☎03(3837)1010

マルチメディア町田  
〒194-0013  
町田市原町田1-1-11  
☎042(721)1010

八王子店  
〒192-0082  
八王子市東町7-4  
☎042(643)1010

マルチメディア吉祥寺  
〒180-0004  
武蔵野市吉祥寺本町1-19-1  
☎0422(29)1010

マルチメディア川崎ルフロン  
〒210-0024  
川崎市川崎区日進町1-11  
☎044(223)1010

アウトレット京急川崎  
〒210-0007  
川崎市川崎区駅前本町21-12  
☎044(221)1010

マルチメディア横浜  
〒220-0004  
横浜市西区北幸1-2-7  
☎045(313)1010

マルチメディア京急上大岡  
〒233-0002(京急百貨店1-8-9階)  
横浜市港南区上大岡西1-6-1  
☎045(845)1010

マルチメディアさいたま新都心駅前店  
〒330-0843  
さいたま市大宮区吉敷町4-263-6  
☎048(645)1010

千葉店  
〒260-0015  
千葉市中央区富士見2-3-1  
☎043(224)1010

マルチメディア新潟駅前店  
〒950-0901  
新潟市中央区弁天1-2-6  
☎025(249)1010

マルチメディア宇都宮  
〒321-0964(ララスクエア6-7-8階)  
栃木県宇都宮市駿前通り1-4-6  
☎028(616)1010

マルチメディア郡山  
〒963-8002  
福島県郡山市駿前1-16-7  
☎024(931)1010

マルチメディア仙台  
〒983-0852  
仙台市宮城野区榴岡1-2-13  
☎022(295)1010

マルチメディア札幌  
〒060-0806  
札幌市北区北6条西5-1-22  
☎011(707)1010

マルチメディア梅田  
〒530-0011  
大阪市北区大深町1-1  
☎06(4802)1010

マルチメディア京都  
〒600-8216  
京都府京都市下京区京都駅前 京都タワー横  
☎075(351)1010

マルチメディア名古屋松坂屋店  
〒460-8430  
名古屋市中区栄3-16-1  
☎052(265)1010

マルチメディア博多  
〒812-0012  
福岡市博多区博多駅中央街6-12  
☎092(471)1010

ヨドバシカメラの  
インターネットショッピング  
[www.yodobashi.com](http://www.yodobashi.com)  
ケータイでいつでもどこでも簡単ショッピング!  
<http://m.yodobashi.com>

お電話で1本すぐにお届け!  
テレフォンショッピング  
☎ 0120-141405  
受付時間: あさ10時~よる8時 365日年中無休



# 世界初\*F2.8スタート、高倍率ズーム。

フルサイズミラーレス専用設計。

多彩なシーンを鮮やかに切り取る、新たな一本がここに。

こころ動く瞬間を存分に。



28-200mm F/2.8-5.6 Di III RXD

for Sony full-frame mirrorless (Model A071)

ソニーEマウント用 Di III:ミラーレス一眼カメラ専用レンズ

\*現行のレンズ交換式高倍率ズームレンズ（ズーム比7倍以上）において。（2020年5月現在。タムロン調べ）



■ <i>Gallery</i>	JPS ギャラリー 垂井俊憲、大竹英洋、小西貴士、秦 達夫 ..... 5 大石芳野、生原良幸
■ <i>First Message</i>	会員総会を終えて ..... 野町和嘉 11
■ <i>Focus</i>	新型コロナウイルスが与えた写真界への影響 ..... 12
■ <i>Telescope</i>	創立 70 周年特集 創立 70 周年を迎えて「JPS と私」 ..... 14 会員：生原良幸、宇井眞紀子、木村恵一、清水哲郎、田沼武能、中川幸作、水越 武 賛助会員：富士フィルムイメージングシステムズ株・西村 亨、キヤノンマーケティング ジャパン株・中村真一、株ニコンイメージングジャパン・森 真次
■ <i>Wonder Land</i>	<座談会>創立 70 周年記念写真展「日本の現代写真 1985 ~ 2015」 ..... 20 表現の変貌をどう捉えたか 出席者：金子隆一(評論家)、野町和嘉(JPS 会長)、鳥原 学(評論家)、 田沼武能(常務理事)、司会：松本徳彦(副会長)
■ <i>Zooming</i>	写真の散歩道(新連載) コロナ禍で考えたこと ..... 鳥原 学 28
■ <i>World Topics</i>	WPP 大賞受賞の千葉康由さんに訊く ..... 30
■ <i>Archives</i>	「日本写真保存センター」調査活動報告(33) ..... 松本徳彦 32 —地震、津波、風水害など多発する災害ニッポンの記録—
■ <i>Workshop</i>	著作権研究(連載 49) 写真の公衆送信の基本を考える ..... 久保田 裕 34
■ <i>Exhibition</i>	第 45 回 2020 JPS 展 ..... 36
■ <i>New Face Gallery</i>	JPS2020 年新入会員展「私の仕事」 ..... 40
■ <i>Comment</i>	写真解説 ..... 43
■ <i>Wonder Land 2</i>	<座談会>写真雑誌の果たしてきた役割とこれから、そして文化 ..... 44 出席者：坂本直樹(月刊「カメラマン」編集長)、佐々木秀人(月刊「日本カメラ」編集長)、 佐々木広人(月刊「アサヒカメラ」前編集長)、菅原隆治(月刊「CAPA」編集長)、 JPS 出版広報委員会、司会：伏見行介(出版広報委員)
■ <i>Topics</i>	賛助会員トピックス ..... 52
■ <i>Books</i>	JPS ブックレビュー ..... 54
■ <i>General Meeting</i>	2020(令和2)年度第 21 回定時会員総会報告 ..... 58
■ <i>Annually</i>	2019 年受賞・出版・写真展(JPS 会員) ..... 59
■ <i>Infotimation</i>	追悼 = 名誉会員・奈良原一高 正会員・佐納 徹、植村正春、 ..... 64 塩田直孝、清水 薫／経過報告／編集後記
■ <i>Congratulation</i>	おめでとうございます 第 46 回「日本写真家協会賞」受賞 ..... 69 「凸版印刷印刷博物館」館長：樺山紘一さん
■ <i>Education</i>	2019 年度小学生を対象とした「写真学習プログラム」報告 ..... 70
■ <i>Message</i>	Message Board ..... 72 表紙・内堀タケシ、表 4 ・高城芳治

広告  
案内

■ (株)ヨドバシカメラ  
■ (株)タムロン  
■ ポートレートギャラリー

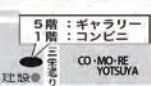
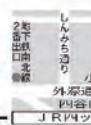
■ リコーイメージング(株)  
■ (一社)日本写真著作権協会(JPCA)  
■ (株)堀内カラー

■ キヤノンマーケティングジャパン(株)  
■ (株)シグマ

〈写真文化の発信基地〉みなさまの作品発表の場としてご活用下さい。



ポートレートギャラリーは、全国の写真館やスタジオからなる一般社団法人日本写真文化協会により、写真文化の普及、振興、そして育成を目的に運営されています。



— 人に出会い、自然に触れる —

**ポートレートギャラリー**

■JR 四ツ谷駅・四ツ谷口 徒歩 3 分 ■地下鉄丸ノ内線 1 番出口 徒歩 5 分  
■地下鉄南北線 2 番出口 徒歩 3 分

一般社団法人 日本写真文化協会

〒160-0004 東京都新宿区四谷 1-7-12 日本写真会館 5 階  
TEL : 03-3351-3002 FAX : 03-3353-3315  
URL <https://www.sha-bunkyo.or.jp>



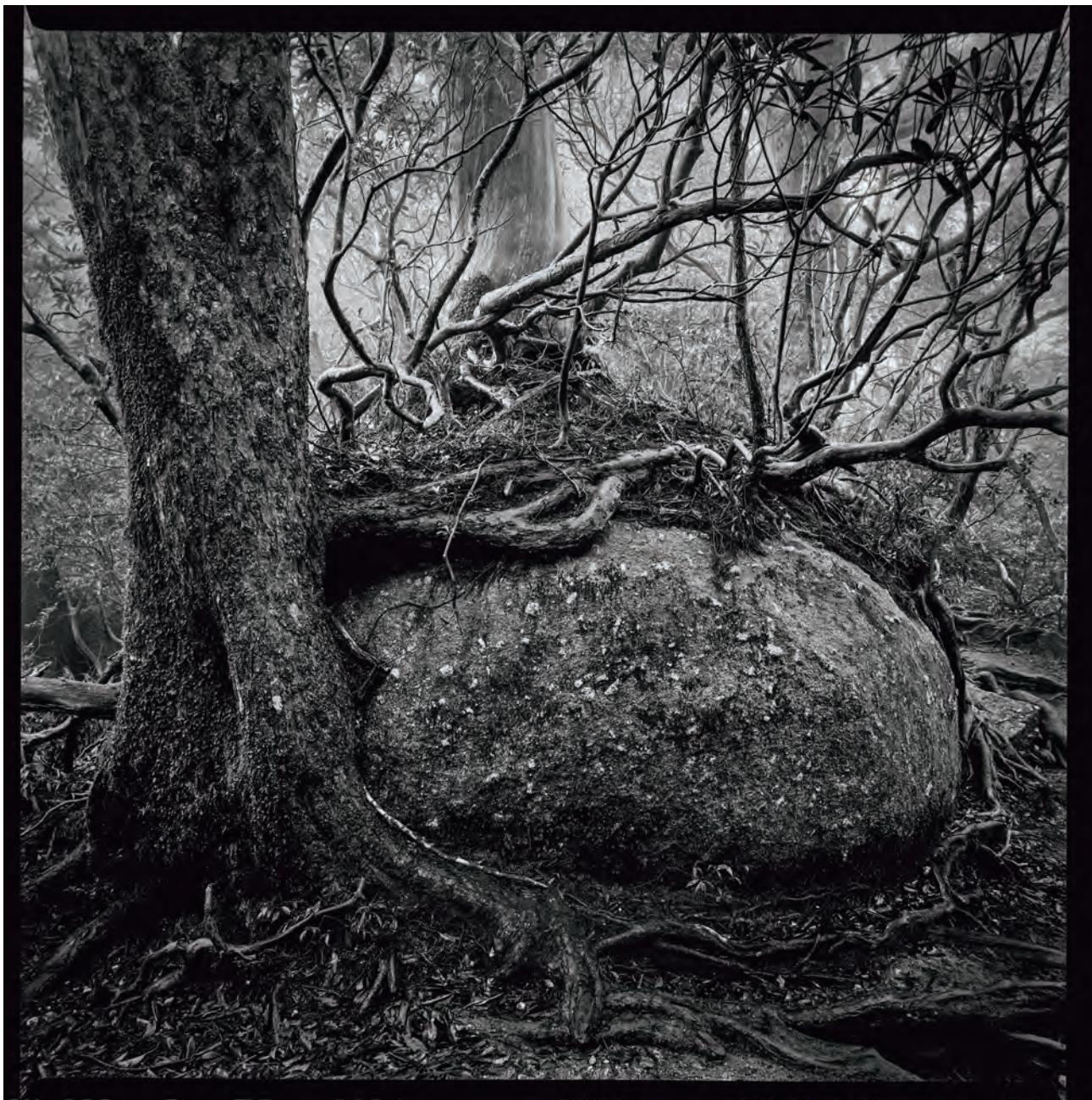
行事 出番待ちの親子、僧侶——垂井俊憲  
写真集『高野山 KOYASAN』・写真展「山上の聖地高野山」



ハドソン湾の結氷を待つホッキョクグマ——大竹英洋  
写真集『ノースウッズ 生命を与える大地』



チキュウニ ウマレテキタ——小西貴士  
写真集『チキュウニ ウマレテキタ』



Dinosaur egg —— 秦 達夫

写真集・写真展「Traces of Yakushima」



長崎 被爆のロザリオ——大石芳野  
写真集・写真展「長崎の痕」



「0歳」～令和元年 108人のBabyたち～——生原良幸  
写真展「0歳」～令和元年 108人のBabyたち～

# 会員総会を終えて

会長 野町 和嘉

新型コロナウイルスの感染拡大により延期になっていた定時会員総会を、2か月遅れての7月31日、ようやく開催にこぎつけることができた。参加人数を50名までと限定し、賛助会員と名誉会員の皆さんには来場をご遠慮いただき、外部理事にはリモートでの参加をお願いした。希望者はオンラインでの視聴可能というコロナ厳戒態勢で臨んだ総会開催であった。

正会員の出席者は26名であったが、いずれも協会活動に対して日頃から熱意を持って注視してくれている会員諸氏で、直面する諸問題について忌憚のない踏み込んだ意見交換がなされ、大変有意義な総会となった。形ばかりの報告会では終わらなかったことは何より良かった。

会員数の急激な減少による財政状況の逼迫、そして終わりの見えないコロナ禍により写真界が被っている影響等々、困難な時代の先を見据えた展望、見通しについて再三質問が出た。現在よりも会員数が400名ほど多かった時代に確立された当協会の組織を、現状を見据えてスリム化してゆくためには、定款の変更が必要となり、内閣府との協議、総会での承認を経る必要があるため時間と手間を要すること。また、固定費に関しては事務局フロアの一部を解約して家賃支払いの減額を図る。雇用形態を見直すことで人件費を抑えてゆく等の方針が示された。

総会終了後に開催してきた懇親会は、感染防止のために開くことが出来ず、やや物足りない幕切れではあったが、気軽に集うことのできないコロナ時代の対応策として受け入れてゆくしかないであろう。

協会のホームページや会報でその都度告知をしてきたが、4月7日の緊急事態宣言発令により、美術館、ギャラリー等が全て閉鎖されたことによって、2020JPS展は1年先への延期を余儀なくされ、名取洋之助写真賞、笛本恒子写真賞の公募、展示も中止せざるを得なかつた。そして今年度後半に予定されている協会事業

も、コロナ感染状況を注視ながら開催可否を判断していくことになる。

毎年11月に有楽町マリオンで開催してきたJPSフォトフォーラムは、リスクを考慮して、諸々の準備作業に取りかかる現段階で、開催は難しいと判断して、ウェブによる開催に切り替えて可能性を探ることとした。

コロナ禍の影響はボディーブローのように写真界をも蝕んでいる。カメラ誌の相次ぐ休刊をはじめとしてネガティブな情報に溢れている写真界にあって、一筋の明るいニュースがもたらされている。一人の広告写真家の呼びかけで始まった、コロナ禍と戦う医療関係者への支援を目的とした、ウェブ写真展によるプリント販売が共感を呼び、JPS会員を含む193名の写真家が参加した。5月上旬から7月末日の販売終了までに出展作品の中から549点が売れて、約345万円の寄付金を確保できた。逼迫する医療現場の窮状が連日報じられる状況下で、A4サイズのプリントにマット装幀で1点1万円という手ごろな販売価格もあって、多くの人々が関心を寄せてくれた。

(<http://hundredphotoexhibition.themedia.jp>)

この会報の前号に掲載した巻頭言を書いたのは、今年1月、ミャンマーへの短期取材中のことだった。そして、帰国したのちCOVID-19が急速に世界を覆いつくし、航空路もほぼ閉鎖されたままで現在に至っている。年に何度も海外取材に出かけることで日常を切り替えバランスを保ってきた写真家の一人として、長年続けてきたサイクルが断たれてしまっていることがじつに辛い。この雲行きでは、海外との自由な往来は年内は無理かも知れない。

最近になり国内での感染が更に拡大していることで、国内旅行にも制約がつきまとっており、JPS会員の多くが、現場に立てないストレスを抱えながら悶々と耐えていることであろう。新しい日常の中で、個々のスタイルを模索していくしかない。

# 新型コロナウイルスが与えた 写真界への影響

未だ収束する気配がみえない新型コロナウイルス。世界的に感染拡大を続ける新型コロナウイルスは、さまざまな業種・業界に影響を与え、私たちの生活を大きく変えようとしている。写真界も例外ではない。昨年末から8月までの出来事を写真界を中心にまとめてみた。

最近では、マスク姿で外出することが当たり前になり、この半年あまりの間で、私たちの生活スタイルは、大きく様変わりした。テレワークや在宅勤務、オンライン学習が普及するようになり、地方への遠出や夜の街での飲み会などは、自粛が求められている。

新型コロナウイルスは、昨年末に中国・武漢市で患者が発見されてから、わずか数か月のうちに世界中に蔓延した。各地で都市封鎖（ロックダウン）が行われ、世界的な感染拡大を抑える必要から、航空機による移動が制限。日本では外出の自粛が要請され、一斉臨時休校、緊急事態宣言の発出と、経済活動はほぼ停止状態に追い込まれた。

最初に大きな影響を受けたのはカメラ、レンズの製造部門だ。都市封鎖や輸送機の減便などにより、部品や部材の入手が困難になった。たとえ中国に工場がなくても、協力工場で製造される部品に中国製品が含まれているだけで製品の組み立てができず、出荷に遅れが出るということが多く発生した。サプライチェーンの見直しや代替え品への置き換えなどの対策が進められているものの、まだ完全には対応し切れていないというのが実情のようだ。

## ■自粛・自肃・自肅 そして仕事がなくなった

写真家の仕事は、現場に出掛けて行って、被写体と対峙し、シャッターを切ることに尽きる。そもそも外出を控えることなど、できない相談と言っている。しかし新型コロナ



2020年2月末日で閉館したリコーイメージングスクエア銀座。休館中にひっそりと閉館することとなり、リコーイメージングスクエア新宿に統合された。



2020年2月5日にベトナムから香港経由で帰国したときに受け取った証明書。説明や指示は特になく、水際対策としては心許ないものだった。

ウイルスにより写真家は、どう撮るか以前に、どうやって仕事をするかを考えなくてはいけなくなった。

大小さまざまなイベントの中止は、写真家にとっては被写体そのものがなくなることを意味する。

2020年最大のイベントになるはずだったオリンピックの延期だけでなく、プロ野球の開幕も延期、Jリーグは開幕直後に中止となった。再開はいずれも6月下旬からだ。こうした大規模なスポーツイベントの中止・延期により、多くのスポーツカメラマンや関連する人たちの仕事も一時的になくなってしまった。

また人が集まるのを防ぐために、お花見をはじめ花火大会やお祭り、甲子園の高校野球など、毎年恒例の多くのイベントの開催中止が決定されている。

学校関係で働く写真家も少なくないが、卒業式や入学式といった節目の行事も一齊休校の時期と重なったことで中止、あるいは規模を縮小して行われた。さらに、留学生の入国が困難なことから、学校運営そのものも危うくなっている。

海外に目を向けると、F1やMotoGPといった各国を転戦するワールドシリーズも会場ごとに延期や中止が決定。オリンピックに関しては、予選が開催できずに出場選手が決定していない競技がまだいくつもある。

こうしたイベントの中止や延期は、それを撮影、取材する写真家にとって、まさに死活問題だ。また、海外で取材する写真家は、イベントの中止に加えて行動も制限され、一時は帰国することさえ困難な状況となつた。

## ■スポーツだけじゃない イベントの中止

2月に開催予定だったCP+2020、さらに5月のフォトキナの中止は、業界に大きな衝撃を与えるものとなった。CP+では、各社から新製品の発表やお披露目が予定されており、ブースでのステージイベントに登壇を予定していた写真家も少なくないからだ。まだ感染拡大の少ない2月末～3月の開催ということで、強行開催を押す声もあったようだが、結果的には影響を最小限に抑えることができたと言えるだろう。

一方フォトキナ2020は、ドイツ国内での感染者増加に伴う大規模イベントの規制、入国制限などの措置により、やむなく中止にせざるを得なかった。世界最大の写真・映像用品展示会であるフォトキナは、2018年に隔年開催か

ら毎年開催への変更を宣言。2019年は前回から半年後の開催となることから、中止になったという経緯がある。それだけに、2020年の開催に寄せる期待は大きかった。



「フォトキナ 2020」の開催概要を説明するケルンメッセのフォトキナ事業本部長、クリストフ・ヴェルナー氏。2020年2月26日に来日し、日本のメディアに向けた記者会見を開催した。

## ■休館と休刊により 作品発表の機会が消失

人が集まることを避けるということから、緊急事態宣言の発出後には、美術館、博物館、ギャラリーなど、多くの施設が休館を決めた。最大で約2か月に及んだギャラリーの休館は、写真家にとって発表の場を奪うことにもつながった。また、サービスセンターを併設するメーカー・ギャラリーの多くは、修理の受け付けを予約制にしたり、配送に限定するなどの対応に切り替えた。

7月になりギャラリーの再開が徐々に始まったが、休館の間に閉館したり、閉館を決めたギャラリーもあった。開館後も営業時間の短縮や入場制限など、慎重な運営再開となっており、通常営業に戻るには、しばらく時間がかかりそうだ。

『カメラマン』、『アサヒカメラ』の2誌の休刊も衝撃的な出来事だった。これまで『ポパイ』や『平凡パンチ』など、雑誌の休刊が話題にのぼることがあったが、多くの業界関係者にとって、学生時代から愛読していた雑誌がなくなることの喪失感は計り知れない。また、写真家の活躍の場が失われただけなく、アマチュアの発表の場がなくなってしまったことも寂しい限りだ。

## ■まだ終わりではない コロナとの共存へ

国内の感染者数は4万人を超える、世界の感染者数も2000万人に迫ろうという勢いで、新型コロナウイルスの脅威はまだ収まりそうにない(8月3日現在)。特效薬も有効なりクチンもまだ開発されていない状況から、収束するまでに数年を要するという話も聞かれる。

収束までに



厚生労働省のホームページ。新型コロナウイルスの最新情報が確認できる。

時間がかかるれば、それだけ経済への影響も大きくなる。写真を取り巻く状況は、ますます厳しくなっていくだろう。新たに休刊する雑誌が出てこないとも限らないし、オリンパスやベルボンのように、事業を手放す企業も出てくる可能性もある。また、日本のメーカーがシェア90%以上を占めるカメラ業界だけに、大規模な業界再編があってもおかしくない。

しかし、暗い話ばかりではない。最近は、オンラインでの製品発表会やファンイベントなど、オンラインを利用したイベントや情報発信も増え始めている。また、写真教室もオンラインで再開され始めるなど、アフターコロナに向けて、これまでとは違ったコミュニケーションが創り出されている一面もある。さらにPHOTO NEXTのように、10月のイベント開催を諦め、早々に来年の開催に向けて準備を始めたところもある。リアルイベントは、闇雲に来場者数を増やすわけにいかなくなっただけに、撮影会や体験会、ファンミーティングなど、今後の在り方が問われることになっていくだろう。

コロナが収束したからといって、仕事も社会も、全てがこれまでのように元通りになるわけではない。技術の進歩と社会の変化に併せて、写真家も「写真とは何か」をもう一度考え、新たな生き方、仕事の在り方を模索していく節目を迎えているのかもしれない。

写真家にとって、今は撮ることを諦めない努力をするとき。継続のための制度を活用して、事業の継続を目指してもらいたい。

(記／出版広報委員・柴田 誠)

### ■新型コロナウィルス関連の個人向け補助金、助成金、給付金

- ・持続化給付金(経済産業省)
  - ・個人事業者：100万円／法人：200万円
- ・小規模事業持続化補助金(日本商工会議所)
  - 50万円(※特例事業者特別枠100万円)
- ・住居確保給付金(厚生労働省)
  - 原則3ヶ月分、最長9ヶ月分の家賃相当額
- ・東京都家賃等支援給付金(東京都)
  - 国家賃支援給付金に独自の上乗せ給付(3か月分)
- ・子育て世帯への臨時特別給付金(内閣府)
  - 児童手当を受給する世帯の子供1人につき1万円
- ・事業収入が減少する場合の納税猶予の特例(国税庁)
  - 国税の納税を原則1年猶予
- ・個人向け緊急小口資金等の特例(社会福祉協議会)
  - 最大20万円(無利子)の緊急小口資金の融資
- ・新型コロナウイルス感染症対応緊急融資(東京都)
  - 運転資金10年以内(据置期間5年以内)／設備資金15年以内(据置期間5年以内)
- ・感染症対応融資(市町村)
  - 無担保4千万円まで、融資期間：10年以内(据置期間5年以内)
- ・危機対応融資(東京都)
  - 融資期間：10年以内(据置期間2年以内)

※記事の内容は8月上旬の執筆時点のものであり、掲載時点とは状況が異なっている場合があります。ご了承ください。

# 日本写真家協会創立 70 周年特集 創立 70 周年を迎えて「JPS と私」

JPS 70



## 「ポリタンクの水と宝物」 ～JPS 入会 38 年～

生原良幸

1982 年、先輩写真家に誘われて JPS に入会した。当時の会長は三木淳氏で、副会長は川口政雄氏、細江英公氏、芳賀日出男氏の 3 氏だった。特に川口

政雄氏には若造の私に気さくに「これからは若い人たちが頑張ってほしい」と良く言われた。

1988 年に法人化の問題で三木会長以下全役員の総辞職、そして社団法人・事業協同組合が併設され現実的に理解出来なく苦慮したのが思い出される。

1995 年 1 月 17 日、阪神・淡路大震災が発生した。今まで経験したことの無い揺れで地震だとは思えなかつた。自宅マンションで立ち上がり切れず四つん這いになつてひたすら耐えていたのが昨日のようだ。

当時、私は関西メンバーズ展の実行委員長をしており、写真展開催中の展示作品が気になった。JPS 会員たちの大切な作品である。幸い 1 点の作品落下も無く無事だったが、私自身が身動きが取れない。電気・ガス・水道の無い中、JPS の友人がポリタンク 20ℓ の水を届けてくれたのが泣きたいほど嬉しかった。

翌 1996 年、関西メンバーズは「感動と勇気を！」と題してオリジナルプリントを販売する写真展を開催した。作品は関西の先輩方の素晴らしい作品が並び圧巻であった。被災された人達に感動と勇気を与えることができ、売り上げの中から 20% を赤十字基金に寄贈、社会的にも評価され JPS の存在を知つてもらえた写真展であった。打ち上げを兼ねた新年親睦会は、今は亡き懐かしい人の顔も見える。

入会 38 年、顔を合わせ度に先輩写真家からいろんな言葉をいただいた。叱咤激励、勇気づけられたり悔しい思いもあった。東京と大阪に事務所を置き、海外での仕事に明け暮れていたが、JPS 先輩写真家達からいただいた数々の言葉は今も忘れられない。



残念ながら鬼籍に入られた方が多くなってしまったが、この宝物は私だけのものである。

(1982 年入会、2015 ~ 18 年関西地区委員会 委員長)



## 「JPS と私」 宇井真紀子

1993 年 4 月、JPS の新入会員が集まる説明会。雪靴を履いて暖炉裏の匂いのついたヨレヨレのセーターで出席したのを思い出します。アイヌ民族の撮影のため訪れていた北海道から、機材を担いだまま出席しました。入会審査が厳しくて、入会が許可された時はプロフェッショナルとして認められたようで、とても嬉しく思いました。ですから、その会にはキチンとした格好で行きたかったのですが、ギリギリまで撮影をした結果、上記のような姿での出席となってしまいました。

今となっては女性写真家も多く、写真学校の学生も女性の方が多いくらいですが、当時は女性写真家がとても少なかったと思います。入会してすぐに女性写真家の座談会にも呼んでいただき、拙いながらも発言しました（写真 P18）。JPS 展の実行委員会のメンバー（お手伝い）としてお声がかかったりもしました。正直ちょっと面倒くさいなと思いましたが、お陰で諸先輩方や同時期に写真界にデビューした仲間たちと知り合うきっかけを与えていただきました。以前から作品をたくさん拝見していた高名な写真家さんに次々お会いして緊張したものです。その後、写真展を開く度に幾人かの大先輩の方々は必ず観に来てくださり、毎回とても嬉しくもあり恐縮します。その都度、暖かい言葉や時には厳しいご意見をいただき、とても励みになっています。私も見習いたいと思いつつもなかなか実践出来ていません。

最近の思い出としては、第 1 回 笹本恒子写真賞をいただいた事です。日本の女性報道写真家第 1 号の笹本恒子さんの名前を冠した賞の第 1 回目の受賞者になれた事は、本当に嬉



2017 年 記者会見で 笹本恒子名誉会員と共に



1952年 創立当時の協会章



1951年 第1回協会展ポスターとミス・カメラの選出



1956年 「日本写真家協会会報」第1号表紙



1957年 箱根大撮影会 箱根園

しく思いました。亀の歩みのようにゆっくりですが、丁寧に向き合うことを大切しようと撮影を続けてきたことを誰かが見ていてくれたことにとても感激しました。還暦を迎えたことですし、少しは後輩の見本となるよう精進したいと思います。

(1993年入会、第1回篠本恒子写真賞 受賞)



### 「JPS創立100周年に向って」 木村恵一

公益社団法人日本写真家協会 創立70周年おめでとうございます。感慨もひとしおです。私が協会に入会できたのは、創立から11年経過した1961年でした。

日本大学芸術学部写真学科と共に学んだ熊切圭介君と当時の会長であり、大学の恩師でもある渡辺義雄先生と先輩の伊藤則美さんの推薦で何とか入会することができました。早速名刺をつくり、肩書に日本写真家協会会員の文字が眩しかったことを今ではっきり憶えています。まだ若輩の26歳の春でしたが、当時は高度経成長期の初め頃で週刊誌や月刊誌が日々創刊され、入会数年後の若輩の私などでも週刊誌や月刊誌に連載ページを何本も持てた時代で、公害問題や社会現象など硬派のテーマや人物ものを手がけ、撮影から帰ると即暗室に飛びこみ現像密着そして引出し原稿を数十枚徹夜でつくり上げ、翌朝には編集部に届けるのがあたり前の多忙な日の連続でした。

その後少し落ちついた頃、大学で同期だった連中と集まり“六の会”という写真集団をつくり上げ、写真展などをよく立ち上げました。メンバーは、熊切圭介、齋藤康一、松本徳彦、故人となった野上透、高村規と私。

6人共当時写真家協会の委員（後の理事）に推されそれぞれの分野で活動してきましたが、私は協会の会報を中心に広報担当でしたので多くの会員の方々に接することができました。

協会は創立以来、写真著作権法改正への長い運動を経てきました。写真公表後10年という信じられないような写真の著



六の会 写真左から木村、熊切、齋藤、高村、野上、松本

作権が死後起算50年になり、祝う会が1997年1月に行われましたが、初代会長の木村伊兵衛先生、二代目会長渡辺義雄先生はじめ長い期間に渡って改正運動に力を注いできた多くの先輩諸氏には頭が下がる思いでいっぱいです。私もかつて広報理事として多少なりともお手伝いできることを誇りに思っております。

今、写真界はスマートの急速な進化発展によりカメラ業界の不振が伝えられ、92年間写真表現をリードしてきた『アサヒカメラ』が休刊、さらに新型コロナウイルスで世界中の数千万人の人々が感染し苦しめられる暗い時代を経験しています。しかしども明るい素晴らしいニュースもありました。田沼武能元会長が文化勲章を受章されたことでした。もちろん写真家では初めての快挙で長い期間に亘って優れた写真作品を多数発表し多方面での写真文化発展に大きく寄与されたことが評価されてのことでした。

今後、日本写真家協会がどのような活動をしてゆくかはわかりませんが明るい未来が待っていることを信じています。そして創立100周年に向ってさらに発展してゆくことを心より願っております。

(1961年入会、2012年名誉会員)



### 「組織の力」 清水哲郎

22歳で1997JPS展優秀賞、23歳で1998JPS展銅賞、29歳で入会し、30歳で第1回名取洋之助写真賞を受賞。新入会員展やJPS展実行委員を務めた後にJPS展や名取賞の審査員という名誉ある役職も授かりました。諸先輩方がコツコツと築いてきた70年の歴史には到底及びませんが、現在45歳の私のおよそ半分、23年間をJPSにお世話になっています。

プロ写真家にとってJPS会員になることはスタートでありゴールです。多くの写真家やメーカー、ギャラリー、写真業界の方々と交流を深め、見聞を広め、刺激を受けられるのも会員ならでは。私のようなフリーランス（個人事業者）にとって公益社団法人の一員でいられることは誇りであり、実績以外の部分で役立っていると感じています。若輩ながら20代の頃から審査員として主要コンテストから地方の小さなコンテストまでお

呼びがかかるべき  
たのは良い例かも  
しません。「何も  
してくれないのに  
会費が高いJPS」  
と聞くことがあります  
が、JPS会員の肩書きをこの会  
費で利用できるのはお得です。損得勘定は抜きにしても、会員である以上、利用できるものはとことん利用。  
改革が必要なものはアイデアや意見を出し合い、心地よいJPSを作っていくましょう。

今、世界はコロナ禍のまゝ只中にあります。写真業界はおろか、自身も明日は我が身を感じていますが、大変な時だからこそ組織の強みを写真の力を感じたいと思っています。皆で手を取り合い、踏ん張り、行動に移せば必ずや苦難を乗り越えられるはず。仕事も激減、海外渡航も制限される中で「好きだから続ける」という綺麗事がいつまで言えるのかはわかりませんが、写真家として諦めない限り、前を見続けていきます。業界全体が落ち込む中で「70周年おめでとう」の雰囲気にはなかなかなれませんが、今後80、90、100周年と続していくJPS。「あの頃は大変だったね」と懐かしがる日が一日も早く訪れる事を願っています。

(2004年入会、第1回名取洋之助写真賞受賞)

## 「JPS70年の歴史は、私の写真人生」

田沼武能

今年はJPS創立70年である。めでたいと思うと同時にその足跡の経過に日本写真界の歴史を感じる。私は創立に参加した数少ない生き残りの一人である。創立のための集会は東京、内幸町の飛行館ビルの地下喫茶室で行われた。小さな店であったので参加者が店から溢れるほどであった。因みにその時集まつたのは木村伊兵衛氏をはじめ渡辺義雄、杉山吉良、田村茂、牧田仁、林忠彦、秋山庄太郎、村井竜一氏らで、若手では石井彰、石井幸之助、三堀家義、芳賀日出男、船山克、渡部雄吉氏ら六十数名であったと思う。その後のお声掛けした人を含め創立会員は七十数名になった。その中には真継不二夫、尾崎三吉氏らも入っていた。みんな写真界の未来を夢みて希望に燃えていた。集まつたのはもちろん職能写真家で、私は創立母体の一つ「青年写真家協会」に所属していたので参加出来たのだ。会長には木村伊兵衛先生が選ばれた。先生は何事も面倒なことは嫌いな性分だったので、会長の雑用は助手の私が務めることになった。会員になったのは七十数名、その数ではとても事務局を置くことは出来ない。協会の上層部の友人である有楽町にあった写真材料商の山田義人さ



2005年 第1回名取洋之助写真賞 受賞式にて

の店が引き受けてくれた。

何はともあれ日本写真家協会を社会に広報しなければ、1951年に「第1回日本写真家協会展」を日本橋三越百貨店で開催した。オープニング当日、ミス・カメラを選出し、それを新聞等メディアが取材するという華やかなスタートとなった。

協会は職能団体として写真家の職能を確立擁護するとともに、その相互扶助を目指して似て文化に寄与すると決めた。また事業内容は、1、著作権の確立、擁護 2、写真技術に関する研究、改善 3、資料の斡旋 4、会員間の親睦ならびに扶助に必要な諸般の事業、税務対策 5、国際写真文化の交流提携 6、展示会、その他の企画実行 7、発表機関の開拓、斡旋 8、その他 目的の範囲内において必要と認めた諸事業等を理想とする項目をかかげた。

日本は1945年太平洋戦争に敗北し、貧乏のどん底にあつたが少しづつ人間らしい生活ができるようになっていた。

49年10月に『アサヒカメラ』が復刊した。それを前後してカメラ雑誌が復刊、創刊した。一般雑誌も復刊、創刊が続き写真家の仕事が増え若者たちの仕事として脚光を浴びる勢いであった。写真を撮ることを趣味にする人が増える。日本のカメラ会社はコンパクトカメラ、高級カメラの製造に拍車をかけた。日本がカメラ王国になると同時に日本国民一億総写真愛好家と言われるほど写真が普及されてゆく。JPSも写真の普及の一翼を担うことになり、会員たちは総力で企画展、撮影会などを続け、10年後の1961年に会員数が500人を超えた、東京・銀座に事務所を設け、事務局員を1人雇うことができた。その原資となったのは、その前年に西武百貨店で開催した共同制作「ここにあなたは住んでいる」写真展、写真集『東京』(編集・名取洋之助、発行・朝日新聞社)を出版し、そこで得た資金であった。勿論写真は会員たちが提供した。

JPSでは1963年から主に雑誌、書籍等の写真使用最低料金規定を作り、会長名で各出版社に申し入れを行ってきた。80年には1頁1点30,000円以上をお願いしている。

1990年代になると社会はドキュメントのみならず、ファッション、コマーシャルなど時代の流行、スポーツやアートの分野に至るまで、写真はその時代を表現しており、多くのスター写真家が生まれている。まさに日本写真界のルネッサンス期といえよう。そしてこれらのプロ写真家の作品に憧れて500万人ともいわれる写真愛好家も生まれた。

写真の著作権の法改正は創立当初からの念願であった。日本の著作権法が施行されたのは、明治32年(1899)である。その時の写真の保護期間は「発行又は製作後10年」であった。ちなみに文芸、美術、学術、音楽は作者の死後30年が保護される法律であった。私たち日本写真家協会は、設立後、この保護期間を文芸、美術と同等にし



1988年 写真の日に数寄屋橋で写真の保護期間改正の署名活動をする田沼さん(左)ら役員

てもらうべく運動を始めた。そして「死後 50 年」になったのは平成 9 年（1997）で、協会が写真著作権の保護期間の法改正運動を始めてから、なんと 57 年もかかったのだ。いかに法律をかえる事が難しいかを思い知らされた。現在は写真著作権の保護期間は「死後 70 年」になっている。

2001 年には長年の念願であった社団法人が文化庁から許可された。2011 年には国の法人制度が変わり、申請により公益社団法人に認可され現在に至っている。

2000 年を超えると写真に関する環境は大きく変化し、銀塩フィルムからデジタルに変わり、発表機関が紙媒体から電子媒体になった。発表形式もどんどん変化してゆく新時代に、写真家がどう舵を取りどう乗り切ってゆくかは、写真界の未来を左右すると思う。

現在は戦後活躍した多くの写真家は高齢を迎え、亡くなられている。写真家が存命中に社会的評価も確立した写真の原板（フィルム）が、本人が亡くなると破棄されていることを耳にして、私は写真原板の保存をしなければいけないことを痛感した。「写真は、いま見えるものは何でも撮ることができるが、過去を撮ることは出来ない。」社会を、時代を写した写真は年月が経るほど重要な存在となることは、明治、大正、昭和、平成などを映した過去の写真により立証されている。この二度と撮ることのできない貴重な写真原板が破棄されることは日本文化にとって大きな損失である考え、JPSとしては、写真保存センターの設立を提唱し、現在は JPS が中心になり、「日本写真保存センター」を設立し、進行している。写真の保存は写真界の使命であると思う。これからも写真界の中心となり、80 年 100 年に向かい頑張ろうではないか。

（1950 年入会・創立会員、5 代目 JPS 会長～2014 年、  
2019 年文化勲章 受章）



### 「憧れの JPS」 中川幸作

私が憧れの JPS に入会したのが 1990 年 JPS 展名古屋展の初開催の年だった。この年に私と山口典利氏の 2 人が愛知県から入会した。入会後共通の推薦会員・故宅間喬夫氏より二人は JPS 展名古屋展初開催の人員増強の為に入会したのだと言わされたように思う。以後今日まで糸余曲折がありましたが 30 年間連続して JPS 展名古屋展に拘わってきました。

私の入会の推薦会員のもう一人が故高間新治氏で撮影の助手を数年やっていました。竹の写真の第一人者として第 1 回の写真展から写真家としての生き方を傍で見習いました。もう一人影響を受けた写真家が故臼井薰氏で二科会写真部の会員で自由奔放な作画は何冊もの写真集として残されましたし、JPS の戦後日本の生活を綴った写真展「日本の子ども 60 年」にも展示されました。2 人の写真家は作画の自由さと継続的重要性

を教えて下さいました。

私が写真の魅力にとりつかれた頃、JPS には憧れの写真家が何人もいました。中でも土門拳氏と一度だけお会いすることがあり眼光の鋭さに圧倒されましたし、細江英公氏のワークショップにも参加しプロの写真家の心構えについて教えていただきました。以後 JPS に入れるように多くの仕事をし実績作りに励みました。現在の入会者以上に憧れの気持ちは強かったように思います。作品作りは、憧れの 2 人を想いながら、各地の「文楽」「農村歌舞伎」や「節談説教」、私自身や友人の絵描きによる「パフォーマンス」等の撮影に力を入れました。今でも「節談説教」は続けていますし、パフォーマンスは舞台撮影に変わりました。

JPS の魅力は何と言っても憧れの会員がいることだと思います。会員それぞれが職業写真家として JPS に入会を認められた訳ですから、それぞれの表現の自由と継続性を貫き入会希望者の憧れになるよう努力することが JPS の拡大発展に寄与する事だと思います。

（1990 年入会、1995 JPS 展名古屋展 運営委員長）



### 「恩人」 水越 武

糸余曲折ある長い道程を歩む中で、誰でも人生の恩人とも言うべき一方的に世話をになった人との巡り合わせがあるものだ。

私は 1972 年に JPS に入会しているが、この年の前後 5 年間程の石井彰さんとの邂逅とご厚情は忘れることができない想い出である。

1971 年の初めての個展「穂高」の会場で、翌日の予定を石井さんに問い合わせたときから始まる。当日、約束した時間ぴったりに、ゆっくりと階段を上がって来られ、その日は近くの上品な小料理屋でおいしいお酒と食事をご馳走になった。その時の話題は私のモノクロームの写真展の印象と、石井さんが当時企画を進めておられた土門拳の写真展「古寺巡礼」に尽きていたように覚えている。帰り際、次に上京したら会社に遊びに来るよう言われた。他にも仕事の話があつたりして、それほどの時間を置かずに再び上京し会社に伺った。

当時の富士フィルムの本社は西麻布に近い六本木にあって、珍しい丸い形をした高層建築だった。受付には制服姿の美しい女性が二、三人控えていた。私はゴムゾーリを足に突っかけたよれよれの姿で気後れしたが、男は衣裳などどうでも良いのだと自分に言い聞かせて足を前に運んだ。社会とうまく折り合うことが苦手だった私は、電話で約束をしていなかったら極端なミスマッチに逃げ帰ったに違いない。

写真界にあまりに疎い私を心配されたのだろうか、そ

の日の内にJPSの入会を勧められ、必要なもう一名の推薦者として海外のドキュメント写真の多かった渡辺雄吉さんの所に石井さんの車で直行し、決めていただいた。

入会金に関してはまったく記憶がないが、今から考えると立て替えていただいたようだ。その上1~2年の内に、当時有楽町にあった富士フォトサロンで企画展を開催するように指示された。それが富士フィルムにバックアップを受けた1973年の個展、モノクロームで生きものを撮った「山で出会った動物たち」である。

その後石井さんは体調を崩され、上野の森の寛永寺に眠っておられる。半世紀近く経った今でも私は近くを歩く機会があると石井彰さんの面影を偲んでいます。

(1972年入会、2009年芸術選奨文部大臣賞受賞)



### 「JPSと富士フィルム」 富士フィルムイメージング システムズ株式会社 代表取締役社長 西村亨

1962年に富士写真フィルム株式会社（当時）は賛助会員として入会させていただきました。

以来、写真家の皆様の創作活動のために高い品質のフィルム、印画紙、カメラなどを製造・販売するビジネスに加え、日本の写真文化発展のためにご尽力されている日本写真家協会を側面より応援させていただいております。

2005年のトライアルから始まった小学生を対象とした「写真学習プログラム」は、当初の「写ルンです」を用いた仕組みから、デジタル化の進行にあわせて新しい仕組みに形を変え模索しながら継続して実施し、数多くの小学生に参加いただき「撮る楽しみ」を知つてもらいました。さらに撮った作品を弊社が主催する参加型写真展「Photo is」（現在はPhoto is 10万人の写真展）に展示することによって、「人に見てもらう楽しみ」を感じていただいております。次の世代の文化形成を担う子どもたちに、写真文化を理解してもらう貴重な体験を日本写真家協会の皆様と力をあわせて提供できているものです。

また「名取洋之助写真賞」におきましては、受賞作品を富士フィルムフォトサロン（東京・大阪）にて展示し、多くの方に鑑賞していただき、受賞した若手写真家の知名度アップに貢献させていただいております。こ



1994年 女性会員による座談会 JPS会議室



1995年 日本現代写真史展「記録・創造する眼」チラシと会場

の写真賞からは多くの著名作家が育ち、日本の写真文化向上にお役に立てているのではないかと思います。

その他、写真的記録的な価値を守

り、歴史的に貴重な作品を後世に伝えていく「写真保存センター」事業や「JPS展」などの各種事業への協力など、様々な形で写真文化の発展に微力ながらお手伝いをさせていただいております。

一方、日本写真家協会様からは「日本写真家協会賞」の栄えある第1回（1967年）に富士フォトサロン（当時）と、富士写真フィルム株式会社（当時）も第20回（1994年）に選出いただき深く感謝しております。

引き続き質の高い製品を作り続けるとともに、写真の価値を多くの方にご理解いただけるよう共に歩んでいきたいと思います。



### 「持続可能な写真界するために」 キヤノンマーケティング ジャパン株式会社 プロサポート部部長 中村真一

公益社団法人日本写真家協会の皆様、記念すべき創立70周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。

1950年の創立以来、一貫して写真家の創作活動や地位確立、写真文化の発展に尽力されてきたことに対して、心から敬意を表したいと思います。

これまでのJPS70年間の歴史をひと言で表すならば、「写真文化を後世に正しく残していく活動の歴史」であると思います。

一例をあげますと、1965年の全日本写真著作者同盟（現JPCA）設立への働きかけ、1967年創設の協会賞、1976年創設のJPS展、1997年の写真著作権法の改正、2007年の写真保存センター設立への働きかけや第1回JPSフォトフォーラム開催などがあげられます。

また一方で、私どもキヤノンも、一貫して独自のカメラづくりにこだわり、写真文化発展とともに歩んでまいりました。JPS発足当時の1950年代はちょうどIVSb



「5万人の写真展 2019」会場にて



1997年 著作権法改正を祝う会

(1954年)などのレンジファインダーからキヤノンフレックス(1959年)などの一眼レフへの移行期であり、日本のカメラ技術が世界に認められ、高度経済成長と相まって写真機が急速に普及し、様々な写真表現が発展していく時代と重なります。その後キヤノンは初のプロ機F-1(1971年)を投入し、1973年には「キヤノンサロン」を開設するなど、JPSの皆様と一緒に写真界の歴史を作り上げてまいりました。

その後1980年代のAF化、2000年代のデジタル化と、カメラ業界はおよそ20年サイクルで大きな技術変革を経験してきました。

本格的なミラーレス時代の幕開けとなるべき2020年を迎えたはずでしたが、世界中で新型コロナウィルスが猛威を振るい、写真業界のみならずあらゆる業界や文化芸能活動が大きな分岐点を迎えています。また世間ではSDGs(持続可能な開発目標)なるビジネスワードも注目されています。そうした中、賛助会社である弊社も、今までの延長上ではなく全ての活動をゼロベースで考え直す必要に迫られています。これは必ずしも「〇〇をやめる」という事ではなく「〇〇を続けていくにはどうしたら良いか」を過去の前例に捉われずに考え直す、という事でもあります。

写真的持つ使命は「記録・記憶をビジュアルで未来に残すこと」です。そしてJPSや賛助会社の使命は「写真と写真制作活動を未来に残すこと」です。人類にとって必要不可欠な表現メディアである写真と写真界をこれからも永続的に継承していくためには、今までとは違った視点での取り組みも必要かもしれません。

ウィズコロナ時代である今だからこそ、JPSと賛助会社が従来に捉われない発想で知恵を出し合いたいと考えます。そして、10年後も30年後も100年後も、写真文化の灯が煌々と照らされている素晴らしい社会であり続けることを望んでやみません。



「恩師三木淳先生のこと」  
株式会社ニコンイメージング  
ジャパン 執行役員 カスタマーリレーションズ本部  
副本部長 森 真次

JPS 70周年誠におめでとうございます。この歳月は、会員お一人お一人がそれぞれの分野で



2001年 社団法人設立を祝う会



2005年「日本の子ども 60年」展ポスターと会場



2007年 第1回フォトフォーラム

広くご活躍され、日本の写真界を大きく牽引してきた証とお喜び申し上げます。

さて、今般「JPSと私」というテーマで何か寄稿せよという大変光栄なお話しを頂きました。小生にとってJPSというと第一に思い浮かべるのが恩師三木淳先生のことです。1985年度の1年間、日本大学芸術学部写真学科で三木先生のゼミ生として多くのことを学ばせて頂きました。

三木先生はご存知の通り1980-88年まで、JPSの第3代会長であられました。その後、JPSを離れられ、新たな写真団体JPAを立ち上げられました。当時の経緯をご存知の方も今となっては少なくなっていることでしょう。小生自身も当事者ではありませんでしたのでよく存じ上げております。

三木先生の思い出としていくつかお話しをさせて頂きます。先生は常に写真家の地位向上を目指されていました。ある日、大学の助手の方が昼間に先生に対して「おはようございます」と挨拶したようなのです。その後のゼミ授業の中で先生は猛烈に激怒されていたことを今でも覚えています。写真家は芸能人のようにキャラキャラしてはいけない、昼間の挨拶には「こんにちは」と言いなさいと。また別な話ですが、普段着はジーパンでもいいがスーツが相応しい取材現場の為にジャケット&ネクタイを持っているようにと教わりました。そこでお薦めはブルックスブラザーズのブレザーとネクタイであり、当時卒業するゼミ生たちは毎年ブルックスのネクタイをお揃いで買い求め、三木先生にも1本お贈りしたものです。そのブルックスブラザーズの米本国社が破産したというニュースが先日舞い込んできましたが、時代の移ろいを感じずにはいられません。

1992年2月22日先生は急逝されました。もう28年もの月日が経ちました。小生がニコンで働かせて頂いているのも先生のおかげです。昨年先生の生誕100年を記念する写真展をニコンのTHE GALLERYで開催できたことが心の糧となっています。

最後になりますが、コロナ禍、スマートフォン・SNSの普及など、生活様式や行動志向が大きく変革しています。写真、そして写真家の在り方も大きく問われているように感じます。是非、JPSのみなさんがその挑戦者であり、先導者であり続けて頂きたいとお願い申し上げ筆を置きます。

＜座談会＞ 創立70周年記念写真展「日本の現代写真 1985～2015」  
—表現の変貌をどう捉えたか—



出席者：金子隆一（評論家、「日本の現代写真」編纂委員）、野町和嘉（JPS会長、「日本の現代写真」編纂委員）、  
鳥原 学（評論家、「日本の現代写真」編纂委員）、田沼武能（常務理事、「日本の現代写真」監修）  
司 会：松本徳彦（副会長、「日本の現代写真」編纂委員） 進行：JPS出版広報委員会  
2020年6月19日（金）於：JCII会議室

■ 30年間を3つに分けると時代の変化が見える

松本 『日本の現代写真 1985～2015』に関する懇談会も、今日で4回目を迎えました。3回目までは編纂の過程における時代性や表現性の見直しについて語っていましたが、ほぼ全体像が決まりましたので、今回は全体を通して語っていただこうと思います。1985年から2015年までの30年間を10年ごとに3つに分けると、1985～1994はフィルムの全盛時代、1995～2004年はフィルムからデジタルへの移行期、2005～2015年はほぼデジタルの時代。それぞれ当時の写真表現の変化と時代をどう捉えたかや社会的な出来事を加えれば、と思います。

田沼 『日本の現代写真 1985～2015』は、日本写真家協会創立70周年を記念し、写真が時代とともにどう変化していったかを皆さんに見ていただきたいということで始めたプロジェクトです。編纂委員の方には長期間かけて写真を選んでいただき、ようやく形になってきました。フィルム全盛期の時代からこの30年間に、すごい勢いで写真をめぐる環境が変わってきました。フィルムからデジタルに変わった段階で、撮れる内容が変わってきたし、2005年以降、誰でもカメラを持てば写真が撮れるようになった。それと同時に、間違なく写ったものはあまりありがたがられなくなってきた、時には焼き物の窯変のように思いがけなく生まれた作品が脚光を浴びたりする。これもひとつの

時代の変化だろうと、私は思っています。

しかし、ジャンルが変わっても、写真の原点は「記録」であると考えています。きちんと記録したものが、後世にいろいろな情報を伝えていくのは写真ではないか。もちろん、いろいろなジャンルの写真を撮る方がいるのが当たり前で、表現もそれぞれ違うでしょう。そうであっても、やはり写真の基本は記録であると、写真をセレクトしながら改めて痛感しました。



田沼 武能 常務理事

野町 座談会には初めて参加しますが、85～94年はグラフ誌全盛の時代で、僕の実感としては一番面白い時代だった。この時代の活気を最も象徴しているのは、写真雑誌『FOCUS』現象だと思います。88年には『DAYS JAPAN』、91年に『マルコポーロ』が創刊される。今回は作家で選んでいるので、あの時代のエネルギーみたいなものが少々欠けているかなと感じました。アメリカの30代のジャーナリストが呼びかけて、世界中の100人の写真家がある国の1日を撮る『A Day in the Life』が始まったのが82年です。僕は83年のハワイから参加しましたが、84年がカナダ、85年が日本。当時、一番



栗林 慧 ジャンプして獲物を捕る  
テッポウウオ 1989年 \*



樋口健二 原発社会での日常風景 2004年 \*



鋤田正義 David Bowie “気”  
1989年

多く参加していたのが、マグナムに属する写真家と、『ナショナルジオグラフィック』で発表していた写真家です。86年のアメリカ版は、100万部くらい売れた。信じられない部数です。

**鳥原** 85年の『A Day in the Life of JAPAN』は協賛金を10億円集めたと聞いています。

**野町** 日本の時は、アメックスが大スポンサーでした。『FOCUS』も最盛期は200万部くらい出ていたでしょう。ですから、広義の意味でのフォトジャーナリズムが盛り上がった時期でもありました。

**鳥原** 『FOCUS』は81年創刊で、休刊したのが2001年。スキヤンダル路線で部数を伸ばしましたね。

**野町** 「豊田商事会長殺人事件」の瞬間を捉えた写真が掲載されたのは85年でしたっけ？。

**松本** そう、衝撃的な写真でした。

**野町** そういういたグラフメディアに出た写真が含まれていないのが、ちょっと寂しいですね。

**金子** 今回は写真家ベースで編纂しようという方向でスタートしたので、確かに野町さんが今おっしゃった部分は抜け落ちてしまう。たとえば今回選んだ写真の中に2011年の東日本大震災に関する写真はあるけれど、95年の阪神淡路大震災、オウム真理教による地下鉄サリン事件を扱った写真はない。どちらも世間的にも社会的にも大きなインパクトを与え、人々の考え方を大きく変え、法制度や政治も変わるきっかけになったわけですが。

編纂委員はどういうステップで写真を選んだかというと、まず写真集を集めた。カメラ雑誌やグラフ誌等に掲載された作品を集め、写真集やアンソロジーにならなかったものもたくさんあるわけです。それは今回の編纂ではあまり見えてこない。その一方で、作家ベースで選んだがゆえに見えてくる世界もあるのではないかと私は思います。

**田沼** 写真家ベースで選ぶと、グラフジャーナリズム的ニュース的な写真が入らないのは事実です。でもそれも含めるとなると、500ページくらいの本を作らなくてはならない。ですから予算等の問題も含め、最初にスタンスを決めてスタートしたわけです。

**金子** 50年代から70年代までは、カメラ雑誌等で連載し、それがある程度まとまる写真展になる。写真展が終わると写真集が作られ、それが作家のポジションを築くことにもなった。しかし85年以降は、まず写真集を作り、それをもとに展覧会をし、それにあわせてカメラ雑誌がフォローするというふうに逆転現象が起きています。今回の編纂のスタンスでは雑誌はフォローしなかったけれど、写真集をベースにしたことで、展覧会部分は結果的にフォローできたと思います。



金子隆一 氏

## ■見えないものをいかに写すか

**鳥原** 最終的に絞り込まれた写真を見て、「写真って変わらないな」と思いました。たとえば栗林慧さんの「ジャンプして獲物を捕るテッポウウオ」などは、僕には一見デジタルで撮ったように見えるけど、実はフィルムで撮っている。つまり写真で追及しようとしている世界は、ある意味で行くところまで行ったのかかもしれない。イメージだけを抽出すると、もしかしたら時代はあまり見えてこないかもしれません。しかし一步踏み込んで作家個々の取り組みを深く見てみると、樋口健二さんの「原発社会での日常風景」は、2011年の原発事故が暗示されてたりする。

一方で85年から2015年までを見ると、2010年代に入ってもモノクロ写真がけっこう多い。実はデジタルになっても、選択肢としてフィルムがなくなったわけではないし、モノクロがなくなったわけでもない。今はすべてが並列的に選択できる時代になったのではないかと思います。

**金子** 大きく言えば、撮影機器だけではなくプリントを作る全体のシステムがデジタル化していった。その流れのなかで、カラーとモノクロの意味が確実に変わったと感じます。デジタルで撮るということは、基本



横須賀功光 光銀事件「シュバル 高木こずえ オトコ 2006年 \* 中村征夫 ザトウクジラのファミリー 2005年  
ツシルド10-2」1989年



的にカラーのデータができる。そこからカラープリントはもちろん、モノクロも作れる。そういう意味では選択肢が多様化かつ並列化てきて、すべてのことが等距離にある。それまではカラーフィルムで撮影したら、そこからモノクロにもできるけれど、スムーズにはできない。さらにモノクロのフィルムを選んだら、カラーは生まれないわけですから。

70年代、家庭内でモノクロ写真がなくなり、カラーが当たり前になった。また表現の世界では、アメリカからニューカラーフォトグラファーが起きて、世界的にカラーが写真表現の重要な要素になってくる。80年代、90年代はまだその流れの中にあり、カラー写真が新しい写真の表現である、という意識がある。モノクロではなく、今はカラーのほうが先端的である、と。だから今回も、最初の15年は、選んだ作品にカラーが多かった。

ところが逆に2000年を超えると、モノクロでもカラーでも自分の表現は時代の中で成立し得るという意識を、写真家の人たちも持てるようになってきた。鳥原さんに言われて気づいたけれど、確かに後期のほうがモノクロが多い。編纂委員もそういう選び方をしているところが面白い。そこに表現や写真家の個性、写真表現のジェネラルな問題を見ようとした編纂委員の最大公約数の意識の表れだと感じました。

野町 デジタルが進化して、あまりにも簡単に写るようになったことに対する無意識の抵抗もあるんでしょうね。

鳥原 昔ロバート・キャパが、「アマチュアがいいカメラを持っていて俺らよりうまく写すんだ」みたいなことを言っていた。カメラはそんなふうにずっと、誰でも使えるものを目指してきたわけです。そこから新しい表現が生まれ、そのノウハウを標準化して、次のカメラに搭載していくとい



野町和嘉 会長

う過程を続けてきた。だからこそ写真家は、たぶん思いがけないカメラの使い方をするんでしょうね。「こうやつたら、もっと違う風に写る」ということに取り組み、それが次の写真の標準を作ってきた。それが見えてくるかどうか、今回大事な視点かなと思います。ですが、今若い人たちがやっているのは、デジタル画像をいかに壊すか。たとえば横田大輔さんや高木こずえさんなどがそうですね。

金子 イメージの追求に関していうと、イメージの理解の仕方が変わりつつある。ヘンな言い方ですが、見えないものをいかに写すかというのは、19世紀からの写真の大きな課題だったと思います。今、基本的にはなんでも写るように見えるけれど、やはり写らないものがあると写真家は感じているのではないでしょうか。たとえば横田大輔も、写真を壊した時に、自分が見ようとしたものが見えてくるのではないか。それがたぶん、写真を壊す理由ではないかと思います。

鳥原 2005年の中村征夫さんのクジラの写真も不思議です。モノクロで、しかもフィルムでクジラを撮るという非常に不自由なことをやり、それを銀塩で焼く。デジタルでもモノクロができるのに、あえてこれをやろうとする世界がまだあるということが素敵だなと感じました。

金子 ある意味で、すごく新しい。

鳥原 そうですね。

金子 2009年時点で、プロにとってデジタルカメラがスタンダードですから。

1930年頃の人たちが、理想のカメラや100年後の写真の世界について語っていますが、ある意味で今それは120%実現している。そうした時に、カメラを持つ専門家である写真家にとって重要なことは、「写ってしまう」なかで、自分が見ようとしているイメージをどれだけ表現できるか。つまり見えないものがどれだけ写っており、それをどれだけ見る人に伝えられるか。そういう意識が、今、問われている気がします。

鳥原 今回、大きくジャンルを3つに分けていますね。

松本 ひとつは自然的なもの。そのなかには都市もあれば、ドキュメントもある。もうひとつが、人間が対



立木義浩 藤島利彰一家 1988年



浅田政志 浅田家「消防士」 2006年 \*

象、あるいは被写体になっているもの。そして、出来事の3つです。ただ、全てをカテゴリー化することは難しいので、やや曖昧なものとなっています。

## ■「出来事」「人間」「自然」の分け方

**金子** 人間を映したものであっても、出来事的なテーマもあるわけです。たとえば新正卓さんの「遙かなる祖国・南米移民一世の肖像」は、人物にカテゴライズするのか出来事なのか、非常に難しい。逆の言い方をすると、写真というのは常にそういう重層化した側面を持っている。その曖昧さも、写真の持っている本質的なものだと思います。重要なことは、歴史として今回の展覧会があるわけです。この30年をどう見ていくのか。そのなかで、その写真をどう位置づけるのか。

有名なのが、78年にニューヨークの近代美術館で開催された「Mirrors and Windows」展です。展示作品を鏡派と窓派に一応分けたところ、「オレは窓ではない」と、写真家が喧々諺々。でも、もともとこの展覧会を企画したジョン・シャーカフスキイも「すべての写真が鏡と窓両方の要素を持っているのが前提である」と。あの展覧会には、「60年代以降のアメリカ写真」というサブタイトルがついている。60年以降のアメリカ写真を理解するために窓と鏡という文脈で並べ、皆さんに「歴史として見てください」と提示したわけです。つまりアメリカ写真を理解するために、鏡と窓というキーワードを立てたと私は理解しています。

今回もとりあえず「出来事」「人間」「自然」と分けましたが、極端なことを言うと、すべての写真にその3要素が含まれているかもしれない。ただ、それをこのように位置づけたらこの時代が見えてくるのではないかということを、編纂委員会の中で積み上げてきたわけです。

**田沼** 人の考え方方が時代とともに変わっていくのは事実だし、それが写された写真のなかにちゃんと写り込んでいる。そういうものを、私たちは選んでいるわけです。写ることが当たり前になってきた今、写るものに対して何を考えているのか。撮る人間が、何を考

えて撮っているのかが出てこないと、作品として浮き上がってこない。ですからそれぞれの写真家の「自分はこれを表現したいんだ」という主張が写真に出てきているし、その表現したものに意義を感じ選んでいるのが、今回の現代写真史ではないかと思います。

**鳥原** 全体を見て気づいたんですけど、家族写真が結構多いですね。立木義浩さんが撮った「藤島利彰一家」、いわゆる若貴兄弟が写っているものと、長島有里枝さんの「Self-portrait(family #1)」は、よく似た写真だなと思って。一方、浅田政志さんの「浅田家『消防士』」も家族写真だけど、時代をよく表している。撮り方、撮られ方で、こんなに家族関係の典型的な在り方が見えてくるんだな、と感じました。この展覧会には、そういったことに対するサポートが必要ですね。

**松本** 言葉のメッセージは必要でしょう。

**鳥原** 家族写真ということでは、深瀬昌久さんの「家族」もそうですね。

**金子** 古屋誠一さんの「Venezia,1985」も奥さんを撮っているし、荒木経惟さんの「冬の旅」もそうです。

**田沼** 『FOCUS』的な写真は社会の現象のひとつの捉え方ですが、家族写真などは生活の一場面を写真にしている。そこに生きている人たちが、いろいろなことを考えて皆さんその日を送っており、その一場面を作者は意図的に取り上げて写真に表現している。そこに意義があるのではないか。先ほど野町会長がおっしゃったように、『FOCUS』的な写真が入ってくると確かに時代の現象が見えやすい。今回はその部分が多少薄いかもしれません、個々の写真を見ると時代が見えてくるのは間違いない。それをどう見る人たちと共有できるようにするのかが課題でしょうね。



松本徳彦 副会長



田原桂一 Torse  
1987-1995年 \*



新正卓 遥かなる祖国・南米移民一世の肖像 1985年



北島敬三 「A.D.1991」より 1990年 \*

## ■ 1点1点が共鳴し、時代が見えてくる

**金子** 今回われわれは写真集をもとに、写真家1人につき1枚選んでいます。それをどういうふうに見てもらえるのか。ここにいる皆さんには、写真集を知っているわけです。こんな写真もあった、あんな写真もあった、と。その中の1枚として見るのと、1枚だけを見るのでは、受け取り方がまったく違う。そういう部分をどのように伝えていくのか。

写真家は1枚ではなく、100枚、200枚の写真を積み重ねることによって、何かを伝えようとしていく。それは今回、見えてこないところでもある。そのかわり、その1枚の意味が、別の人気が撮った1枚の意味と共鳴して、時代が見えてくる。そういうメリットがあります。極端にいようと、たとえば新正卓さんの『遥かなる祖国』という写真集1冊で、写真家がその対象を通してどのように現実とかかわろうとし、時代との葛藤を克服していったのかを読み解くことができる。でもそれはあくまで新正さんを通して象徴される時代であって、新正さんの1枚の隣にたとえば北島敬三さんの写真があった時に起こる共鳴とは別のものです。その1点1点の集まりから起きる共鳴が「時代」として見えるように展示やカタログが作られていくと、すごく面白いだろうなと思います。

**鳥原** 本橋成一さんの「オートル村」を見て、一瞬チエルノブリイだとは思わないですよね。でも、それを撮る理由が本橋さんにはある。その理由がちゃんと見えてくるといいですね。

**松本** 写真集を編集する上で、そこがとても難しい。でも、力を入れなくてはいけない部分だと思います。

**金子** 編纂委員会が1点1点を並列的に並べることによって時代の歴史を表現しようという方針を決めたからには、それが伝わるようにするのはわれわれの責任でもある。計150点並べることで30年をいかに表現できるか。そこが問われると思います。

## ■スマホの普及による影響

**野町** 写真を取り巻く環境という意味では、この30

年で大きくかわってきた。何より昨今はスマホで、子どもや女子高生たちも、瞬きするように写真を撮り、SNSで発信している。情報のほとんどがそこに集中しているともいえます。ですからある意味、写真のステータスは落ちているともいえる。写真を撮るのは難しいという感覚は、今の世の中にはありませんから。

**鳥原** 一方で最近、写真学校の入学者数が増えてきています。それはSNSで発信するなかで、もっといい写真を撮りたいという若い人が増えてきたからです。さっきもお話しましたが、技術というのは、常に「今」を超えたというモチベーションの源になる。スマホで誰でも写真が撮れるからこそ、反転してモチベーションが動き始めているような気がします。

**野町** なるほど。それは確かにあるかもしれませんね。ただ写真家がこれだけ食えなくなるとは、30年前には誰も想像できなかっただでしょう(笑)。

**田沼** だからこそ、新しい時代を作らなくてはダメなんです。今までと同じことをやっていたら無理ですね。やはり次なる時代に合わせて考えていかないと、写真家は消えてしまうでしょう。

**金子** 田沼先生がおっしゃったことは、きわめて基本的なことです。100年前、150年前、それこそ写真が発明された時からなんら変わっていない。それは、何が写っているかということより、受け取る側がどういう要求をするのか。受け取る側が要求しなければ、専門家としてのレベルの写真家は、極論すれば必要なくなってしまう。もちろん自分自身の表現として突き抜けていく、というのはありますよ。それを発表し、見る人にフィードバックされることによって、「こういう新しい世界観があるんだ」となる。そして、「だったら、こういうものはないだろうか」と新たなものを探す。その繰り返しで発展してきたわけです。



鳥原 学 氏



荒木經惟 冬の旅 1990年



深瀬昌久 家族 1985年



操上和美 Carol Ohmura  
1988年

だからデジタルで誰でも撮れる時代でも、それで満足できない人がたくさん出てきている。データ技術を使って今までとは違うものを作るとか、あえてデジタルではない方法で作る人とか。つまり写真の枠組の最初のフレームが今、少しずつてきていて、同時に受け取る側の意識も変わってきていている。そこがすごく大事なのではないか。

**鳥原** たぶん今、写真の仕事はマスから個に移ってきている。最近、ある会社が新しいサービスを出しましたが、それは一人の写真家が同じ家族を20年撮り続ける、というものです。これまでマスマディアで一人ができるだけ多くの人に語りかけるのが仕事としての写真の在り方でしたが、それが崩れて、1対1対応に近い形での仕事や表現になってきている。社会がそれを求めている、ということでしょう。

**金子** それは一つの社会的な動きでしょう。一方で芸術表現という面では、今や写真がアートであることは誰も疑わない。それによって、まったく新しい世界、今までの写真芸術とは違う考え方方が生まれてきているように思います。

**野町** 現象としては、銀座ニコンサロンがなくなり、『アサヒカメラ』も休刊するなど、写真界は谷底です。そこに加えて、新型コロナウイルスの世界的流行がある。

**鳥原** カメラメーカーにしてみれば、一時コンパクトカメラは一眼レフの3倍くらいの市場があったけれど、スマホの普及でほぼゼロになった。それがかなり痛手だったでしょうね。

**野町** スマホの世界でいろいろなことができる、一眼レフを持つ必要性を感じていない人も多い。

**鳥原** 逆になんで日本のカメラメーカーや写真雑誌が、スマホ的なを取り入れなかつたのか。

**田沼** 撮る人の考えが全く違うのではないか。

**鳥原** デジタル化が始まった頃、カメラ雑誌では、古い高級機種や昔の銀塩カメラの高級なものに関する特集がけっこう多かった。僕は「アサヒカメラの90年」「ニコンサロンの50年」を書きましたが、どちらもなくなってしまった(笑)。この「現代写真史」の編纂をやって、日本写真家協会がなくなってしまったらどうしよう、と。(一同爆笑)

うしよう、と。

**松本** 新型コロナウイルスによって、撮りたいものが撮れない、発表する場もない、ということが今起きています。これは時間が解決してくれるのか、あるいはわれわれの努力で解決できるのか、まだ見えない部分も大きいですね。

**鳥原** いずれにせよ、ドキュメンタリーが発表の場を失ってきた30年間であることは、間違いないですね。

**野町** 紙媒体がほぼなくなってきたし、デジタルはあまりお金を産まない。というのも、使用料がほほかからない写真でいいものが、かなりたくさんありますから。この流れで象徴的なのが、2000年ちょっと前にビル・ゲイツが創ったCarbisという会社で、世界中のアーカイブを買い占め、写真を独占するつもりで始めた。当初はうまくいきましたが、15年くらいで閉じた。つまりWindows生みの親のビル・ゲイツでさえ、デジタルコンテンツの進化を読み切れなかった、ということでしょう。我々写真家にとって、過去の写真のアーカイブはけっこう重要です。しかし2010年くらいに、ほぼ需要がなくなった。アマチュアが投稿するPIXTAなど、使用料が数百円ですから。

**田沼** 会長にあまりネガティブなことばかり言われると、困ってしまいます(笑)。

## ■国際化と小さなメディアの流れ

**金子** 紙媒体の衰退が言われる一方で、今、20代でフォトジャーナリストを目指す人はけっこう多いようです。テーマを見つけたものの発表する場がないというのが、今の若い世代。ですからいわゆる雑誌メディ





古屋 誠一 Venezia,1985 本橋成一 オートル村 1992年  
1985年 \*



坂田栄一郎 エディー・ブー（自然保護活動家） 2003年

アとはまったく違う世界を、とくに若いフォトジャーナリストは切り開きつつある。たとえば林典子さんや、少し上ですが清水哲朗さんたちは、野町さんたちの時代とは明らかに違う。メディアがなくなるなかで、自分たちがどう発表したらいいかを考えている世代です。今までのよう編集者と組んで発表するのではなく、自分で文章も書いて一冊の本を作ったり、写真展や自分のウェブで発信し、それを本などにつなげていく。雑誌がベースで、それが積みあがって写真集ができるというかつての在り方とは大きく違う方向に転換したと思います。

**鳥原** 林典子さんはほとんど写真の経験がないまま仕事を始め、自分が撮ったものをさまざまな編集部に持ちこんでプレゼントしてきた。そこから本が生まれたのは、やはり目利きの編集者がいたからでしょう。もちろん個人でも本は作れますか、校閲などのチェックも含めて、内容が妥当かどうか検証されることには意味がある。今、世の中フェイクが多いので、写真家協会も含めてそこをどう担保するのか。一定以上の信ぴょう性のある表現であるというお墨付きは必要だと思います。加えて林さんは、海外の写真家集団のエージェントに入っている。日本国内だけではなく海外に目を向けることも大事だし、そのいい見本ですね。

**金子** アートという側面で見た時も、たとえば横田大輔さんなども、海外の美術館やギャラリーがついており、海外をベースに経済が回っている。そういう写真家も増えているし、若い人であればあるほど、その傾向が強いでしょう。

**田沼** 日本国だけでなんとかしようとしても、無理ですから。インターナショナルにならざるをえない。

**金子** 若い世代は、最初から、日本だけでという発想がないんですよね。

**鳥原** 尾仲浩二さんがえらいなと思ったのは、2008年にパリ・フォトで日本特集が組まれた際、ベルギーかどこかの学芸員が声をかけてくれて、写真も売れたし展覧会をすることになった。帰国してまずやったのが、英会話学校に行くことだった。そこからつてを作り、写真集を作ると、確実に売れる層を得た。日本国

内では、売れても300部くらいでしょう。でもそういう人が世界各国にいれば、成り立つんですね。今はインターネットもあるし、そういうことが可能になったわけです。

**金子** いわゆるマスメディアは、すでにあまり機能しなくなってきていている。小さいメディアが、経済的でも評価を獲得する面においても、力を持ってきている気がします。

**田沼** デジタル化によって発表の仕方も経済的な面でも、スタイルが変わってきたのは事実です。それをどう発展させるか。やはり国際的な感覚が必要でしょう。マスメディアの終焉ということでは、72年の『LIFE』休刊は衝撃的でした。当時、600万部以上売れていたのです。アメリカの雑誌は定期購読なので、毎年郵便料金が上がるということが決まり休刊した。

**野町** それと、テレビCMのせいで広告収入が減ったことも大きな理由でしたね。

**金子** だから、コンテンツの問題ではない。あれだけのものを運営していくには、広告収入が必要不可欠だった、ということです。

**鳥原** 話を戻すと、日本の場合、カメラメーカーがあったので、そのスポンサーで日本の写真文化が成り立っていたという面があります。だからカメラ雑誌が表現媒体の中心になっていたし、おそらくカメラメーカーのサポートを受けていた写真家もたくさんいた。ただ、その時代が終わったあと、どうしていくのか。

## ■日本写真家協会が果たしてきた役割

**松本** いろいろなお話が出ましたが、日本写真家協会にとって、写真の歴史書の編纂はこれで4冊目です。日本の写真100年展と、現代史展は1840～1945、1945～1970の2回、そして今回4冊目として1985～2015を出すわけです。それぞれ、その時々の編纂にかかわる人間の視点で変化もしていると思います。写真家協会がやってきたことが何だったのか、が分かればと思ってます。

**鳥原** 僕は、職能団体であるJPSが果たしてきた役割ですごく大きいのが、著作権を守ることだったと思



横田大輔 site/cloud 2013年



清水哲朗 BURGED 2011年

います。それまで出版社の編集部が改編や二次使用権を持っていたのを、取り戻していく。その活動を通じて、作家としての自立した存在を促していったことは、大きな成果だと思います。ただそれは、マスメディアの時代だからこそ意味合いがあった。パーソナル化しているなかでいかに写真家が自立していくのかを、JPSがどのような形で打ち出していくのか。この先、見てていきたいと思っています。

**野町** 私は40年以上会員できました。ここ数年は会長という立場でしたので、私が言うのもなんですが、JPSはよくやってきたなと感心します。世界中を見ても、組合はあっても、日本のように写真家が当事者となって組織を作り活動してきた例は他にありません。もちろん、世界に名だたるカメラメーカーが日本にあるからこそ支えられてきた面もあるし、今回の70周年の企画にしても、日本だからできる。マグナムのパリオフィスもなくなりましたし、世界的に写真家を取り巻く環境は厳しい。そのなかにあって70周年を回顧できる姿勢があるのは、すばらしいと思います。

**田沼** 写真家が組織を作り、さまざまな要求をして動かしてきたからこそ現在がある。写真家自身がやらなければ、誰もやってくれません。先輩たちを含め私たちが、なんとか写真家という立場を築き上げたいという一念でやってきたのだと思います。昔は「おい、写真屋」などと呼ばれていたのを、ちゃんとした地位を築き、文化庁も認めてくれた。それは一朝一夕でできることではありません。

今回も社会情勢が厳しいなかで70周年の展覧会や出版などを行うことに対してさまざまな意見があるけれど、これをやることによって写真家の存在を世の中に知らせていくことに意義がある。私や松本さんがやっている写真保存センターに関しても、写真家がやらないくては誰もやってくれない。本人が死んだら、写真が捨てられてしまう。それをなんとか残すことによって、写真の意義を知ってもらえる。過去は誰も撮影することは、できないのですから。

**鳥原** 今回編纂にかかり、若い会員がどう考えているのかがすごく気になります。

**田沼** それは課題です。近年の若者は、個人主義的な傾向が強くなっているので難しい。しかし、写真家全体でやらなくてはできないことがあるのです。

**鳥原** 金子先生にお聞きしたかったのですが、東京写真美術館は、JPSの働きによって道筋ができたようなところがありますよね。そういう歴史的経緯を、若い学芸員の方たちはどのように捉えているのでしょうか。

**金子** オフレコですが（笑）、これは東京都の問題なんです。

初代館長の渡辺義雄さんがある場で、JPSが写真文化センターを作るべきだと国に訴えかけて地ならしをしたから東京写真部美術館ができた、という話をしたんです。それを受けた私もある場所でその話をしたら、後から東京都から怒られました（笑）。東京都写真美術館ができたのは、鈴木元都知事と当時パリ市長だったシラク氏との間で合意ができたから、というのが公のストーリーです。ですから若い学芸員が知らないのは当然だと思います。

**鳥原** ちょっと寂しいですね。

**田沼** いやいや、我々は影の存在でいいんです。結果として美術館が生まれたのが一番大切なことだし、写真美術館ができたことで写真界が変わりましたから。

**金子** 写真専門の美術館を公的に作ったという点では、おそらく世界で最初でしょう。その地ならしをしたのがJPSであることは間違いないので、後々の写真史にはきっと書かれると思います。今回で70周年、あと30年で100周年です。その時、日本写真家協会が作ってきた歴史を検証することが、ひいては写真を検証することになる。その主体としてJPSというのは、非常に大事な存在であり続けると思います。

**松本** 写真家の発声で写真歴史書を作ってきたことは、大きな成果です。海外に持っていくと、そんなのは聴いたことがないと驚かれます。日本写真家協会としては、記録を残していくことが大事なことと思っています。

—— 本日はどうもありがとうございました。

(編注：写真キャプションの「\*」印はカラー作品)

(構成／篠藤ゆり、撮影／出版広報委員・小城崇史)

# コロナ禍で考えたこと

鳥原 学 (写真評論家)  
Torihara Manabu

## ◎中野正貴「東京」展の新しい意味

写真是すぐれた記録メディアだが、同時に予言的な性質を発揮することもある。社会に拡散して、人々の意識に浸透するほど、現実がそれに似ていくようだ。これを書いているのは7月の半ばだが、年初に見た写真展が今になって新しい印象で甦っている。

その展示とは、東京都写真美術館で開催された中野正貴さんの「東京」展である。30年間の仕事をまとめた、膨大な写真が会場の壁面を埋め尽くす様子はなんとも壮观だった。

よく知られるように、中野さんには「東京三部作」という代表的なシリーズがある。人物が消えた風景を集めた『TOKYO NOBODY』(2000)、やや高い建物の窓から眺めた『東京窓景』(2004)、そして川から街並みを見上げる『TOKYO FLOAT』(2008)だ。ポジションと視線の角度を変えて撮られた写真がこうして並び、さらに未発表作品も加わると、この大都市の性格と機能とがとても明確に見えてくるように思えた。しかも、この30年という撮影期間は、ほぼ「平成時代」に重なっている。ひとつの時代の消長がまるごと記録されたと言って良く、それはおそるべき持続力に違いない。

写真を見ているうちに、個人的な感慨も湧いてきた。というのは私が関西から上京したのが、ちょうど平成が始まる年だったのだ。つまり、ここに展示されているのは、私が暮らしながら常に目にしてきた風景なのである。改めて見ると、そのときどきの事が思い出されてきた。ただ、それは“ノスタルジー”とも違っている。

風景自体が語りだし、記憶が仕立て直されていくような感じがした。時間の作用で薄められたり、変形したりした思い出を再び鮮明にしながら、さらに新しい解釈が加わっていく。人が何度も同じ写真を飽きずに眺め直すのは、そんな力を頼ってのことだろうか。半年前、私はそんなことを考えながら展示を見ていたのだ。

しかし、いまは同じイメージについて違う印象を抱いている。写真はある契機によって、突然、見え方が変わってしまう時がある。そのような体験を「身勝手なふるま

い」と形容した写真家がいるが、まさに言い得て妙だったと思う。

その変化は、現在も進行中のコロナ禍によってもたらされた。展示の期間中からすでに中国での感染状況は伝わってはいたものの、翌月には欧米に広がり始め、3月半ばに日本政府は緊急事態宣言を発した。状況の急速な変転のなかで、中野さんの写真が過去の記録という位置づけから変わり始めたのだった。

私には、メディアが報じるロックダウンした世界の主要都市の風景が、あの『TOKYO NOBODY』シリーズのイミテーションに見えて仕方がなかった。武漢から始まり、ロンドン、ミラノ、パリ、ニューヨークへと広がっていく人のいない風景が、インターネットには溢れていた。もちろん東京のそれなどは、まさに中野さんの写真のままであった。私は以前、この写真集について「この無人の光景は、未知のウイルスのアウトブレイク」を予感させる、と書いたことがあったことを思い出した。

写真には、未来への暗示も多分に含まれている。もちろん、それは明るい側面ばかりではなく、破滅的なカタストロフィに通じる闇や暗さも持っている。どちらかと言えばだが、後者の方が人の想像力を刺激するのかもしれない。

じっさい中野さんの写真は、これまで様々なクリエイターに創作のヒントを与えてきたのだ。なかには、このよ



中野正貴 「東京」展のポスター (東京都写真美術館)

うなカタストロフィを描いた人もいる。そんなSFドラマやゲームが現実の風景となってしまったことに、言いようのない思いを抱いたのである。

良いか悪いかは別にして、これらの写真はいまや想定外の新しい意味を加えてしまった。コロナ後の世界で『TOKYO NOBODY』はきっと違う語られ方をするだろう。さらに言えば「東京」展自体が、平成と令和という時代の区切りを明確に示すラインになったようだ。

それゆえ、こうして展示を思い返すたびに、私たちがいまや未知の領域に踏み出しつつあることを実感するのである。

## ◎時代の幕引きを実感する

緊急事態宣言下にあった4月半ば、突然、宮崎県のある若い写真家からメッセージを頂戴した。そちらにマスクを届けたいから住所を教えてほしい、との内容だった。まだ入手しにくい頃だったから有難い申し出には違ひなかったが、少し躊躇した。それまでSNSを通しての交流はあったものの、本人には一度しか会ったことがなかった。それなのになぜ送ってくれるのだろう、理由を尋ねると次のような返信が来た。

「写真評論の方に死なれたら写真家は困ります」

さらに重ねる言葉などなく、素直に好意を受けることにした。

とはいえる、あの時期は、彼自身もかなり辛い時期だったと思う。実家の写真館を継いでまだ数年、家業と作品活動を両立させ、ようやく軌道に乗せてきたばかりだ。今年は彼にとって大切な写真集を準備しているとも聞いていた。その諸々がストップし、いつ再開できるのか目途が立たない状況にあったはずだ。

コロナ禍は、卒業式や入学式という写真業界の繁忙期を奪い、そのため苦境に陥った写真館は全国で少なくなっていると聞く。3月半ばには、明治以来の老舗、徳島の立木写真館が店を閉じたという報道にも驚かされた。

なにしろ立木写真館と言えば、創業が明治16年、西暦でいえば1883年という徳島の老舗である。立木義浩さんの実家であり、母の香都子さんをモデルにした1980年にNHKの朝ドラ「なっちゃんの写真館」で全国的に知られるようになった。

その母と並んで、父の真六郎氏も立派な人だったと聞いている。東京工芸大学の前身、東京写真専門学校を出て立木家に婿入りし、妻とともに家業を盛り立てて戦後の礎を築いたのだ。しかも「絵画にも詳しく、営業写真の家系に芸術の感覚を持ち込んだ」と写真館のホームページにも紹介されているように、作品制作にも熱心で、1920年代から50年代まで、ときどき『アサヒカメラ』のグラビアを飾っている。

その『アサヒカメラ』も、今年の7月号をもって、94年の歴史に幕を閉じてしまった。

以下は私の個人的な印象だが、この二つの老舗の幕引きには奇妙な符号を感じている。なぜかと言えば『アサヒカメラ』を創刊した東京朝日新聞社の成沢玲川氏は、立木真六郎氏の実兄だからだ。それぞれの立場で昭和の写真界を盛り上げ、貢献してきた兄弟の仕事が、ほとんど時期を同じくして姿を消したのだ。



94年の歴史に幕を閉じた『アサヒカメラ』2020年7月号表紙

さらに言えば『アサヒカメラ』の休刊、『アサヒカメラ』が発表されたのが6月1日、つまり「写真の日」だったことも印象的だった。この記念日は、1951年に日本写真協会(PSJ)が制定したものだが、当時の資料を読むと、会の創立メンバーだった成沢氏がずいぶん尽力していることを知るからだ。彼自身が関わった記念日に、やはり自身が総力を傾けて創刊した雑誌が休刊を告げた。そのことが、ひとつの時代の終わりを実感させるのである。

さて、こうした印象論は別にしても、コロナ禍によって、時計の針が一気に進んでしまったのは間違いない。いま昭和時代の慣習や価値観をまだ引きする組織などは、急速に淘汰されている。昨日、新聞を読むと、ある世界的なアパレル企業の経営者が「この1年の変化は10年分ほどにも匹敵する」と語っていた。きっと写真をめぐる環境の振れ幅はもっと大きいのではないか。写真文化を支える経済的な基盤もメディアのあり方も、もう同じではありえない。令和時代は、きっと平成の続きとはならない。

もちろん、それでも時代の波から守るべきことも、形を変えて時代に適応させるべきものもある。写真館の仕事もそうだろう。誰もがスマホで写真を撮れる時代になったとは言われるが、それは単純すぎる見方のように思う。若い世代の意識はもっと敏感で、写真が溢れかえる世の中だからこそ、より自分にふさわしいイメージを探している。じっさい、ここ20年を振り返れば、個人のライフイベントとより深く関わる写真の職種が増えている。コロナ禍の後は、この傾向がさらに進み、芸術表現にももっと影響していくに違いない。

もちろん私の仕事についても変わらねばならない。この時代の写真家とその仕事について考え、それを語ることのできる場を求めなければならない。宮崎からマスクを送ってくれた彼の言葉が、その気持ちを強く後押ししてくれている。

# 将来はまだ知られていない日本を世界に伝えたい WPP 大賞受賞の千葉康由さんに訊く

世界中の報道写真家によって1年間に撮影された写真が集まる世界報道写真（WORLD PRESS PHOTO：以下WPP）。65年もの歴史を持ち、今年は125カ国、4,282人の写真家が参加したコンテストの大賞作品に、AFPナイロビ支局でチーフフォトグラファーを務める千葉康由氏の「まっすぐな声」が選ばれた。昨年の6月にスーダン共和国の実権を握った軍に抗議して民衆が開いた集会で、停電による暗闇の中、スマートフォンの明かりに照らし出された青年が、抗議の詩を叫ぶ様子を捉えた一枚だ。日本人としては41年ぶり4人目となる大賞を受賞した千葉氏に話を伺った。

——大賞受賞おめでとうございます。過去にも2回WPPで入選されていますが、やはり賞の獲得を狙ってされるものなのですか。

千葉：WPPに応募するのは毎年末の恒例行事みたいなもので、この作品も今回いくつかも応募した中のひとつです。応募する部門がいくつかあるのですが、この作品はポートレート部門に応募しました。審査員が写真の部門を変えることもあるので、普通の報道部門では埋もれてしまうかなと思ってポートレート部門にしました。応募 자체は賞を狙っているというより、一年の写真を振り返る自分の例年行事のよう�습니다。WPPに入ったのは3回目です。最初は2008年にケニアで撮った写真。そして2回目は2011年に東日本大震災での組写真です。あの時は AFP のカメラマンが海外からも応援で入りましたが、送られてくる写真を見ていたらやはりコミュニケーションに苦労しているような気がして、自分もケニアから現地入りを志願しました。

——がれきの中から見つけた卒業証書を掲げるお母さんの写真は印象に残っています。実は千葉さんのことはその時すでに存じ上げていました。すでにケニアで AFP のカメラマンとなり、その後にブラジルの AFP に移動したカメラマンがいると聞いてずっと気になっていたんです。何がきっかけでケニアに渡って、しかも AFP という大手通信社に売り込めたのか。

千葉：もともとは朝日新聞社に入り、振り出しは松山での記者修業でした。そこから大阪、金沢、名古屋、新潟と回って、東京を最後にフリーランスになりました。東京で



世界報道写真大賞「まっすぐな声」千葉康由(日本、 AFP 通信)停電の中、野党の対話集会の前に、人々が輪になり手拍子をうち携帯電話の光を掲げる中、抗議の詩を叫ぶ青年。スーダン・ハルツーム、2019年6月19日。—WPP2020・General News部門(単写真)1位、Photo of the Year (2020年大賞)

は、日系ブラジル人の知人ができ、ブラジルという国に強い興味を持つようになりました。日系移民100周年の2008年に合わせて自分も移民する気でいました。その当時付き合っていた妻のご両親に結婚の挨拶を行った時、ブラジル行きを宣言していましたから。彼女はもともと大学院で社会人類学を専攻していて、写真にも興味があり、気が合ったのですが、結婚後に妻がJICA（独立行政法人国際協力機構）の専門家としてケニアに行くことになりました。だったら私もアフリカもよく知らないから、ちょっと行ってみようと。他力本願ですね(笑)。

——南米からいつのまにかアフリカ大陸に変わってしまった(笑)。



千葉康由氏

千葉：ケニアではフリーランスで撮っていました。2010

年に南アフリカでサッカーワールドカップがあったのですが、アフリカ初開催だから自分も取材してみたいと思い、 AFP のスポーツデスクに相談するともう足りているからと一蹴されました。それでも行きたかったので、まずその 1 年前に開催された FIFA コンフェデレーション・カップにフリーランスとして取材許可証を申請したのですが、却下されました。ケニアの新聞社の名だけ借りて申請し直し、ようやく取材記者証が手に入ることができました。大会直前、以前断られた AFP のスポーツデスクに会って挨拶し、南アフリカ・ソウェトの路上でサッカーをしている子どもたちの写真をメールで送ると、すぐ電話がかかってきました。この写真のように、スタジアム外でサッカーをフューチャーした撮影をしてくれるなら短期契約しよう、と誘われました。おかげで毎日レンタカーでいろいろな所で撮り、翌年の本大会も同じ狙いで撮影することができました。その時、ケニアに住む理由を聞いてきたスポーツデスクに、本来のブラジル行きの話をしていたのですが、しばらくしてサンパウロ支局のカメラマンが辞めたから、そのポストに入らないかという連絡がありました。当時ブラジルのことはすっかり忘れていたのですが（笑）。ここで本来の計画に戻った訳です。そしてブラジルから正式に AFP のスタッフになりました。

——ブラジルでは 2013 年に警官から暴行を受けたという事件がありました。

千葉：7 月にローマ法王がブラジルを訪問しました。法王到着をカバーした空港から直接移動して、法王訪問の出費に反対するデモを撮影しなければなりませんでした。機材が多くすぎて、望遠レンズとガスマスクは必要だけど、ヘルメットはデモ隊に近づかないから大丈夫だろうと置いていった。それが悪かったわけですね。デモが終わった後、路上に倒れている男の人を警察官たちが連れて行くので、直感的に他のカメラマンと一緒に追いかけました。盾を持った機動隊にロックされたため、僕も両手を挙げて諦めた意思を伝えましたが、機動隊の背



瓦礫の中に埋もれていたタンスから娘の卒業証書を見つけ、近くにいた本人に見せるマツカワチエコさん。2011年4月3日、宮城県東松島市。WPP2012・People in the news 部門(組写真)1位。

後から警官が警棒で殴ってきたのです。デモは終わっていますから、不必要的暴力でした。他のカメラマンがいてその様子を撮影していたので殴った相手も名札で特定され、最後はマジックミラー越しに対面し、罪を認めてくれました。当時の警官はすぐにデモ隊の挑発に乗って怒り、それを報道陣が撮るという形でしたが、FIFA ワールドカップを前にフランスの機動隊員や米国の FBI から指導を受け、最終的に機動隊員は全くデモ隊の挑発に乗らなくなりました。

それ以来、安全装備は必ずつけて撮影しています。

——やはり危険と隣り合わせというのが日常なのでしょうか。

千葉：あの事件以降は僕も気をつけています。果たして深追いすべきなのか、命の危険を賭けるべきなのかを考えます。ケニアでもデモが大きくなると警官が実弾を発砲します。その音を聞いたらもう離れるようにしています。特に子どもができたからは、無理をしなくなりましたね。

——それにしてもすごい行動力だと思います。

千葉：今、僕はかつて自分自身が売り込んだ先の立場にいるので、よくわかります。（売り込むなら）ともかくニュースが起こっているホットスポットに居ることですね。なにか起きたらとりあえずそこに行く。そこでいい写真を撮って見せれば、使われる可能性は高いと思います。アフリカの多くの国は住環境が厳しいので、場所によっては競争相手も少なく、仕事に繋がるアドバンテージがあります。

——現在はナイロビにいらっしゃいますが、今後の展望はありますか。

千葉：コロナ感染症の影響から在宅で考える時間はあるので、これからのこといろいろ考えました。やはり僕は日本人だし、AFP という世界中に配信出来るネットワークを持つ会社に所属しているので、善し悪し含めてまだ知られていない“日本”を発信したいと思っています。世界の中で日本は、すごくいいイメージを持たれている国です。だから日本にホームレスがいるなんて信じてもらえなかったりしますから。一昨年、豊橋の手筒花火を撮りに行って、昨年写真展を開きましたが（「神へ捧げる花火」2019年7月5日～25日／富士フィルム・ギャラリー X）あれもいい意味ですごくクレイジーですよね。そういう意味で日本。特に地方の魅力をもっと知らせたいですね。新聞社時代に松山、金沢、新潟を巡った当時は日本の多様性というものをすごく感じました。島国でこれだけ面白さのバリエーションがあるのは珍しいのではないでしょうか。

——今後のご活躍も大いに期待しています。ありがとうございました。

（聞き手／JPS 会員・渡部晋也）

# 「日本写真保存センター」調査活動報告(33)

—地震、津波、風水害など多発する災害ニッポンの記録一

松本 徳彦(副会長)

ドキュメントとしての写真に多いのが地震、津波、風水害など被災地の惨状をとらえたものが数多い。直近では「九州や北陸地方の豪雨被害」、近年では東北地方を襲った2011年の「東日本大震災」、遡って1995年の「阪神・淡路大震災」など写真による報道が目を引く。

## ■伊勢湾台風の惨状を記録した佐伯義勝

(1927~2012)

1959(昭和34)年9月26日午後6時過ぎ、超大型の台風15号が紀伊半島潮岬西方に上陸。上陸時の瞬間最大風速は48.5メートル、中心気圧929.5ミリバールで、これは台風の陸上観測では、1934(昭和9)年の枕崎台風の916.6ミリバールに次ぐ記録だった。直径700キロの暴風圏をもつこの台風は、時速70キロという猛スピードで伊勢半島を北上、伊勢湾から名古屋市を直撃、愛知・三重・岐阜の東海地方の人口密集地帯を総なめし、日本海に抜けた。

愛知、三重両県に暴風雨・高潮・波浪警報がラジオで伝えられたのは、26日午前11時15分。名古屋地方気象台は「最悪のコースで、最も近づく夜半ごろは名古屋港の満潮時にあたる」と厳重な警戒を発したが、風雨は強まる一方で、午後8時過ぎには名古屋市全域が停電し、暗黒に包まれた。夜9時、名古屋市で平均風速34.9メートル、瞬間最大風速45.7メートルを記録した。

この頃を境に高潮による防波堤の決壊、河川の堤防決壊が各地で起こり、海拔0メートルの名古屋市南部の南区地帯に海水が流れ込み、貯木場の木材約50万本

が打ち上げられ、一帯は巨大な流木で人々は打ち壊され、人々はその下敷き、打撲などで死傷者が続出した。この時の様子を綴った文集『町が海におそわれた』(神山征二郎著、学習研究社1989年)に、「黒い海がぐわっともりあがった」海面は気圧が1ミリバール低下すると、約1センチ高くなる。台風が名古屋を通過するころは、950ミリバール前後の低気圧だったから、海面は通常より50センチ以上高くなっていて、強い風の吹き寄せで2.5メートル位盛り上がり、増水した河川の水と合わせて、最高5メートル31センチに達していた」と、巨大台風の怖さが記されている。

この台風による被害は、死者4,697人、行方不明401人と観測史上最悪の台風被害となった。大きな被害を生んだ名古屋市西方の弥富市の鍋田干拓地では今も慰霊祭が9月26日に催されている。この干拓地は秋田県の八郎潟とならぶ国営の大規模干拓地である。

この台風の惨禍を写真家として活動し始めたばかりの佐伯義勝(当時27歳)が被災状況と復興に向けて活動する被災者の状況を、真摯な眼差しで記録している。この撮影原板35ミリフィルム(ネオパンSS)×15本(484コマ)は、名古屋市南図書館が『伊勢湾台風災害写真集No25~31』として出版並びに展示資料として利活



0メートル地帯に流れ込んだ海水から逃れる住民たち



浮き上がった線路を伝って避難



救援を待つ人たち

用するためのデジタル化を終えたため、写真保存センターにご遺族の佐伯弥生夫人からご寄贈いただいたもので、このフィルムから6点の写真を掲載した。

佐伯がとらえた名古屋市南区周辺の住宅地、中小企業の工場群と開拓地の被災状況と高潮で住まいを失った避難民。救援の人々などをきめ細かく追い続け、水害の恐怖からいち早く立ち直り、辛抱強く、隣人ともども共助する姿を冷静に描写している。

佐伯は料理写真家として著名であるが、それ以前は報道写真家として木村伊兵衛のもとで薗部澄、石井彰、樋口進、三堀家義、田沼武能氏らと修業した。

1953年、石川県内灘村海浜に米軍の射爆場が作られることに住民が反対運動を起こした。佐伯はこの基地問題を撮りに出かけ、射爆場に座り込む乳飲み子を抱く婦人や団結小屋の板塀にたたずむ少年らの姿を克明にとらえ、闘争現場の住民の姿を克明にとらえ発表した。以来報道写真家として、54年「ニコヨンの女書記長」、55年の小児麻痺の女児と母親との愛情物語「愛の三輪車」を発表するなど、常にヒューマンな眼差しで捉



注ぐ水もない洗濯場

えた作品が評価されている。また、57年の立川基地砂川町での組合員と警官との流血事件現場を記録するなど、話題作を次々と発表したことでも知られている。

☆名古屋市南図書館(052-821-1732)では「伊勢湾台風関係の資料写真」が常設展示されています。ご覧下さい。



お棺に入った家族と最後のお別れ



打ち上げられた運搬船

# 写真の公衆送信の基本を考える

久保田 裕（ACCS 専務理事）

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行で政府から緊急事態宣言が発令され、在宅勤務によるリモートワークやソーシャルディスタンスとして「3密」を避ける動きが進んでいます。これらの状況によって私たち写真家の活動様式にも影響が出てきました。写真の公表場所が写真展や雑誌などの印刷媒体からインターネット上への移行に拍車をかけています。そこで今回は、一般社団法人コンピュータソフトウェア著作権協会（ACCS）専務理事の久保田裕氏に財産権としての著作権法第23条（公衆送信権等）を解説していただきました。（著作権委員会）

### ●写真の複製と公衆送信

写真家が持つ最も重要な権利である著作権において、誰もが複製権（著作権法第21条）については理解していると思う。複製権で保護される「複製」（同法第2条1項15号）とは、著作物を有形的に再生することで、簡単に説明すると「コピー」のことだ。フィルムのプリントも複製に当たる。プリントからさらにコピーすることも、もちろん複製だ。複製（コピー）の形態は、コピー機を使うことはもちろん、プリントされた写真をさらに写真で撮影することも、スキャナーで取り込むことも、デジタルカメラの写真データをコピーすることも該当する。雑誌やパンフレットに掲載されることも複製だ。

重要なことは、こうした複製は、著作権者だけに許された行為だということだ。通常、写真の著作権者は撮影した本人だから、撮影者だけが、その写真を複製する権利を持っている。もし、第三者が勝手に複製したら、それは原則として違法行為になる。第三者が複製したい場合は、著作権者の許諾を得るか、著作権の譲渡を受けなければならない。これが著作権法の神髄と言ってもいい。

以上は複製権のことだが、著作権法には、ほかにも著作権者の権利が明確に定められている。その一つが、公衆送信権（同法第23条）だ。

「公衆送信」については同法2条1項7号の2に定義されているが、写真に関して簡単に言えば、写真をインターネットで公開したり、テレビ番組で放送する行為が該当する。なお、インターネットで公開する場合は、アップロードした時点で保護の対象になる。

公衆送信権も複製権と同様、公衆送信することは著作権者だけに許された行為である。もし第三者が勝手にアップロードしたら違法行為に当たる。著作権者が自らアップロードした写真を、第三者が勝手に別のWebサイトなどにアップロードすることは、著作権者が持つ公衆送信権を侵害することになり、違法である。もし第三者が、他人の写真をアップロードしたければ、その写真の

著作権者の許諾を得なければならない。

20年前までであれば、写真の著作権は、複製権だけを理解しておけばよかったが、インターネットが普及した現在において、公衆送信権についての理解は欠かせない。複製権については、これまでも旅行代理店のパンフレットに勝手に写真が使われる事件などがあり、これはいわばプロ同士のトラブルだが、公衆送信権については、スマートフォンやPCで誰もが容易に写真をインターネットにアップロードできてしまうことから、加害者は一般人に広がり、トラブルが拡大している状況だ。

### ●インターネットに写真を公表する上の注意

インターネットにアップロードして公表した写真は、著作権法で守られている。他人が勝手にその写真をダウンロードしたりプリントすることは、それが個人的な範囲であれば複製権の侵害とはならず例外的に認められている（同法第30条）が、別のWebサイトなどに勝手にアップロードすれば公衆送信権の侵害になるし、元のダウンロードも複製権侵害になる。著作権者としての対抗方法もあるが、現実的に著作権侵害されると、気分は悪いし、法的措置には時間も費用も掛かる。では、どうするべきか。

まず、自己の所有物に名前を書くように、予防措置として自らの権利を明らかにしておくことは必要だろう。写真データに著作権情報を埋め込んだり、著作権表示を明記しておくことが一般的だ。著作権表示は、©で示す。©マークと最初の公表年、それに著作権者の名前を列記するのが一般的だ。もちろん、©表示がなくても法的保護は受けられるし、一方で、公表の際に写真に氏名やペンネームを著作者（著作物を創作した人）として表記すると著作者として推定される（同法第14条）。

デジタルでの流通を予定しているなら、ウォーターマーク（電子透かし）やブロックチェーン技術の活用なども考えられるが、インターネットで普通に公開した写真是、キャプチャすればデジタルで簡単にコピーすること

ができます。勝手にコピーされても利用価値が低いように敢えてサイズを小さくしてアップロードする方法もあるかも知れないが、作品の発表という本来の目的からも遠ざかってしまうのが悩みどころだろう。

## ●無断使用された場合の対処

自らの写真が無断複製されたりインターネットへ無断アップロードされたりした場合、著作権者である写真家は、無断複製者に対し、複製行為の停止や複製物の廃棄、インターネットでの公開の停止などを求める差止請求（同法第112条）が行える。また、損害賠償請求や不当利得返還請求をすることもできる。

もちろん、その侵害内容次第では、公開停止の連絡をするだけで終わらせる場合があるかも知れない。一方、侵害の程度によっては、金銭的な賠償を求める必要もあるだろう。不安があれば、弁護士に相談したほうが安心だ。また、インターネットでの被害の場合、相手が誰か分からぬ場合もあり、その場合、プロバイダ責任制限法に基づく送信防止措置や発信者情報開示手続を行うことが必要だ。

こうした民事的な対応だけでなく、警察に告訴して刑事罰を求める事もできる。ただし、刑事罰が科せられるには故意で行った場合に限るため、著作権侵害をもたらすとは気づかなかった場合には該当しない。また、告訴には期間制限（犯人を知った日から6ヶ月以内）がある点に注意したい。告訴は口頭でも可能だが、一般的には告訴状の提出を持って行うことが多い。なお、著作権侵害の法定刑は10年以下の懲役または1000万円以下の罰金またはその両方だ。

## ●写真を改変されたら？

写真の無断アップロードの場合、写真そのまま使われる場合だけでなく、加工・改変されてしまうことも多いだろう。この場合、公衆送信権侵害だけでなく、意に反する改変から著作物を守る「同一性保持権」（同法第20条）という権利の侵害にも当たる。この同一性保持権は、著作者に与えられる権利（著作者人格権）の一つであり、自らの写真の著作権を契約で他者に譲渡した場合にも著作者のもとに残る（正確には他者に譲渡できない）ため、著作権譲渡後も同一性保持権侵害を理由として差止請求等を行うことができるのだ。

また、写真を剽窃し、自分が著作者であると著者の名義を偽って発表する者に対しては、やはり著作者人格権のひとつである「氏名表示権」（同法第19条）の侵害に当たるため、同様の対応ができるほか、謝罪広告の掲載など、名誉・声望を回復するための措置を請求することもできる（同法第115条）。もちろん著作者人格権侵害も刑事罰が科せられる。法定刑は5年以下の懲役または500万円以下の罰金またはその両方だ。

## ●SNSとの付き合い方

今はWebサイトやブログだけでなく、Facebookやツイッター、InstagramなどSNSで公表する場合も多いだろう。Facebookやツイッターでは、シェアやリツイートという機能によって、本来の自分の友だちやフォロワーを超えて拡散する可能性がある。瞬く間に何千、何万回とリツイートされ数百万人の目に触れることも珍しくはない。当然、好評価ゆえに拡散するのだが、拡散すればするほど必ずマイナス評価のコメントを容赦なく返してくれる者が現れる。このことを覚悟して、拡散したことを喜ぶ気持ちがなければ、SNSの活用は難しいかもしれない。

拡散した写真が盗用されることもよくある。SNSに限らずWebサイトやブログでも同様だが、匿名の場合も多い。盗用した側は、匿名だからと削除を要請しても感じないかもしれない。ツイッターであれば、ツイッター社に盗用である旨を申告して削除してもらう方法もあるが、上記したプロバイダ責任制限法に則って、発信者情報開示請求を行うことが必要な場合もあるだろう。昨今では発信者情報開示請求の件数も増えノウハウが蓄積されているので、請求する場合にはこの分野に詳しい弁護士に相談するのがよい。

新興のSNSによっては、利用規約に、投稿した写真などの著作権はSNS側に譲渡されると書かれている場合がある。写真家の法的な権利の源泉は著作権なので、これを譲渡してしまってはいけない。自分の権利の扱いがどうなっているか、SNSやほかのインターネットサービスを利用するときは、利用規約を精読して確認しておくことをお勧めする。

## ●おわりに

著作権は、写真家にとって生命線である。自らの権利を守るために、また、うっかり他者の著作権を侵害しないためにも、写真に関わる方には、基礎的な知識を身につけて欲しい。ACCSでは、設立以来「法」「電子技術」「教育」の三つの観点から管理のしにくいデジタル情報の保護活動を推進してきた。写真家の皆様とも協働して行きたいと思うので、ぜひ連絡してください。

久保田 裕（くぼた ゆたか）



一般社団法人コンピュータソフトウェア著作権協会（ACCS）専務理事。山口大学特命教授。公益社団法人著作権情報センター理事。特定非営利活動法人全国視覚障害者情報提供施設協会 理事。文化庁文化審議会著作権分科会 臨時委員。同基本政策小委員会・国際小委員会 専門委員。（株）サテティファイ著作権検定委員会 委員長。

# 第45回2020JPS展

## 展覧会は2021年5月に開催予定

副会長 松本徳彦

2020年は、新型コロナウイルス感染症の蔓延で、全世界が揺れることとなりました。JPS展委員会としても日々状況が変化する中で、開催実現に向けて準備をしてきました。応募くださった皆様のなかにも感染者がいらっしゃるのではないかと心配しています。JPS会員にとっては、日々の撮影業務が中止になるなど、フリーランスの悲哀を身に染みて感じる毎日ですが、皆様からいただいた沢山の応募作品を前にして頑張ってきました。

コロナウイルス感染症拡大が広がる中、協会は「第45回2020JPS展」の開催を2021年5月に延期することにしました。

今年の文部科学大臣賞は、柴田ただしげさん(68)の「神使」(3枚組)に決まりました。作者は大阪の神社で鳥居の神額に蜂が巣を作っているのを発見し、これはきっと神への使者を遣わされたのだろうと思い、奉納された白馬と白装束姿の神官の後姿を組み合わせ、神社の神聖さを印象づけるように周囲を暗く焼き込んで心象性を強調しています。単純化された画像が見る人の心をとらえ莊厳な雰囲気に浸るようにと、画像処理されたようです。その巧みさが評価されたのでしょうか。

東京都知事賞は河本花波さん(22)の単写真「パパ、はじめてのおむつ替え」に。日常的な光景でありながら、ここまで真に迫った行動の一瞬をとらえた写真は少ない。パパの真剣なまなざしとママの「大丈夫…」と心配そうに手を貸そうとする姿に、「早くしてよ」と叫ぶ赤ちゃん、この三位一体の瞬間をローアングルでとらえた臨場感が素晴らしい。

金賞は西原洋一郎さん(77)の「休憩時間」。愛知県国府町の夏祭りで、芝居の出を待つ男衆がスマホに熱中するあられもない姿を撮されました。現代の若者像の一端を表しています。

銀賞はインド、ヒンドゥー教の春祭り「ホーリー祭」(5枚組)。松田マキコさん(62)の作品で、色粉や色水をふりかけ互いの幸福を祈願する祭りを組み写真で表現しています。2つ目は新井尚さん(77)の「疾駆」で、馬が疾走する様子はわかりますが、蹄跡やブレはどのようにして表現されたのか分からぬ不思議な写真であるところが魅力のようです。

銅賞、安養寺亨さん(60)の「サンドアート」(3枚組)は盛り土の上部が崩れかけている山のような1枚目。2枚目は乾燥した白い土の山に人影が映したもの。そして3枚目は白煙を上げる火山を模したような疑似風景のようで、作者の心象風景のようでもあります。モノクロプリントが美しい。早瀬きせらさん(65)の「男気」は、燃え盛るいまつに駆け登る男衆の「男気」をとらえたもので、その気迫が表現されています。そして渡部和範さん(69)の「旅

の楽しみ」はお仲間と撮影旅行に出掛けた際にとられたもので、酒を飲みかわす雰囲気が楽しそうです。

18歳以下部門の最優秀賞は、村田主喜さん(17)の「香港 Revolution」(5枚組)。香港で起こった学生や民衆による改革デモを、デモ参加者の立場からとらえた秀作です。官憲との衝突場面でなく学生たちのやるせない気持ちを表現したもので、参加者の肖像権にも配慮した組写真として評価できる頗もしい写真です。

今年の応募者は1,858名、応募総数5,764枚。相変わらず高齢者の応募者が多かったですが、その一方で18歳以下の応募者が年々増加していることは喜ばしいことです。

デジタル化による種々のアプリの進化で、様々な表現が比較的容易にできるようになり、技巧的な表現が増えた一方、ストレートな力強い作品が少なくなった感じます。組み写真が多いのもJPS展の特色のようですが、異なる絵面を組み合わせるのではなく、テーマを表現する上で意図する場面の強弱で内容を組み立てる必要があります。テーマの社会性が希薄なのもイマなのでしょうか。

(4月20日記)

応募者総数	1,858名	5,764枚
入賞・入選者数	251名	428枚
会員作品参加数	30名	49枚
ヤングアイ参加数	11校	11枚



公募作品審査風景

撮影：大鶴倫宣

審査員（左から）、伏見美雪（『アサヒカメラ』）編集長、高砂淳二、野町和嘉（審査員長）、熊切大輔、水谷たかひと

## 第45回2020JPS展 関西展

【予定】 京都市美術館別館／2021年6月22日～27日

## 第45回2020JPS展 東京展

【予定】 東京都写真美術館／2021年5月1日～16日  
共 催／東京都写真美術館

## 第45回2020JPS展 名古屋展

【予定】 愛知県美術館／2021年

## 文部科学 大臣賞

賞状・盾・副賞  
賞金 50万円

柴田 ただしげ (三重県)  
「神使」カラー 3枚組



## 東京都 知事賞

賞状・盾・副賞  
賞金 30万円

河本 花波 (兵庫県)

「パパ、はじめてのおむつ替え」  
カラー単写真



## 18歳以下部門

### 最優秀賞

賞状・盾・副賞

村田 主喜 (東京都)

「香港 Revolution」

カラー 5枚組



## 金賞

賞状・盾・副賞  
賞金 15万円

西原 洋一郎 (愛知県)  
「休憩時間」モノクロ単写真



## 銀賞

賞状・盾・副賞  
賞金 10万円

松田 マキコ (愛知県)  
「ホーリー祭」カラー 5枚組



## 銀賞

賞状・盾・副賞  
賞金 10万円

新井 尚 (神奈川県)  
「疾駆」モノクロ単写真



## 銅賞

賞状・盾・副賞  
賞金5万円

安養寺 亨 (鳥取県)  
「サンドアート」  
モノクロ 3枚組



## 銅賞

賞状・盾・副賞  
賞金5万円

早瀬 きせら (神奈川県)  
「男氣」 カラー単写真



## 銅賞

賞状・盾・副賞  
賞金5万円

渡部 和範 (神奈川県)

「旅の楽しみ」 カラー単写真



## 日本写真家協会

### 会長賞

賞状・盾・副賞

日本大学  
芸術学部  
写真学科

タイトル  
「ノイズ」

利川 萌々  
野口 花梨

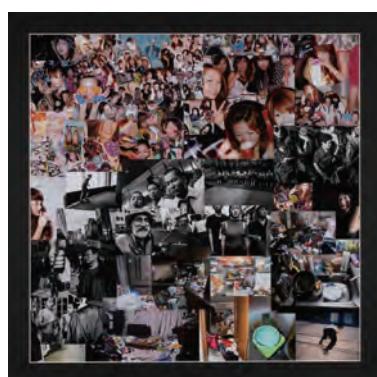


## ヤングアイ

### 奨励賞

賞状・盾・副賞

学校法人 Adachi 学園  
ビジュアルアーツ専門学  
校・大阪



タイトル  
「We live in  
JAPAN.」

富上 智帆  
朝倉 健  
松井 佑奈  
石川 歩果  
柳ヶ瀬ひかり



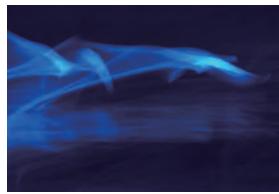
# JPS2020年新入会員展 「私の仕事」

**東京：アイデムフォトギャラリー「シリウス」**

**2020年7月9日(木)～7月15日(水)**

**大阪：富士フィルムフォトサロン大阪**

**2020年8月28日(金)～9月3日(木)**

 <p>晚秋</p> <p>朝倉 豊 (東京都)</p>	 <p>MU (青きメルヒエン 白鳥シリーズ) 伊藤 嶽英 (新潟県)</p>	 <p>Rin-Ne#1 井上 英祐 (東京都)</p>
 <p>いつもの散歩道</p> <p>今井しのぶ (神奈川県)</p>	 <p>湖上の舞 今井 広樹 (東京都)</p>	 <p>さんぽ 今浦 友喜 (埼玉県)</p>
 <p>From girl to woman</p> <p>梅元 将吾 (千葉県)</p>	 <p>猫目線 奥 清博 (兵庫県)</p>	 <p>突進 小倉 元司 (埼玉県)</p>



ロックオン



螢の光

酒井 宏和 (東京都)



路地裏に息づく芝居



郭 允 (東京都)



japonism

後藤 啓太 (東京都)



冬の匂い

佐藤 均 (神奈川県)

インド・プシュカル  
駱駝市に向かう牧畜民  
設樂 光徳 (東京都)

渴望するアフリカ

渋谷 敦志 (東京都)



天文学と印刷

玉城 尚俊 (東京都)



glass room no. 24

戸室 健介 (東京都)



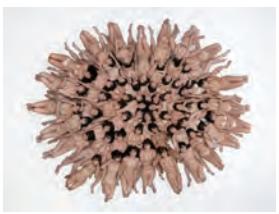
日の出の彩雲

中西 敏貴 (北海道)



ソンクラン

中村 翔 (東京都)

 <p><b>Blue</b></p> <p>滑 恵介 (広島県)</p>	 <p><b>20xx</b></p> <p>西邑 泰和 (東京都)</p>	 <p><b>日本の移民・難民レストラン エチオピア</b></p> <p>藤牧 純也 (東京都)</p>
 <p><b>PASSION - 蟻川幸雄 舞台芸術の軌跡 -</b></p> <p>細野 音司 (東京都)</p>	 <p><b>旗印と放射性廃棄物 - 2016年3月11日福島県南相馬市</b></p> <p>堀 誠 (東京都)</p>	 <p><b>一見詐欺師風</b></p> <p>牧島ヒロミツ (東京都)</p>
 <p><b>香港色彩</b></p> <p>松本 敏之 (東京都)</p>	 <p><b>Diamond</b></p> <p>峯水 亮 (静岡県)</p>	 <p><b>旋律</b></p> <p>吉 元偉 (神奈川県)</p>
 <p><b>大地を切り出す</b></p> <p>頬光 和弘 (大阪府)</p>	 <p><b>NIPPON グラビア</b></p> <p>LUCKMAN (東京都)</p>	 <p><b>naked body</b></p> <p>渡辺 達生 (東京都)</p>

※ 展示作品各自2点から編集部でセレクトした1点を50音順に掲載しました。 (構成: 小池良幸)

JPS 2020年新入会員展 実行委員会: 今浦 友喜、井上 英祐、佐藤 均、中村 翔、堀 誠

## 写真解説

ランドセルを手にしたアフガニスタンのタルワサちゃん  
(表紙写真) ————— 内堀タケシ

2004年から始まった使用済みランドセルを途上国に贈る「ランドセルは海を越えて」の活動は、年々寄贈者が増え、すでに20万個を超えるランドセルがアフガニスタンに渡った。6年間使っていいた自分のランドセルを途上国に送るという国際支援は、小学生にアフガニスタンという紛争の絶えない遠い国を身近なものと感じ、戦争や紛争、難民や貧困などの国際問題を現実のものとして捉える良い機会となっている。

また現地で7年目を迎えるランドセルは、机の代わりに使用されたり、ランドセルを背負って登校する子ども達の姿が、村々の就学率を上げる事にも役立っている。

(写真集『7年目のランドセル』)

だるまの隊列(タゲリ)(表4写真) ————— 高城芳治

琵琶湖北部は、東に伊吹山がありその裾野に広がる田園地帯は寒くて雪深い地方である。そして、野鳥の多い所でもある。

夕刻、数十羽のタゲリが民家近くの田んぼに舞い降りた。しばらく撮影を続けたが、そこから動く気配は無く、ねぐら入りだろうと思われた。夜更け過ぎになると雪が降り出し、私は連泊を決めた。明け方、私は良い出会いを想像しながら昨夜の場所に行くと、タゲリがダルマの歩兵隊のように雪の中にじつとうずくまって待っていた。それは、まさに感激の瞬間だった。撮影が一段落すると、突然大空へ一斉に飛び立った。

撮影地は滋賀県長浜市。

(写真展「～野鳥 瞬・彩・美～」)

#### ◆ JPS ギャラリー

行事 出番待ちの親子、僧侶 ————— 垂井俊憲

今回の写真集は約900mの山深い真言密教道場、世界遺産高野山の厳しい自然の中にある美しい風景と、その中で寒水行・托鉢・護摩焚き行など多くの修行をされている僧侶たちを捉えた作品になっています。代表の作品は行事の合間に出番を待つ親子の僧侶です。あまり見ることのできない、安らぎを覚える写真集となりました。そのような内容を撮影した映像もご覧いただければと思います。

動画 URL:<https://youtube/HHE6Oh5LkBc>

ハドソン湾の結氷を待つホッキョクグマ ————— 大竹英洋

11月初旬。海岸に荒々しい息遣いが響く。場所はカナダ、ハドソン湾西岸のシール川河口。アザラシ狩りに海氷を必要とするホッキョクグマたちが、毎年この時期になると集まってくる。海流や塩分濃度の関係で、広大なハドソン湾がこの周辺から結氷することを経験から知っているらしい。

海が凍るのを待っている間、主にオス同士が会うと、ボクシングやレスリングのように押したり組んだりする「スパーリング」という行動が見られる。命がけの争いではないが、体長2メートル、体重400キロを超える巨体がぶつかりあう様には圧倒される。

チキュウニ ウマレテキタ ————— 小西貴士

この20年間山や森や野をガイドしながら、子どもたちの姿を撮り続けてきた。2011年の年の暮れ、八ヶ岳南麓の森で6歳の子どもたちと森を歩いていた時のこと、カラスの騒がしい声とキツネの姿に導かれるようにして、森の片隅で大地に還ろうとする雄ジカの亡骸に出会った。

その時グループでいちばんのお調子者のしゅうと君が、私が止める間もなく亡骸に手をあて「まだあたたかい」とつぶやいた。このコロナ禍で生命の妙を感じないわけにはいかない。今日この頃、あの子たちは何を想っているだろうか。

Dinosaur egg ————— 秦 達夫

宮之浦岳からの下山の時に見つけた卵形の岩です。見つけたと言っても、登山道の脇にあり誰も見向きもしない普通の場所にあります。長い屋久島の歴史の中で、この岩を撮影したのは僕だけではないかと思えるくらい普通の岩です。

屋久島は縄文杉を代表とした樹齢数千年の巨樹達が有名ですが、実は巨岩も沢山あります。不思議なことに主だった山の頂には巨岩が必ず鎮座しています。これは島の生い立ちと大きく関係しており、考えると浪漫がありすぎて眠れなくなるほどです。そんなお話を何処かでお聞かせしたいものです。

長崎 被爆のロザリオ ————— 大石芳野

1945年8月9日の11時2分、米軍は長崎市民の頭上500mで原爆を爆発させ、一瞬にして15万以上の死傷者をもたらした。深堀譲治(1931年生)は長崎中学校(爆心地から3.3km)で被爆し、母親は自宅(同600m)で即死、近所にいた弟妹も亡くなった。父親はすでに病没していたため彼は一人だけになり、差別と困窮、原爆症に苦しむ戦後の歳月を送ることになった。被爆の時に着ていた学生服を膝に置いて、自宅の焼け跡から見つけ出したロザリオとマリア像を手にしながら破壊された凄惨な爆心地の様子を語った。

「0歳」～令和元年108人のBabyたち～ ————— 生原良幸

今回の写真作品は、改元を機に令和元年生まれの赤ちゃんたち108人を撮影したものです。家族や病院の協力を得て、退院までの数日内に撮影しました。

生まれたばかりでも個性はさまざまです。ありのままで可愛く、力強い、そして命の原点となる無垢な魂を表現しようと思いました。

赤ちゃんが頑張って一生懸命に生まってきたこと、お母さんも必死で頑張り尊く大きな仕事をやり遂げたこと、感動しながら撮影しました。笑顔も、泣き顔も、そしてママとの2ショットもとても楽しかったです。

(今号のFUJIFILM Xギャラリーは休止です)

<座談会>

## 「写真雑誌の果たしてきた役割とこれから、そして文化」



出席者：月刊『カメラマン』編集長 坂本直樹さん、月刊『日本カメラ』編集長 佐々木秀人さん

月刊『アサヒカメラ』前編集長 佐々木広人さん、月刊『CAPA』編集長 菅原隆治さん（氏名 50 音順）  
JPS 出版広報委員会 委員、司会：JPS 出版広報委員会 伏見行介

2020 年 7 月 14 日（火）於：(株) MASH 市ヶ谷 Office

2020 年という年は、写真界に関わりを持つ者にとって、大きな衝撃を受ける年となった。それは月刊『アサヒカメラ』と、月刊『カメラマン』という 2 つの写真雑誌の休刊と、オリンパス株式会社の映像事業の譲渡というものであった。出版物が売れないといわれるようになって久しく、それは写真家にとっても切実な問題となっているが、さりとてこの状況を開拓する特効薬が見つかっていないというのも事実である。それでは渦中にある写真雑誌の編集者は、今、何を考え行動しているのか。写真雑誌の編集長の皆様にお集まり頂いた。

### ■写真雑誌のこれまで

—— 私たち写真家にとって、今年に入っての月刊『カメラマン』と月刊『アサヒカメラ』の休刊は、かなりのショックを受ける出来事でした。また、オリンパス株式会社の映像事業の譲渡という出来事もありました。本が売れないといわれるようになってずいぶん時間が経っています。その厳しさは、私たち部外者にはなかなかはかりきれない部分もありますが、そのような状況の中で、それでは当事者の方々にはどのような思いがあったのか、そしてなお発行を続けている写真雑誌の、これから役割は何であるとお考えなのか。そのあたりをお話頂ければと考えまして、今日、お集まり頂いたという次第です。皆さんにまずお伺いしたいのは、写真雑誌とは何なのか？ということです。これは個人的な思い出なのですが、昔、篠山紀信さんが「どこにも載せてくれない写真を載せてくれるのが写真雑誌だ」と『アサヒカメラ』に書かれていたのを読んだことがあります。なるほどなあと感心したことがあります。まずは皆さんの仕事のこれま

でを振り返りながら、そのあたりからお話し下さい。

佐々木（広） 篠山さんがおっしゃることは分かります。写真家の方が撮る写真には二通りのものがあるって、ひとつは商業ベースに乗るもの。つまり、雑誌媒体であればグラビアページに掲載されるような「売り物になる」写真です。もうひとつは「作品」。純粹に写真を愛する、写真を撮るのが好きな人に対して、「どう？ この写真凄くない？」と問い合わせてみせたりする。そのような写真をプロの写真家が『アサヒカメラ』に持ち込むという流れなのだと思います。カメラ雑誌とは何なのか？ というご質問ですが、私は創刊当時の『アサヒカメラ』という雑誌は、金持のための趣味の雑誌であったのだろうと考えています。ごく一部の、写真を撮るのが好きなアマチュ



月刊『アサヒカメラ』前編集長 佐々木広人さん

アの方々に、「プロはこんな写真を撮っていますよ」とお見せするのが、写真雑誌の役割だった。「アマチュアが撮りたいと思う写真と、プロが作品として世に出す写真がほぼ一致していた時代」のことです。その流れは1980年頃まで続いている。そうなると「写真の撮り方」であったり、「メカの解説」であったり、「写真家の考え方」というようなテーマが記事になり、これを百貨店的に揃えて本が出来上がる。写真家の大辻清司さんが本誌の1986年1月号に書かれたのですけれど、「『アサヒカメラ』が公正な教科書だった」と。写真雑誌とは、そういう位置づけだったのだなと、その時に感じました。

**坂本** 私はトータルで11年弱『カメラマン』の編集長を担当しました。月刊『カメラマン』という雑誌は、最初から最後まで「カメラ雑誌」であって「写真雑誌」ではありませんでした。カメラ愛好家のための、カメラ、レンズ、その他アクセサリーなど、さまざまなグッズの紹介と使い方と、ノウハウ、つまり撮影法の紹介をしていましたのであって、月刊『カメラマン』が「写真」を前面に押し出して記事を創ったのは、42年間の歴史の中で、恐らく5回か6回です。では、なぜそういう編集方針だったのかというと、月刊『カメラマン』の版元はモーターマガジン社であって、元々は車とバイクの本を作っていた。そうしていると1970年代にスーパーカーブームというのがあって、その時には本が売れましたから、それでは会社でも1台スーパーを買おうということになり、会社の駐車場にランボルギニーがやって来た。そのランボルギニーを使ってイベントを開いたら、やって来た小学生、中学生が皆カメラを持っている。それを見た四輪誌編集長が「日本には大人向けの写真の本はあっても、中学生、高校生向けの向けのものがない。それを創ろう」と言い出して、月刊『カメラマン』が生まれたのです。ところが、モーターマガジン社に入社した人は車かバイクが好きで入ったのであって、写真についての専門的な知識はない。だから本作りも難しいものは避けたのです。そうしないと、まず自分たちが解らない（笑）。

**佐々木（秀）** 私どもの『日本カメラ』が創刊した時には、既に『アサヒカメラ』がありましたから、まずお手本となったのが『アサヒカメラ』でした。プロの写真による口絵があって、メカの記事、ハウツーの記事があって、アマチュアが参加する月例がある。それが雑誌の3本の柱です。先ほど、写真の本なのか、カメラの本なのかというお話がありましたけれど、私どもは両方です。私たちは総合写真雑誌ということを謳い、すべてのものを採り上げるということを宿命として負いながら、本作りを続けてきました。

**菅原** 月刊『CAPA』は1981年の創刊です。版元の学研にカメラ雑誌を創ろうという土壤はなかったのですが、写真やカメラに熱心な外部スタッフがおり、カメラ雑誌創刊の企画を持って入社した。そして当時はアイドルブーム。ステージイベントでは大勢の中高生

が写真を撮っている。そういうヤングが楽しめるカメラ雑誌を立ち上げたそうです。創刊時の『CAPA』のキャッチコピーは「アクティブカメラマガジン」です。既存の写真雑誌とは違って10代、20代を対象にした本作りをしました。撮影会を開催したりして、読者が参加できる誌面作りを中心へ、私たちも、読者と一緒に本を作っていくことを考えました。『CAPA』という名前の由来は、これは皆さんからいろいろと言われているのですけれども、「CAMERA PAL」の略なのです。カメラ友だち、ですね。もちろんロバート・キャバは意識していたでしょう。ヤング向けだからとアイドルの写真ばかり載せるのではなく、キャバの特集をはじめ若い人に知ってもらいたい写真家の活躍や作品も紹介していました。キャバの弟のコーネル・キャバが来日した時に、当時の編集長が『CAPA』という名前の雑誌を作っていましたとお話ししていただいたら大変に喜んでもらえて、お墨付きを頂きました（笑）。

月刊『CAPA』編集長  
菅原隆治さん



## ■写真雑誌が果たしてきた役割とは何か

—— 写真雑誌がこれまでに果たしてきた役割は何であるとお考えでしょうか？

**菅原** 投稿などの形で私たちの雑誌に参加しながら、今は写真界で活躍なさっている方がたくさんいらっしゃいます。かつて私どものコンテストに「コダック・キャバ杯」というものがありまして、この年度賞を獲るとイーストマン・コダック社の見学に行けました。それをきっかけとして今も活躍されている、現在40代50代の写真家さんがたくさんいらっしゃいます。写真雑誌のコンテストから写真界に巣立った方は多いはずです。

**佐々木（広）** 登竜門ですよね。カメラ雑誌はアマチュアにとっての登竜門であり、指南書であった。それでは読者の人が、どれくらいの年齢から『アサヒカメラ』を読み始めたのかというと、小学校、中学校では



なく、もう少し高い年齢になつてからという読者の方が多いという感触があります。そういう読者の方がそのまま年齢が上がつくると、これは私たちにとっての音楽がそうではないのかと思うのですが、最新のヒットチャートなどどうでもよくて、自分にとつていぢばん良いのは昔聞いた音楽であると。これと同じ図式を当てはめると、読者の人の興味が古い時代の写真にばかり傾倒して、新しいものを採り入れようとしなくなる。この点については、違和感を感じることがありましたね。良い写真と感じるのは昔の写真だけれど、雑誌は毎月買っているというのは、何のためなのかな?と。

**坂本** 分かりやすい言葉で言うのであれば、小学生、中学生などの若い人たちに写真の撮り方を教えたということ。それからアマチュアとプロの接点を作ることができたのだと、そういう自負はあります。読者参加型のイベントを通じて知り合つた人も多い。有名カメラマンの奥様が、カメラ雑誌のイベントで知り合つた女性であったという例もありますし、そのような人の輪を作ることはできたのだと思います。月刊『カメラマン』のイベントで、実際にプロの撮り方を目の当たりにして、憧れて、そしてプロになったという人がたくさんいらっしゃいます。

**佐々木(秀)** メーカーと読者を繋げる役割も担つてたように思います。日本のカメラ産業が伸びた時代に、私たちの雑誌も伸びたと感じますね。ところがカメラの売上が落ち始めると、私たちの本もそれに歩調を合わせるようなところがあった。雑誌とメーカーとは、切っても切れない仲にあるのだと思います。

— 少し調べてみたのですが、2007年に『女子カメラ』(インフォレスト刊)が創刊されて、2012年に『IMA』(アマナ刊)という雑誌が創刊されている。それ以降はメジャーな版元の創刊はないのです。WEB媒体であれば、新しいものもありはするのですが。



月刊『カメラマン』編集長  
坂本直樹さん

**佐々木(広)** 出版物の売り上げがいちばん大きかつたのは1996年のことです。そこがピークで、実はそれから後は下り坂なのです。

— 1995年にカシオのQV-10が発売されて、1999年にニコンのD1が発売されている。その後はキヤノンがEOS Kiss-Digitalを出し、2012年に「東京カメラ部」が生まれ、2017年には「インスタ映え」という言葉が流行語になった。近年の写真界にはそのようなエポックがあつたのですが、それでは写真界の今、現状はどうなつているとお感じでしょうか?

**佐々木(広)** フィルムやプリントの写真が主だった時代は、多くの写真家はほぼ同じ方向を目指していたと思います。それがデジタルカメラができる、SNSという発表媒体も生まれた。そうしたことでの写真界が目指す方向が非常に多様化した。悪い言い方をするのであれば、さまざまな方向に散つてしまつた気がします。捉えどころがなくなつてしまつたというのが、私の感覚ですね。写真の表現が非常に多様になり、技術についても、同様にさまざまなベクトルが生まれた。そうなると、それらを月刊誌という紙の定期刊行物でどう拾つていくかが非常に難しい問題になったのです。雑誌という媒体で採り上げようとしても、非常に中途半端な記事になつてしまうことがある。例えば「木村伊兵衛写真賞」で評価される人と、SNSを媒体にして風景の写真を撮っている人と、共通するものは何だろう?これはもう方向性がまるで違つていて、定期刊行物の限られたスペースでは包括しきれません。その中で、これだけ多様化した写真の世界を紹介していくことは、もう無理なのかもしれない、私が「アサヒカメラ」の編集長を務めた最後の頃は、そんな思いにさいなまれていました。

**坂本** それは本当にその通りです。これからはWEBでやって行くしかないのかなというのが、会社としての方向性ではあるのですが、すると今度は、WEB媒体で紙媒体に負けるわけには行かない。そう考えてゆくと、媒体として何を目指すのが良いのかが非常に解り辛い。行き場がないという表現が良いのかどうか。写真界が天と地に分かれてしまつているというのでしょうか。天の側にいる人は、ウン百万円の機材でガンガン撮る。その対極にいる人はスマホがあれば良い。そのような状況の中で、総合写真誌を出したとして…、買って下さる人はいるでしょう。けれども、「マス」が存在するのか?どこにあるのでしょうか。

**佐々木(広)** 恐らく写真界にマスというものは、存在しないのでしょうか。

— 写真を撮つている人は増えているはずですよね。

**坂本** それはそうでしょう。

**佐々木(秀)** これは一つの分析に過ぎないのでけれど、仮に一つの写真雑誌を1年間定期購読したとして、そのことでどれくらい写真について詳しくなるのか、あるいは撮影技術が向上するのか?もしかした



『女子カメラ』創刊号



『IMA』Vol.1 創刊号

ら、かえって写真のことが解らなくなってしまう可能性がありはしないだろうか。そうすると、自分で本を作りながら、この仕事が成り立っているのだろうか、と解らなくなってくることがあるのです。どういった読者層をターゲットにするべきなのか？それでは自分自身が、新たに写真を撮り始めるこにして、機材は何が良いのだろう。一眼レフである必要はないかもしれない。そんな考えになってきますね。実は私どもの雑誌でも、次は特集で銀塩写真をやりますし、その次はスマホをやる予定です。いろいろやってはいるのですが、何がいちばん良いのかは、正直に言って分かりませんね。

**佐々木（広）** ストライクゾーンは分かりませんね。

**菅原** カメラ雑誌を買う人は限られています。写真を楽しんでいる人はたくさんいます。けれどもカメラ雑誌を買う人はそのうちのごく一部です。そのような状況の中で、これだけ多岐に分散した写真の世界を全部取り込むことは無理でしょう。今日ここに4つの雑誌の編集者が集まっていますが、皆それぞれ個性があるように、それぞれの雑誌は性格が異なっている。それではその領域を広げたとして読者が増えるでしょうか？そうとは限らないでしょうね。もし媒体が特色を鮮明にしようとするならば、コア層に訴えていかなければならぬでしょう。写真技術の解説しかり、動画の撮影法しかりです。けれどもそうすると、それは「商売」にはなりにくくなってしまいます。元々、雑誌という媒体は実売と、広告収入という両輪によって支えられていたわけですが、それも今は崩れています。

## ■カメラ雑誌の使命は終わったのか

—— やはり、時代の変化が急で大きくなっているということでしょうか。

**佐々木（広）** 私が『アサヒカメラ』の編集長になったのが2010年代の初め頃のこと、もうSNSが急速に広まっていますから、写真の「古き良き時代」は存じ上げません。大規模な撮影会などのイベントはコスト的に実施が厳しくなり、小さなイベントを開いてそれを濃いものにしようと。するとお客様は15名くらいのものです。写真家の先生にも濃度の高いお話を

して頂いて、参加費は高めに設定する。そういう形に変わって行きましたね。

**菅原** 私どもの『CAPA』がいちばん卖れたのも、1995年から96年にかけての頃でしたね。その頃は3,000人規模の参加者を得て撮影会をやっていました。ちなみに今年7月から、学研プラスと日本創発の共同出資によって設立されたワン・パブリッシングの発行に移行しています。これだけ大きな規模の撮影会は無理でも、グループ会社の力を借りてまた読者イベントをやりたいと思っています。

—— 昔、パソコンの雑誌の仕事をしていたことがあります。けれども、その本は休刊になった。編集者が「『アサヒ洗濯機』という本はないだろ。そんな本はなくても使い方は分るんだ。パソコンも同じことで、本がなくても使い方は分る。パソコン雑誌の役割は終わったんだ」と言われたことがあります。

**佐々木（広）** パソコンは操作するもので、使い倒す道具である。カメラも道具ですが、そこから生まれる写真は創造性と付加価値の高いものだと思います。これは野暮ったい言い方なのかもしれないけれど、これは芸術活動であって、そこにマニュアルなど存在しないのだから、テーマが尽きるというものではなく、雑誌のような媒体の必要性はあるのだと思います。私たちはそういう記事も創ってきました。ただ、現状のニーズとなると、絶対数は少なくなってしまっているわけです。

—— ニーズがWEBに行ってしまっているということでしょうか。

**佐々木（広）** ですから今、写真展や写真集の発売を控えた写真家へのインタビュー記事をメインに配信しています。WEBであれば、コア層、ターゲットを明確にして記事を作れますし、分量的な制約もないですから、紙媒体の時のような悩みはなくなりますね。



月刊『日本カメラ』編集長  
佐々木秀人さん



—— 女性読者の存在を強く意識した写真雑誌には、美容室に本を置いてもらうことを狙って本作りをしているところもあると聞いたことがあります。

**佐々木（広）** 今日ここに集まつた4誌というのは、恐らく「写真を撮りたがる」人が読む本であると思います。けれども、そういった「写真そのものを愛でる」という考え方で作られている本もある。『アサヒカメラ』の場合は、それが混在しています。多様性の時代にあってそれはむしろ悲劇です。何から何までを混在させてしまうと、身も蓋もなくなってしまいかねない。そこに紙媒体の難しさがあります。

**佐々木（秀）** 混在ということであれば、私どもの媒体にもそれはありますね。

**佐々木（広）** 振り切ってしまう、つまり媒体としての狙いを完全に定めてしまえば、本作りの方向性は明確になり、そうして作られた本は、あるいは1冊3,000円であっても購入する人はいるでしょう。けれども、一般市場で勝負する商業誌のほとんどはそれだと収支が成り立ちません。取次や書店といった流通に乗せるのであれば、相応の内容と、価格設定と、部数が必要であるというのが現在の状況ですね。

**菅原** WEB媒体だと、流通の問題はクリアできますが、紙媒体と比較して収益構造を安定化させるのが難しい。情報の提供だけでお代をいただくことはできません。有料でもコンテンツを買ってくれる読者がどれだけいるのか。独自のコンテンツを数多くコンスタントに作る難しさもあります。そしてPVがそこそこあっても広告がぼんぼん入ってくるわけではないから広告収入も限られる。これも媒体にクライアントが協賛するという形で、独自の広告タイアップをやって売上を作っていくなければなりません。

**佐々木（広）** 現状のWEBの世界では、紙媒体に比べて広告収入の単価が低い。私は今、AERA dot.というWEBニュースの編集長を兼務していますが、広告収入をどう得るかが大きな課題です。無料配信のWEB媒体の場合、圧倒的なページビューを獲得する、つまり、できるだけ多くの人に見てもらえるようになるか、相当のブランド力を獲得してタイアップ企画などによって広告を出してもらえるようになるかのどちら



らかしかないわけです。

**菅原** あとはECですよね。自社サイトで商品を売る。どのカメラ誌もいわばそれがブランドですから、そこにお客さんを集めて直接コンテンツや商品を買つていただく。PVの獲得数と比例してECへの流入も増えますから、それを元手に新たなコンテンツ制作ができます。システムの構築や維持、運営で大きなコストがかかるのが問題ですが。

**佐々木（広）** 世の中にさまざまなコンテンツが氾濫している中で、それではカメラと写真の記事で、爆発的なPVが取れるでしょうか？これは難しいです。

**坂本** WEB媒体に対して純広。純然たる広告は、今は獲得できませんね。何らかの形でタイアップにしなければ駄目です。そういう時代ですね。

**佐々木（広）** WEB媒体であれば、広告を出さずとも、メーカーが自社で創ることができるので。極論すれば、腕の良いWEBデザイナーが一人いれば良い（笑）。もちろん、読者は広告は広告として見ます。広告の臭いがする記事も嫌う。このあたりは今の

読者は嗅覚が優れていますから、第三者的な、掘り下げのある記事を作ることができれば、そこには価値が生まれます。けれども、それで収益が上げられるのかというと過度な期待はできません。この構造に、現代の媒体運営の難しさがあります。

**菅原** 今、仰られた第三者的な掘り下げた記事を創ることはできるのです。けれども、それを圧倒的な数の読者を得られるほど質を高め、情報を拡散し、継続をするには、膨大なエネルギーが必要で、簡単にできることではありません。

**佐々木（広）** 紙媒体であれば、1つの作品、1枚の写真の色を出すのに大変な手間がかかりますが、このあたりは読者の人にはなかなか伝わらない。けれども、WEB媒体であれば、そのあたりの苦労は抜きにして、どんな作品かをざっと伝えることができる。すると読者にとっての価値観というのは、まず速く、間違いのない情報が出ているかどうかということになってきます。紙媒体のように、後追いで深い情報を出しても、読者にとっては「あ、それはもう知っている」で終わってしまい、精査して作られた濃い情報であっても、興味の対象にはなりにくい時代なんですね。

## ■職業写真家という意識のない時代

—— 実は今、カメラマンも大変な時代なんです。クライアントさんがどこも、自分たちで写真を撮るようになっている。デジタルでWEB媒体だけの仕事をしている人たちには、将来はどうするつもりなのかな、と



桃井一至委員

いう疑問は残っています。職業写真家の団体は幾つかあるのですが、そのどこにも今は人が入って来ない。

**佐々木（広）**若い人はどう職業写真家という意識は持っていないでしょう。写真に対するイメージが変わってきています。WEB媒体だけで仕事をしている人は写真をプリントするという概念がない。SNSだけで有名になった人というのは、カメラマンにしても、ユーチューバーと同じ感覚を持っているのでしょうかね。

**菅原** JPSにしても、APAにしても、職業写真家の団体ですよね。けれども新進の人たちは、まず表現するということが先にあって、WEBならWEBという媒体の中で評価を得ることができれば良いわけです。それで「食うこと」などは大切なことではないのです。これはひとつの流れですから、私たちが軌道修正ができるわけではありませんし。これがまた変わってゆくこともあり得る。写真を撮っている人は増えています。けれども紙媒体で発表することに魅力を感じない人が増えているのであれば、仮に紙媒体の人が何かのブームを起こしたとしても、それが長続きするとは思えませんね。

**佐々木（秀）** フィルム時代、それも「ベルビア」で風景写真を撮ることが流行した時代がありました。今その時代の写真を見ると、彩度の上がり方が凄い。けれどもそれと同じことが、今までデジタルの世界で起こっている。そういう流れを見ていて、写真にも変わらない何かがあるのだろうとは思います。良い写真の本質は変わらないのだということが確認できるということでしょうか。

**坂本** でも紙媒体は買わないかな。悲しいけれどね。

**佐々木（秀）** 悲しいですね。私たちはまだ書籍の電子化は進めていません。社内的には「紙と心中」という意識も強くて（笑）。ただ、8月20日発売9月号からは電子版も紙と一緒に出すようになります！

**佐々木（広）** 「私たちは世の中の流れに迎合しない。オンラインで行く」で、本当に行けるのであれば、もちろん、それで良いわけです。けれどもそうはなりにくい。カメラ雑誌は総合的に色々なものを採り上げてゆくメディアです。言ってみれば4階建てくらいの百貨店であるわけです。ではそれを1階ずつに切り離して営業して、4つを集めれば4階建て分の売り上げになるのかというと、そうはならないのです。私たち自身を振り返ってみて、今月、書店に行ってカメラ雑誌を買った人がどれくらいいるでしょうか？恐らく少ないのでないでしょうか。そういう時代なのです。書店も大変な勢いで数を減らしています。白状しますと、私が「アサヒカメラ」の編集長になった時も、経営陣から「最後の編集長になるかもしれない」と言われました。もちろん、現場に入ればそんな意識で仕事をしている人間など誰もいません。現場の長としては「ど～んと来い」という姿勢になります。その一方で冷静に数字に向かい合わなければならぬ部分もある。色々と考えさせられましたね。

**菅原** カメラ雑誌というのは、出版界がこのような状況になってしまって、他のジャンルの雑誌に比べれば落ち込みは少ないのです。それはなぜかといえば、固定読者がいるからで、けれどもそれは新しい企画を進めてみても、伸び代も少ないということになるのですね。それでは誌面を変えて行こうと考えたとする。例えば表

紙のデザインを変えてみると。するとそれは、新規の読者に訴える力を持ちますけれども、それと同時に固定読者が「買うのを止める」きっかけ作りになってしまう可能性もある。物が売れない時代であるだけに、変化を作るというのは、大きな冒険になりますね。

**坂本** 編集長の立場としては、表紙は変えられませんね。価格は変えられますけれど、表紙と判型は変えられない。

**佐々木（広）** 料理でいえば、具材は変えることができるのですけれど、器はなかなか変えにくいのです。変えなければならない時は、気づかれないように変えていくしかない。

## ■これから写真家に求められるものは

—— 少し、未来に向けての話もしましょう。これからカメラマンは、どのようにあるべきとお考えでしょうか。

**佐々木（広）** 大規模な仕事を目指すよりも、小規模の仕事で個性を發揮して生き残っていくという考え方になるのかなと思います。そして写真家の皆さんには自活が必要になってくるでしょう。仕事の宣伝をしようにも宣伝媒体がないですから、写真の売買を直接的なビジネスとして育てる必要があると思います。紙であるにせよ、WEBであるにせよ、あまり媒体にはしがみつかない方が良いような気がしますね。

—— 私たちが経験を積んできた時代は、東京なりの中央で頑張ってトップになる。これ凄く古い言い方なのですが（笑）、そうすれば仕事は向こうからやって来るという感覚でした。



伏見行介委員



**佐々木（広）** その仕事を世に出して、人に見せて認知してもらう。その機会をどこに求めるかが重要になります。今までであれば媒体があった。ところがこれがどんどん減って、その代わりにSNSなどの媒体を持てるようになった。けれども、今度はそれを認知してもらうのが難しくなりましたね。昔は良い仕事をしていれば、自ずと人に知られるようになった時代だった。けれども今はそうではない。知られないままでいたら、永遠に認めてもらえない時代なのです。

—— カメラマンや、写真雑誌が、もっともっと啓蒙活動、あるいは技術指導を続けなければならないということはありませんか。

**佐々木（広）** 上には上があるというその理由、理屈が解っている人であれば、それで大丈夫でしょうね。逆にそれが解らないままでいると、今はカメラの性能がいいので偶然に良い写真が撮れた時点で、「ああ、これでいいや」で終わってしまう。今のアマチュアカメラマンの中には、そう考える人がかなりの割合でいますから、私たちが、何かを簡単に決めづけても、それが評価されるかどうかは解りませんね。それから、これは少しばかり愚痴めいた話になってしまいますけれど、カメラメーカーの努力がもっとあっても良いように感じます。たとえばギャラリーでの作品の展示。写真展はほとんどが1週間程度で、平日は17、18時頃には閉館、土曜・休日が休館のところも多い。これでは会社勤めの人がいつ写真を見に行けるのでしょうか。自分たちの都合で仕事を決めるのではなく、ユーザーの立場に立って環境づくりをして行かないとい、見向きもされなくなります。1社だけの努力でも不十分です。たとえば、メーカー各社が集って、品川などにギャラリー村を作り、そこは年中無休でオープンしているというような環境を作っていくないと、カメラメーカーは誰からも相手にされなくなるかもしれません。逆に、なぜCP<sup>+</sup>にあれだけの人が集まるのかという話ですよ。

**菅原 啓蒙、写真の教育ということで話をしますと、昔の写真と、今の写真では質が違っているということ**



日本カメラのWEBサイト トップページ



でしょうね。この座談会の初めの方で、「昔は目指す方向が同じだった」という話が出ましたけれど、例えばフィルムカメラの時代であれば、教えることも簡単だった。まず技術的な壁がありましたから。今のカメラは失敗しませんからね。それでは、その人が撮りたい写真とは何かという部分をアドバイスするのが、現代の写真の指導です。けれどもこれは、フィルム撮影や、プリントの技術を教えることよりも遥かに難しいわけです。

**佐々木（広）** その人がカメラから離れた時に、自分の撮り方が決まっていくということかもしれませんね。

**菅原** そういうことだと思います。

—— 企業であるとか、組織の壁を超えることができないというのは、日本の文化なのでしょうかね。

**佐々木（広）** そうなのかもしれません。

**坂本** モーターショーの場合は、皆で話し合って、遅い時間であっても見学ができるようにやり方を変えていきましたけれどね。入場時間を21時まで延長した。入場者数が爆発的に伸びました。もちろん、これには車メーカーも協力しました。それではカメラメーカーは何をやっているのかなと思ってみると、何もやっていない。

**佐々木（広）** メーカーにとって、カメラ部門が社運をかけた存在ではなくなっているからなのでしょうかね。



日本カメラのWEBサイト News&Topics

— 東京都写真美術館も、コロナによる入場制限がかかるまでは、入場可能な時間を遅い時間まで延ばしていた。これを始めた時に内部ではブーイングもあったと訊いてはいますが、けれども入場者数は伸びた。そういう実績があるのですから、カメラメーカーがそのような試みを何もしないで、けれどもユーザーが減っていると悲鳴だけあげるのは、少しおかしい気もしますね。

**佐々木（広）** メーカーにとっての努力とは何なのだろう？それはギャラリーを充実させて写真を多くの人に見てもらえるように環境を整備するということではなくて、ギャラリー、ショールームのような非採算部門は整理して、いかに効率良く製品を売って行くかということの方に目が向いているのではないでしょうか？確かに、「写真文化」を育てる大切さを力説するのは簡単ですが、企業にとっては支出がかさむことでもあるのは事実です。例えば『アサヒカメラ』があと4年間刊行を続けて、創刊100年を迎えたとする。たぶんこのまま4年間発行を続けたら、それこそ巨額の赤字を生んでいたことは間違いない。会社が他部門の黒字で無理やり支えることもできたかもしれない。けれども、それで、他の部門に対して経営者が説明ができますか？ということです。経営の立場に立てばそういうことになりますから、ただ無責任に「文化を残せ」と声高に叫び続けることはできません。そういう難しさが常につきまとっています。

— 東日本大震災が発生した後の2012年には、写真界はV字回復を見せています。手頃な一眼レフも発売された。けれども今回も同じ図式にはなりそうにない。

**坂本** 仮にコロナがこの後に収束したとしても、V字回復にはならないでしょう。

— 紙媒体がなくなった後は、どのようなお仕事に変わるのでしょうか？

**坂本** WEBは続けます。それから物販ですね。「eコマース」事業を展開します。私どものオフィスの1階には写真が飾られていますけれど、あれは商品でもあ

ります。お客様の目に止まったなら、販売も行うということです、定期刊行物はないけれど、ムックは続けます。定期刊行物は固定費がかかりますが、ムックであればその部分は足かせがなくなります。紙媒体を発行するのであれば、固定費を減らして、定期発行にはこだわらない、そういう形態で事業を続けることになりますね。

— 出版社であることのメリットというは何でしよう？

**坂本** ものごとをまとめ技術を会得しているのが編集者であるということでしょう。写真家の言われるままに本を作るのではなく、それであればちょっと形を変えて読者に見せてあげようとか、そういう技術です。実はこのキュレーションの技術というのは、本作りだけではなくて、ビジネスのあらゆるシーンで応用が効くものであると考えています。会社の会議でも強弱をつけてみる、そういう力を、基礎的な能力として備えているのが出版社の人間であると思います。

**佐々木（秀）** 編集をやっている人間には、一般社会では通用しないのではないかというノリの人間もおりますが（笑）、それでも好きだからやっているという思いが強いのは編集者の特質でしょうね。これは写真家の方も同じなのだろうと思いますが。

**菅原** これからは『CAPA』というブランドを高めつつ、他の事業でそのブランドをどう活かしてゆくかも問われることになるでしょうね。仰られたように、編集者のキュレーションの能力が他のビジネスで活かされることがあるようになります。

**坂本** 私は人からよく「これからはフリーで動けるね。人脈が活かせるね」と言われるのですが、自分自身の願望としては、それよりも先に、まず家でゆっくり休んで、ビールを飲んで、本を読み、それから考えようと。ちょっと達観しています（笑）。

— そうしているうちに、また良い考えが浮かぶことでしょう。皆さん、本日はありがとうございました。

（構成／出版広報委員・池口英司、撮影／出版広報委員・川上卓也）



CAPA CAMERA WEB トップページ



CAPA CAMERA WEB 特集ページ

### シグマ

SIGMA 初フルサイズミラーレス専用  
超望遠ズーム DG DN 版「ライトバ  
ズーカ」誕生

SIGMA 100-400mm F5-6.3 DG DN OS | Contemporary はミラーレス専用設計により、本格的な撮影に必須となる高い光学性能と機能を凝縮しつつ、フィールド撮影に重要な軽量さとコンパクトさの両立を図りました。最新技術を集結させた光学設計により、画面中心から周辺、そして全焦点域での高解像・高コントラストを実現し、高画質での撮影が可能です。

最新のアルゴリズムに最適化されたステッピングモーターによる高速かつ快適な AF はもちろん、約 4 段分に相当する強力な手ブレ補正 OS 機構をレンズ内部に搭載しています。さらに、手ブレ補正機構が搭載されたカメラボディと組み合わせることで、角度ブレの補正をレンズ側で行うため、より強力に手ブレを抑制します。さらに、フードをつかんでズーム操作ができる直進ズームで、直感的かつ素早いフレミングが可能で、ズームリングと直進ズーム、ふたつの方法で操作ができる“デュアルアクションズーム”に対応しています。望遠レンズにチャレンジしてみたい方から、望遠レンズを知り尽くした方まで、様々な楽しみ方に間違いなく価値を提供できる“ライトに楽しめる超望遠ズーム”です。

SIGMA 100-400mm F5-6.3 DG DN OS | Contemporary

希望小売価格：120,000 円（税別）

【問い合わせ先】

株式会社シグマ

担当：カスタマーサポート部プロサポート課 桑山輝明

TEL：044-989-7436

mail：spinfo@sigma-photo.co.jp

【製品情報】

<https://www.sigma-global.com/>



### ニコン

ニコン史上最強の AF 性能を搭載したフラッグシップモデルのデジタル一眼レフカメラ「ニコン D6」を 6 月 5 日発売

AF 性能が前機種の「D5」から大きく向上し、ニコン史上最強の AF 性能を実現した「ニコン D6」を 6 月 5 日に発売しました。フォーカスポイントには全点クロスタイルかつ選択可能な高密

度 105 点 AF システムを新たに採用。AF センサー密度は約 1.6 倍、選択可能なクロススタイルセンサーの点

数は 3 倍と大幅に増え、高い合焦性能を発揮します。さらに、新開発の AF 専用エンジンにより、約 14 コマ / 秒の高速連続撮影でも全点同時測距を実現し、被写体への AF 追従性能が向上。また、新アルゴリズムの採用により、被写体にフォーカスを合わせ続ける性能を強化し、被写体の前を横切る障害物にも惑わされることなく、狙った被写体の狙った位置にピントをより確実に合わせます。

「D5」の操作性・ホールディング性はそのままに、プロの撮影をサポートする使いやすさを追求。堅牢性、耐久性や防塵・防滴性能に加え、セキュリティーワイヤーにも対応しリモート撮影時などの盗難を防ぎます。

NIKKOR F レンズとの組み合わせで決定的瞬間を捉えるとともに、撮影した画像を瞬時に届けなければならぬプロフェッショナルフォトグラファーのニーズに応えます。

【問い合わせ先】

株式会社ニコンイメージングジャパン  
ニコンカスタマーサポートセンター ナビダイヤル

TEL：0570-02-8000

【製品情報】

<https://www.nikon-image.com>



なく、このスペックから星景写真分野での活用が考えられ、もちろんオートフォーカスに対応しますが、マニュアルフォーカスでの操作性も考慮に入れ、ピントリングの前後で AF-MF の切り替えができる、「ワンタッチフォーカスクラッチ機構」を搭載しています。さらにピントリングの回転方向をキヤノン社製レンズ、ニコン社製レンズに合わせるようにそれぞれマウントごとに方向を作り分けるなど、こだわった作りです。最短撮影距離は 28cm。

希望小売価格は 73,000 円（税別）

【問い合わせ先】

株式会社ケンコー・トキナー

担当者：田原栄一

TEL：03-6840-2970

FAX：03-6840-2962

【製品情報】

<https://www.kenko-tokina.co.jp>

### 清里フォトアート ミュージアム

新型コロナウイルス感染防止のため開催を見送っていた「2019 年度ヤング・ポートフォリオ」展を、7 月 1 日より 11 月 8 日まで開催いたします。

本年は K・MoPA 開館 25 周年にあたります。当初は、開館記念日（7 月 9 日）に併せて館長である写真家である細江英公の回顧展を準備していました。しかし、世界中が困難に直面する現在、発表の場を失い苦闘する、世界の若手写真家たちの情熱の灯火を絶やさないことが、K・MoPA にできる最善のことと判断しました。そこで細江英公展を来年に延期、「2019 年度ヤング・ポートフォリオ展」を開館 25 周年の夏に公開することにより、若手写真家たちに新たな時代を託すこととしたします。

当館が毎年開催してきたヤング・ポートフォリオ（YP 展）も、25 回目を数えました。東欧、アジア全域から日本まで、2019 年度に応募された 22 国、152 人の 3848 点から厳選された、22 人による 136 点のプリントを一挙に公開します。

YP 作品は、若い写真家の生きた証そのものです。すぐれた芸術家は、青年期に自己の個性を確立し、生涯の代表作を生み出し、新たな時代を切り拓いてきました。K・MoPA は、芸術における青年の価値を世に問い、彼らが作品に込められた生命の息吹を感じていただきたいと思っています。



## 【問い合わせ先】

清里フォトアートミュージアム

担当：綱

TEL：0551-48-5599

休館日 8月は無休。入館料・アクセスなど  
詳細は当館ウェブサイトをご覧ください。<https://www.kmopa.com/>

## キヤノン

新世代のフルサイズミラーレスカメラ  
EOS R5 & EOS R6 発表

“EOS R5”は、新開発のCMOSセンサーや新映像エンジン「DIGIC X」により、静止画・動画において、新たな映像表現を可能にした新世代のフルサイズミラーレスカメラです。

多くのEOSユーザーに支えていただいたい“5”とEOS R SYSTEMが出会う瞬間が来ました。“5”であることが、すべて。』“5”ブランドに相応しいカメラが今、誕生します。また、“EOS R6”は、フラッグシップモデルに匹敵する高速連写や高感度撮影などの性能を、小型・軽量ボディーに凝縮したフルサイズミラーレスカメラです。

詳しくは、下記キヤノンHPをご覧ください。

## 【製品に関する問い合わせ先】

キヤノンマーケティングジャパン株式会社

キヤノンお客様相談センター

TEL：050-555-90002

<https://canon.jp>

## 【製品情報】

<https://cweb.canon.jp/>

軽量・コンパクト。日頃の持ち歩きはもちろん、荷物の負担を減らしたい旅先でも高い利便性を発揮します。本レンズは光学性能にもこだわり、特殊硝材LDレンズやXLDレンズを贅沢に使うことで諸収差を大幅に抑制。画面の周辺部分まで高画質な写りを可能としました。

また、最短撮影距離は広角端で0.19m、望遠端で0.8mと高い近接撮影能力を

持つほか、AF駆動には高速・精密なステッピングモーターユニット「RXD (Rapid eXtra-silent stepping Drive)」を搭載。簡易防滴構造や防汚コートなども採用し、快適な撮影をサポートします。風景写真からポートレート、スナップ写真まで多彩なシーンを鮮やかに描く、革新的な高倍率ズームです。

## 【製品に関するお問合せ先】

株式会社タムロン

タムロンレンズ お客様相談窓口 ナビダイヤル

TEL：0570-03-7070 / 048-684-9889

受付時間 平日 9:00～17:00 (土日・祝日・弊社指定休業日は除く)



## タムロン

## ソニーEマウント用の高倍率ズームレンズ 28-200mm F/2.8-5.6 Di III RXD (Model A071)

これまでタムロンが培ってきた高倍率ズームレンズの技術力やノウハウを注ぎ込み、ソニーEマウント用の28-200mm F/2.8-5.6 Di III RXD (Model A071) は誕生しました。高倍率ズームとしては世界初となるF2.8スタートの明るさを確保。広角端28mmから望遠端200mmにいたるズーム全域においても高い描写性能を実現します。幅広い焦点距離をカバーしながらも、サイズは長さ117mm、質量575gと

たま、全体の光量調整ができます。調光は露出計に任せて、フラッシュの送信機はカメラに装着したまま、煩雑な着脱作業からも解放されます。

## 【お問い合わせ先】

担当：株式会社セコニック 露出計営業部 吉澤・杉山

TEL：03-3978-2366

FAX：03-3922-2144

メール：[meter@sekonic.co.jp](mailto:meter@sekonic.co.jp)<https://www.sekonic.co.jp>

## オリンパス

## 「OLYMPUS OM-D E-M5 Mark III 12-45mm F4.0 PRO キット」発売中

オリンパス株式会社は圧倒的小型・軽量システムの魅力を最大限に引き出す本キットを発売中です。強力なボディー内5軸手ぶれ補正や121点オールクロス像面位相差AFなど、高性能を凝縮したミラーレス一眼カメラ「OLYMPUS OM-D E-M5 Mark III」に、開放F値固定の標準ズームレンズとして世界最小最軽量ながらズーム全域でシャープな画質を実現した「M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO」の組み合わせは、様々なシーンで軽快な本格的撮影を可能にします。

## 【お問い合わせ先】

オリンパス株式会社 オリンパスプロサロン 担当：塚本

TEL：03-5909-0212(11:00-18:00木、日定休)

## 【製品情報】

<https://www.olympus-imaging.jp/>

## セコニック

## L-858D からフラッシュのワイヤレスコントロールができる専用トランスマッター2機種を発売

株式会社セコニックは露出計「スピードマスター L-858D」専用のトランスマッター RT-BR (broncolor専用)、RT-GX (Godox専用) の2機種を発売いたします。RTシリーズをL-858Dに装着することによって、露出計側からワイヤレスでフラッシュをコントロールできます。既に発売されているRT-EL/PXに加えて、トランスマッターRTシリーズは3機種のラインナップとなりました。RT-BRはbroncolor社のRFS2.1システムに対応し、フラッシュの発光や光量調整、モデリングランプのON/OFFをワイヤレスで行うことができます。RT-GXはGodox社の2.4GHzシステムに対応し、フラッシュの発光や光量調整、モデリングランプのON/OFFやモデリングランプの光量調整を行うことができます。

またL-858Dに搭載されたフラッシュ光解析モードやHSS(ハイスピードシンクロ)の測定(Godox用のみ)もワイヤレスで測定が可能となります。個別のフラッシュの光量調整、さらにそれぞれのフラッシュの照明比を保つ

## 「賛助会員トピックス」への寄稿ご案内

賛助会員の皆様には、会報に「賛助会員のページ」を設け、トピックスやお知らせなどの記事を掲載しています。貴社のトピックスやお知らせなどがございましたら、紙面の都合上あまり多くの文字数はとれませんが、貴社のニュース並びにお知らせなどをご寄稿下さいますようご案内申し上げます。

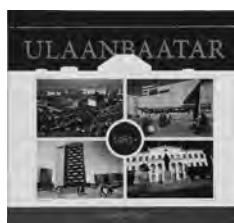
# J P S ブック レビュー

協会に寄贈された会員の出版物を到着順に掲載致します。  
(2019・12月～2020・7月)  
 ①発行所 ②発行年月  
 ③サイズ (タテ×ヨコ)、頁数  
 ④定価 ⑤寄贈者  
 ⑥電子書籍ストア



京都・鎌倉・奈良 古都櫻  
原田 寛

①日本写真企画 ②2019年4月  
 ③21 × 21.2cm、64頁 ④2,400円  
 ⑤原田氏



ウランバートル  
「1983～」  
杉山テルゾウ

①モンゴル写真家協会  
 ②2019年10月 ③24.8 × 25.8cm、172頁  
 ④2,500円 ⑤杉山氏



IN NARA 悠久の歴史、  
やまとびとの心

写真・井上博道、文・井上千鶴  
 ①光村推古書院 ②2020年2月  
 ③14.8 × 14.8cm、192頁  
 ④1,780円 ⑤発行所



富士山  
森田敏隆、森田将裕、  
森田裕貴、森田椋也

①光村推古書院 ②2019年12月  
 ③24.8 × 17cm、127頁  
 ④2,400円 ⑤発行所



人間の土地／王国 Domains 展  
奈良原一高

①JCII フォトサロン  
 ②2020年1月 ③24 × 25cm、31頁  
 ④1,000円 ⑤発行所



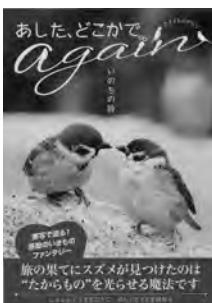
ALIVE Great Horizon  
井村 淳

①春陽堂書店 ②2020年1月  
 ③21.7 × 23.3cm、111頁  
 ④2,273円 ⑤井村氏



京の彩り 桜  
橋本健次

①青青社 ②2020年3月  
 ③14.8 × 20.3cm、112頁  
 ④1,600円 ⑤発行所



あした、どこかで。again  
～いのちの詩～  
うえだこうじ、  
文・さえぐさはなえ

①alive ②2019年11月  
 ③18.2 × 12.8cm、172頁  
 ④2,000円 ⑤うえだ氏



ナイト・ネイチャーフォト  
夜の自然を撮る方法  
田中達也

①玄光社 ②2020年1月  
 ③25.7 × 18.2cm、160頁  
 ④2,000円 ⑤田中氏



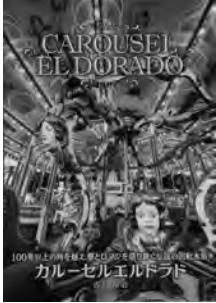
秘境旅行  
芳賀日出男

①KADOKAWA ②2020年1月  
 ③14.8 × 10.5cm、336頁  
 ④1,160円 ⑤発行所



絹道遺産～Silk Road and  
the World Heritage～  
三田崇博

①三田崇博 ②2020年1月  
 ③29.7 × 21cm、64頁 ④3,000円  
 ⑤三田氏

			
<p>「スペインの最も美しい村」 全踏破の旅 吉村和敏</p>	<p>カルーセルエルドラド 吉村和敏</p>	<p>徳一菩薩と仏たち 高橋与兵衛</p>	<p>日本アルプスのライチョウ 水越 武</p>
<p>①講談社 ②2020年2月 ③21×14.7cm、255頁 ④2,800円 ⑤吉村氏</p>	<p>①フォトセレクトブックス ②2020年2月 ③29.7×21cm、 80頁 ④4,500円 ⑤吉村氏</p>	<p>①高橋与兵衛 ②2019年9月 ③29.3×20.8cm、28頁 ④- 円 ⑤高橋氏</p>	<p>①新潮社 ②2020年3月 ③20.6×22.3cm、120頁 ④5,500円 ⑤発行所</p>
			
<p>羽音に聴く 蜂蜜と人間の物語 芥川 仁</p>	<p>光と虹と神話 高砂淳二</p>	<p>1970~80年代 阪急電車の記録 [上巻]神戸本線・宝塚本線編 [下巻]京都本線・千里線編 諸河 久</p>	<p>汚染海域—伊勢湾・1972年 竹内敏信</p>
<p>①共和国 ②2020年2月 ③19.4×15.5cm、88頁 ④2,400円 ⑤芥川氏</p>	<p>①山と溪谷社 ②2020年3月 ③21×14.8cm、144頁 ④1,800円 ⑤高砂氏</p>	<p>①フォト・パブリッシング ②2020年3月 ③25.7×18.3cm、96頁 ④1,500円 ⑤発行所</p>	<p>①JCII フォトサロン ②2020年3月 ③24×25cm、31頁 ④1,000円 ⑤発行所</p>
			
<p>しまふくろうの森 前川貴行</p>	<p>ノースウッズ —生命を与える大地 大竹英洋</p>	<p>もっと残念な鉄道車両たち 池口英司</p>	<p>女、美しく わが旅の途上で 長倉洋海</p>
<p>①あかね書房 ②2020年2月 ③27.2×21.7cm、48頁 ④1,500円 ⑤前川氏</p>	<p>①クレヴィス ②2020年2月 ③23.8×24cm、216頁 ④2,500円 ⑤発行所</p>	<p>①イカロス出版 ②2020年3月 ③18.2×12.8cm、314頁 ④1,800円 ⑤池口氏</p>	<p>①エー・ティー・オフィス ②2020年3月 ③21.5×15.8cm、127頁 ④1,800円 ⑤長倉氏</p>



**富山写真語 万華鏡**  
301 とやまの橋 302 平成から令和へ  
303 水本一太郎石像彫刻美術館 304 伏木北前船資料館  
撮影・風間耕司

①ふるさと開発研究所  
②2019年3月、7月、10月、2020年3月  
③29.7 × 21.5cm、18頁 ④500円 ⑤風間氏



**DVD 視感 国宝建築  
其ノ一～十一、総集前編**

喜多 章

①喜多 章  
②2020年 ③19 × 13.5cm  
④-円 ⑤喜多氏



**はじめてのクリップオンストロボ**  
今井しのぶ

①玄光社 ②2020年5月  
③24.7 × 18.2cm、144頁  
④1,800円 ⑤今井氏



**Traces of Yakushima**  
秦 達夫

①日本写真企画 ②2020年4月  
③29.2 × 23.2cm、80頁  
④2,727円 ⑤秦氏



**真夜中のエーテル  
新・眠らない風景より**  
松本コウシ

①Quattro ②2020年5月  
③20.5 × 29.7cm、114頁  
④4,500円 ⑤松本氏



**チキュウニ ウマレテキタ**  
小西貴士

①風鳴舎 ②2020年4月  
③21.8 × 15.2cm、184頁  
④2,200円 ⑤発行所



**1970～80年代 京阪電車の記録**  
京阪本線・宇治線・交野線・大津線（京津線・石山坂本線）  
諸河 久

①フォト・パブリッシング  
②2020年5月 ③25.7 × 18.2cm、128頁  
④1,800円 ⑤発行所



**高野山**  
垂井俊憲

①フジフォトハウス ②2020年4月  
③28 × 21cm、100頁 ④2,500円  
⑤垂井氏



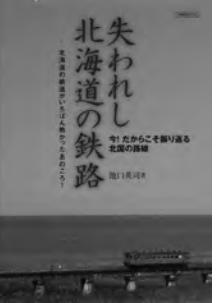
**鉄道路線誕生秘話**  
米屋こうじ

①交通新聞社 ②2020年4月  
③17.2 × 10.8cm、222頁  
④900円 ⑤発行所



**花街と芸妓・舞妓の世界**  
写真・構縁ひろし

①誠文堂新光社 ②2020年2月  
③25.7 × 18.2cm、271頁  
④6,000円 ⑤構縁氏

			
<p><b>日本百觀音靈場</b> 溝縁ひろし</p> <p>①淡交社 ②2020年4月 ③29.7×21cm、160頁 ④1,500円 ⑤溝縁氏</p>	<p><b>ハクトウワシ</b> 前川貴行</p> <p>①新日本出版社 ②2020年6月 ③27.7×22.5cm、36頁 ④1,600円 ⑤前川氏</p>	<p><b>Shadows and Light 赤外線撮影の世界</b> 石田研二</p> <p>①石田研二 ②2020年 ③25.7×18.2cm、25頁 ④－円 ⑤石田氏</p>	<p><b>失われし北海道の鉄路</b> 池口英司</p> <p>①イカロス出版 ②2020年7月 ③25.8×18.2cm、130頁 ④2,000円 ⑤池口氏</p>
			
<p><b>7年目のランドセル</b> ランドセルは海を越えて、 アフガニスタンで始まる新学期 内堀タケシ</p> <p>①国土社 ②2020年6月 ③26.2×21.5cm、36頁 ④2,000円 ⑤内堀氏</p>	<p><b>藤森照信作品集</b> 藤森照信、写真・増田彰久</p> <p>①TOTO出版 ②2020年6月 ③30×29.7cm、335頁 ④12,000円 ⑤増田氏</p>	<p><b>神さまたちの季節</b> 芳賀日出男</p> <p>①KADOKAWA ②2020年7月 ③15×10.5cm、271頁 ④1,120円 ⑤発行所</p>	<p><b>名作バレエ70鑑賞入門</b> 「物語」と「みどころ」がよくわかる 渡辺真弓、写真・瀬戸秀美</p> <p>①世界文化社 ②2020年8月 ③21×14.8cm、192頁 ④2,000円 ⑤瀬戸氏</p>

## 寄 贈 図 書

櫻井 寛様 ..... にっぽん全国100駅弁  
風間耕司様 ..... 富山写真語 万華鏡-298 旧中嶋住宅 えんなか会の四季  
..... 299 国統的工芸品 越中福岡の菅笠、300とやま水道遺  
高橋智史様 ..... RESISTANCE カンボジア 屈せざる人々の願い  
藤本 巧様 ..... Seoul 写真家が綴った韓国 1970-2013  
..... 日本の中の百済村 滋賀、大阪、そして韓国  
..... 記憶の中の風と人 写真家が綴ったソウル 2006-2017  
吉田 譲様 ..... ヒロシマ 原爆ドーム保存の半世紀  
増島 実様 ..... Welcome to the Lanna Hotel  
黒田勝雄様 ..... 最後の湯田マタギ  
クレヴィス様 ..... 岩合光昭・PANTANAL  
交通新聞社様 ..... 原口隆行・ライフスタイルを変えた名列車たち  
..... 渡辺雅史・東京駅コンシェルジュの365日  
松本典久・オリビックと鉄道、小島英俊・限界破りの鉄道車両  
日本カメラ社様 ..... 秋久秀雄・おはよう The morning ritual  
..... 町田昌弘・横濱異文化記憶帳、大貫朝義・花の精ニンフ  
光村推古書院様 ..... 土井繁孝・百年の色街 飛田新地 邪郭の面影をたどる

JCII フォトサロン様 ..... 永野太造・仏像 - 永野鹿鳴莊ガラス乾板より -  
..... 鬼海弘雄・王たちの肖像  
..... 井桜直美・幕末・明治の古写真展 開港地五港を巡る  
..... 横浜・神戸・長崎・新潟・函館 - 東京写真記者協会様 ..... 第60回 2019年報道写真展 記念写真集  
東京都写真美術館様 ..... 日本初期写真史 関東編 幕末明治を撮る  
..... 編集・林央子・写真とファッショ - 90年代以降の関係性を探る  
..... 森山大道・森山大道の東京 ongoing  
日本風景写真協会様 ..... 四季のいろ 第7回日本風景写真協会選抜作品集  
日本アリズム写真集団様 ..... 2020年「視点」第45回展作品集  
平和写真プロジェクト様 ..... 「平和と写真」写真集  
山と溪谷社様 ..... 井ノ部康之・白嶺の金剛夜叉 山岳写真家 白旗史朗  
リコーアイメージング(株)ベンタックスリコーアミークラブ事務局様 ..... PENTAX RICOH PHOTO ANNUAL 2020-2021  
日本肖像写真家協会様 ..... 人像2019  
武蔵野美術大学 美術館・図書館様 ..... 監修・大日方欣一・  
大辻清司 アーカイブフィルムコレクション 4 1975

## 2020（令和2）年度第21回 公益社団法人日本写真家協会定時会員総会報告

日時：2020年7月31日（金）午後2時～4時

場所：JCIIビル6F会議室

議決権のある正会員総数：1,410名 定足数 706名

出席正会員数：902名（内訳・本人出席 26名、代理

委任 0名、議決権行使書 876名）

2020年度の定時会員総会は、当初5月29日（金）に東京都写真美術館で開催する予定であったが、新型コロナウイルスの影響で開催を2か月延期し、会場をJCIIビル会議室に変更、会場の定員を50名に制限して行った。今回の総会では新型コロナウイルスの感染予防及び飛散防止の観点から、会員には可能な限り議決権行使書提出による出席をお願いし、賛助会員及び名誉会員の皆様へは来場をご遠慮いただいた。



定刻、進行の島田聰常務理事から2019年度の正会員物故者13名と今年度に入ってからの1名、名誉会員4名の氏名が読み上げられ、黙祷し冥福を祈る。続いて2020年度の新入会員33名が紹介され、山口勝廣専務理事が、監事2名と出席の正会員理事13名を紹介した。会場には中継用のビデオカメラと大型モニターが設置され、リモートで参加の会員への動画配信と会議参加の監事・理事の姿がモニターに映し出された。

野町和嘉会長より「協会は今年、創立70周年の節目を迎える、公益社団法人として10年目の総会開催となりました。会員の高齢化に加え、昨今の経済状況の影響で会員の退会者増加という厳しい状況に直面しています。しかし、事業活動は会員の協力もあって計画した事業はそれぞれ成果を上げています。職能団体として、今後も事業活動等の一層の発展に尽力したいと思います」と挨拶があった。

定款により議長を代表理事の野町会長が務め、定足数を超える正会員が出席していると報告され会議に入った。

### 【決議事項】

第1号議案：「2019年度事業報告及び決算承認の件」は、松本徳彌副会長が公益事業と収益事業及び共益事業について説明。2019年度の事業については、ほぼ順調に遂行することができたとし、主要項目について具体的に内容が説明された。統いて山口専務理事が貸借対照表と正味財産増減計算書をもとに、「当期の経常収益総額は134,478,089円、経常費用は143,913,038円で、当期の収支差額は9,434,949円の大幅な赤字決算となった。昨年度に引き続いで赤字決算となった主な原因は、会員数減少による会費収入の大幅な減少や広告収入の激減、予算化されていた写真教育事業が中止となり、企業からの事業協力金がなくなったこと。写真保存センターに対する文化庁からの調査研究費が年度を跨いでいることで年度中の収支がマイナスになってくること。昨年度の赤字決算を踏まえて、各委員会にて事業の見直しや予算削減等の努力をしていただき、それなりの効果を得たが追いつかなかった」との説明があった。さらに、監事を代表して税理士の櫻木康裕監事が監査報告をした。質問では、伏見行介正会員より「2期連続の赤字決算に加え、今年度の予算も赤字で組まれている。赤字解消に向けて事業計画の見直しだけでなく、根本的な組織変更、具体的にはニュース・会報・ホームページ等の広報活動の一本化などをしていく必要があるのではないか」との質問があり、山口専務理事より「会報・ニュースの

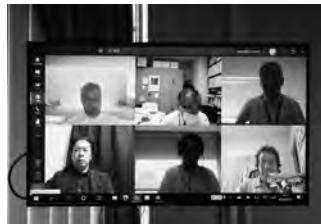
発行回数の減少をはじめ、事務所スペースの縮小や人件費の削減等、固定費を減少させるための作業を既に始めている。また、現在6つある公益事業を公1と公2の二つぐらいに統合して事業の見直しをする計画で、定款の内容にも触れる項目であるため、定款の変更など内閣府の担当官に相談の上で進めていく。具体的には、9月の理事会まで大筋をまとめ、半年間かけて赤字解消に向けての努力をしていく」と述べた。

その後、第1号議案について承認を諮詢したところ賛成絶対多数で原案通り承認可決された。

### 【報告事項】

報告事項1：「2020年度事業計画書」について松本副会長より本年度に行う事業について概略を報告した。

4月からの2020年度事業については、新型コロナウイルスの影響で5月開催予定のJPS展延期をはじめ、各委員会活動の自粛が余儀なくされ、今年度の「笠本恒子写真賞」「名取洋之助写真賞」選考が中止となり、11月予定の「JPSフォトフォーラム」の開催も中止の決定がされたと報告した。また、設立70周年記念写真展「日本の現代写真 1985～2015」の開催並びに写真史の出版についても報告した。



報告事項2：「2020年度予算書」について山口専務理事より正味財産増減計算書ベースによる「収支予算書」を基に「2020年度の経常予算は収入が146,200,000円、支出は148,114,000円で、収支差額は1,914,000円超過とした。これは3月末の時点で出した内容がそのまま記載されている。期の途中ではあるが、協会組織の見直しと運用の中で数年かけて赤字部分の穴埋めを行う努力をする」と報告した。

報告事項3：第46回「日本写真家協会賞」について、松本副会長が「凸版印刷株式会社印刷博物館に贈ることにした」と報告した。



報告事項4：会費滞納による正会員資格の喪失の件について、島田常務理事が「2019年度の会費滞納者9名については、4月17日の第46回理事会で正会員資格の喪失者として承認しており、当初総会開催予定日の5月29日をもって正会員資格の喪失手続きを行った」と報告した。

以上4つの報告が終わり、報告事項に対する質問では、伏見行介正会員から「今年度の決算予想に関するこ」「協会の広報活動でのWEB活用について」「英語での情報発信について」「それについて、いつ迄に実行するか」があり、財務担当山口専務理事は「今年度は新型コロナウイルスの影響で実行できない事業もあり、赤字は出したくない、という気持ちで進めている」と回答、国際交流担当桑原常務理事、ホームページ担当足立常務理事からは活動の現状と変革の実現について回答された。また、出席の加藤雅昭、木村正博会員からJPSホームページにおける英文対応の状況とコンテンツ制作の難しさが報告された。別の質問では、加藤雅昭会員から「2020年度JPS企画展について、事業計画書に載っていないのはなぜか」等の質問があり、企画担当の和田直樹常務理事からそれぞれについて回答された。

以上をもって会議を終了し、最後に松本副会長より閉会の辞があり、総会の幕を閉じた。

また、恒例の総会終了後に開催される懇親会は、新型コロナウイルス感染拡大の状況を受け中止となった。

（記／書記・小池良幸、撮影／川上卓也）

# 受賞・出版・写真展 2019年・日本写真家協会会員（1月～12月）

作品による会員の動きを記録する意味から年1回受賞・出版・写真展をされた方々の記録を掲載しております。資料は会員のアンケートの回答をもとに作成しておりますので掲載もれもあることと思いますがご了承下さい。

## ■受賞

会員名	受賞名	時期	理由
大竹英洋	日経ナショナルジオグラフィック写真賞 2018 ネイチャー部門・最優秀賞	2/4	「北の森に生きる」に対して
田沼武能	文化勳章	11/3	永年にわたる写真家活動に対して
富岡畦草	2019年日本写真協会賞功勞賞	6/3	近著『東京定点巡礼』を契機として、70年にも渡る東京や家族の成長記録を振り抜けた「定点撮影」の手法は、写真表現の原初的な特性を改めて明らかにした。
長倉洋海	釧路郷土芸術賞	11/23	釧路で世界の人々の文化や生活を学ぶ講座を開設、郷土の芸術振興、文化向上に貢献したことに対して
中津川隆康	第58回ビジネス広告大賞変形広告部門 銀賞	11/25	株式会社ソディック企業広告（写真撮影）に対して
西野嘉憲	日経ナショナルジオグラフィック写真賞 2018 ビーブル部門・最優秀賞	2/4	「海に生きる人」に対して
林喜代種	第29回日本製鉄音楽賞 特別賞	3/13	誰でも簡単に日常を撮る時代、撮り手の情熱は必要不可欠で、林氏の写真から感じる熱量は音楽現場そのもの。その“瞬間”は、楽壇史であり、時に言葉以上の力を持つ
ブルース・オズボーン	OEPA 2018 Book-People 部門 銅賞	2/7	写真集『OYAKO』に対して
ブルース・オズボーン	TIFA 2018 People-Family 部門 金賞	2/19	写真集『OYAKO』に対して
ブルース・オズボーン	LICC Photograghy-Professional 部門 入賞	5/10	写真集『OYAKO』に対して
ブルース・オズボーン	MIFA People-Family 部門 金賞	5/20	写真集『OYAKO』に対して
ブルース・オズボーン	IPA Book, People 部門 名誉賞	9/10	写真集『OYAKO』に対して
ブルース・オズボーン	BIFA Book 部門 銀賞、People 部門 銀賞	11/1	写真集『OYAKO』に対して

## ■出版（写真集・写真関係著書・電子書籍・CD-ROM・DVD・ビデオ等）

会員名	著書名	発行所	発行／	定価
(故)秋山庄太郎	美しきをより美しく 秋山庄太郎展	佐倉市立美術館	1/29	
池口英司	大人の鉄道趣味入門 人生の後半を楽しむための兵法書	交通新聞社	2/15	800
石田研二	Infraed Photography 2019 石田研二 赤外線撮影の世界 Shadows and Light	石田研二	1/15	
伊藤孝司	ドキュメント 朝鮮で見たく日本> -知られざる隣国との絆	岩波書店	4/18	2,200
いのうえ・こいち	ロムニイ、ハイスクールダイムチャーチ鉄道	メディアバス	5/1	2,200
今森光彦	オーレリアンの庭	クレヴィス	3/10	2,500
今森光彦	光の田園物語 環境農家への道	クレヴィス	8/29	2,500
海野和男	身近な昆虫識別図鑑	誠文堂新光社	2/12	2,200
海野和男	デジタルカメラで昆虫観察	誠文堂新光社	7/2	1,800
海野和男	小諸日記	海野和男事務所	7/20	1,000
海野和男	ファーブル昆虫記の世界	海野和男事務所	11/7	1,000
江成常夫	After the TSUNAMI 東日本大震災	冬青社	3/11	9,600
江成常夫	被爆 ヒロシマ・ナガサキ いのちの証（写真集、電子書籍）	小学館	7/3	4,600
大石芳野	戦禍の記憶	クレヴィス	4/3	2,500
大石芳野	長崎の痕	藤原書店	4/10	4,200
大鶴倫宣	Christmas Train	自費出版	11/11	2,000
大西成明	骨肉	赤々舎	3/21	3,800
大西みづぐ	まちのひかり	日本写真企画	3/26	1,400
岡崎裕武	THE CLIMBERS	上海世紀出版集團	9/	85元
岡本央	泥んこ、危険も生きる力に ないないづくしの里山学校	家の光協会	8/20	1,400
尾崎たまさき	フシギなさかな ヒメタツのひみつ	新日本出版社	5/25	1,500
おちあいまいちこ	日めくり小さな花たち（共著）	いのちのことば社	3/15	1,400
おちあいまいちこ	野の花の贈りもの（共著）	いのちのことば社	10/10	680
亀田昭雄	東日本大震災から7年	アトリエ Winds	2/14	3,500
熊切圭介	東京ワンダー 描らぐ街	クレヴィス	4/3	1,852
小澤太一	SAHARA	日本カメラ社	7/21	3,600
小林正明	土と生きる 川辺川ダム水没予定地に暮らし続けた夫婦	花乱社	8/1	4,400
(故)迫幸一	昭和の記憶	迫青樹	9/	3,000
島田聰	とびきりの日常 ある日の木更津社会館保育園	木更津社会館保育園	9/1	850
嶋田忠	LAST PARADISE 精霊の踊る森	講談社	7/17	3,600
嶋田忠	野生の瞬間 華麗なる鳥の世界	東京都写真美術館	7/23	2,000
白鳥真太郎	広告写真館	玄光社	11/1	5,300
杉山テルゾウ	ウランバートル「1983～」	モンゴル写真家協会	10/25	2,500
鈴木一雄	サクラニイキル	風景写真出版	3/15	3,300
鈴木龍一郎	寓話／RyUlysses	JCII フォトサロン	5/8	800
高尾啓介	AFTER THE GONG	忘羊社	5/20	3,000
高砂淳二	PLANET OF WATER	日経ナショナルジオグラフィック社	6/3	2,400

会員名	著書名	発行所	発行/	定価
高橋 康 資	江ノ電のいる風景	東京図書出版	1/17	1,500
竹内 敏 信	日本の桜	クレヴィス	3/15	1,852
武下 巧	瀬戸内しまなみ海道 海の時刻	自費出版	4/	2,222
谷 泰 宏	JAにしみの2020年カレンダー	西美濃農業協同組合	12/	
田畠 藤 男	たいむすりっぷ 1972~1988 昭和と呼ばれた時代	日本カメラ社	7/20	2,930
中川喜代治	歌川豊国(共著)	太田記念美術館	9/1	2,000
中川喜代治	ラストウキヨエ(共著)	太田記念美術館	11/1	2,500
長倉 洋 海	写真絵本「つながる」	アリス館	6/30	1,400
中田 昭	京都 祇園祭	京都新聞出版センター	7/1	1,600
中田 昭	日本の庭 京都	パイインターナショナル	7/20	2,200
中田 昭	・京・瞬・歎・	京都新聞出版センター	10/15	1,800
中野 晴 生	出雲大社	富山房インターナショナル	5/24	6,800
中村 路 人	Jolie Jolie	フォトアドバイス	9/6	3,800
夏目 安 男	ユメノシマ	現代写真研究所出版局	7/1	2,800
西野 嘉 憲	海人	平凡社	6/19	5,900
野沢 敬 次	四国の鉄道 1960年代~90年代の思い出アルバム	アルファベータブックス	3/5	2,500
橋本 健 次	京の彩り 柚	青著社	10/13	1,600
深澤 武	山岳・山歩き写真の楽しい撮り方	誠文堂新光社	7/8	1,600
ブルース・オーポー	OYAKO	Sora Books	2/1	2,346
前川 貴 行	生き物たちの地球	朝日学生新聞社	3/31	3,800
増田 彰 久	英國貴族の城館	河出書房新社	11/30	15,000
マツシマススム	THE WHITE EGRET 55 しらさぎ 琵琶湖幻想	日本写真企画	1/1	4,300
丸田 あつし	日本夜景遺産 15周年記念版(共著)	河出書房新社	10/30	2,600
水野 克 古	永觀堂 禅林寺(共著)	青著社	5/1	
宮入 芳 雄	高尾山昆蟲記	こぶし書房	3/28	1,800
宮武 健 仁	Shine -命の輝き-	青著社	6/27	1,500
持田 昭 俊	でんしゃあいうえお	小峰書店	2/15	1,200
森田 敏 隆	富士山(共著)	光村雅古書院	12/31	2,400
諸河 久	モノクロームの軽便鉄道 写真で巡る1960年代	イカロス出版	12/30	2,300
八木 祥 光	日本の自然「身近な草木花」編(モノクロ)、(カラー)	やるべき出版	1/28	
山岸 伸	瞬間の顔 Vol.11	山岸伸写真事務所	3/16	2,315
山岸 伸	鞍馬 BANEI KEIBA	朝日新聞出版	8/30	2,800
山口 規 子	トルタビ~旅して、撮って、恋をして~	日本写真企画	4/11	1,300
山口 規 子	柳行李	日本カメラ社	7/31	1,800
山田 和	砺波の人びと	平凡社	3/6	3,000
山本 純 一	カムイの大地-北海道・新風景-	北海道新聞社	3/15	3,500
山本 治 之	丹波篠山-美しき里の四季-	山本治之	11/	2,600
山本 昌 男	手中一滴	T&M projects	10/30	7,800
吉村 和 敏	Du CANADA	日経ナショナル ディオグラフィック社	2/25	3,200
渡辺 幸 雄	槍・穂高連峰 北アルプス	山と渓谷社	5/1	2,100

## ■写真展 (一門展・巡回展・常設展などの写真展は省略させていただきました)

会員名	写真展名	会期	会場
青木 勝	Hello.Goodbye BOEING747	10/4 ~ 10/9	オリンパスギャラリー東京
齐川 仁	小豆島物語	4/13 ~ 20/4/13	小豆島町・井上誠耕園「らしく園」内・旧真珠養殖小屋
浅井 秀 美	不忍の風~時の移ろい~	4/5 ~ 4/13	文京区・羽黒洞
浅尾 省 五	白クマたちの楽園	1/25 ~ 1/30	富士フィルムフォトサロン札幌
浅尾 省 五	浅尾省五と野生の仲間たち	7/5 ~ 9/8	広島・ウッドワン美術館
浅尾 省 五	雪国の動物たち	12/20 ~ 12/26	富士フォトギャラリー銀座 スペース1・2
足立 君 江	カンボジアの子どもたちと -スナーダイ・タマエ孤児院-	6/6 ~ 6/9	日本アセアンセンター
阿部 俊 一	瞬光が描く美瑛の大地	4/5 ~ 4/10	富士フィルムフォトサロン札幌
荒川 好 夫	北海道・冬~蒸気機関車 C62 栄光の記録~	10/5 ~ 20/2/29	北海道二セコ町・有島記念館
荒川 好 夫	ブルートレインの時代	10/5 ~ 10/6	杉並区・高井戸地区民センターまつり会場
安 珠	Invisible Kyoto -目に見えぬ平安京-	6/8 ~ 6/30	京都市・美術館「えき」KYOTO
安 珠	~少年少女の世界~「ビューティフルトゥモロウ」	9/7 ~ 11/4	高岡市・ミュゼふくおかカメラ館
安念余志子	うたかた	6/15 ~ 7/15	高岡市・ミュゼふくおかカメラ館
安念余志子	うたかたのつづき	12/10 ~ 12/15	港区・NineGallery、他
池田 勉	潜伏キリシタン・祈りの里	6/18 ~ 7/15	長崎市・ナガサキピースミュージアム
池田 勉	長崎・祈りの里	9/8 ~ 9/10	文京スピックセンター展示室2
池田 勉	托鉢寒行	11/26 ~ 12/2	長崎・まちかど市民ギャラリー
池田 宏	愛戀南極	4/23 ~ 9/1	台湾台中・國立自然科学博物館
石田 研 二	Shadows and Light Part2	1/15 ~ 2/2	港区・ギャラリーイー・エム西麻布
石橋 瞳 美	日光聖域	1/7 ~ 1/16	キヤノンギャラリー銀座
伊藤 孝 司	南と北、そして出会い~日本軍慰安婦写真展~	3/6 ~ 3/11	韓国・仁寺アートセンター
井上 嘉 代 子	北の杜・北の大地~まんまる~	1/1 ~ 1/30	山梨県・金精軒2階ギャラリー○や、他
井上 嘉 代 子	再発見する東海の風景	4/27 ~ 5/10	名古屋・ソニーストア名古屋

会員名	写真展名	会期	会場
今森光彦	写真と切り絵の里山物語	8/28~9/4	中央区・松屋銀座8階イベントスクエア
今森光彦	オーレリアンの庭	10/29~11/18	ニコンプラザ新宿 THE GALLERY 1+2
上田進一	瞬きの間に（まばたきのまに）	1/25~2/3	福井市・ギャラリー和
梅本隆	天空の國、野迫川	10/25~11/5	奈良県・古民家ギャラリー「ら・しい」
海野和男	蝶・多様性の世界～世界に蝶を求めて～	3/29~4/3	オリンパスギャラリー東京
海野和男	小諸日記20年	7/24~8/28	長野県・市立小諸高原美術館
江口慎一	風の詩集	2/15~2/21	富士フィルムフォトサロン東京
江成常夫	After the TSUNAMI 東日本大震災	2/28~3/6	ポートレートギャラリー
江成常夫	「被爆」ヒロシマ・ナガサキ	7/23~8/19	ニコンプラザ新宿 THE GALLERY 1+2
老川良一	能楽師・能面師「宇高通成」の世界	8/27~9/1	名古屋市・ノリタケの森 ギャラリー[第1展示室]
大石芳野	戦禍の記憶	3/23~5/12	東京都写真美術館 地下1階展示室
大石芳野	長崎の痕 それでも、ほほえみを湛えて、生きる。	7/4~7/10	キヤノンギャラリー銀座、長崎
太田真三	飛べないヒコーキ	2/28~3/6	キヤノンギャラリー銀座
太田真	四季故郷	5/16~5/22	キヤノンギャラリー銀座
太田有美子	いのちのかたち	11/27~12/2	逗子市・zushi art gallery
大鶴倫宣	Christmas Train きらめく街へ	11/14~11/20	キヤノンギャラリー銀座
大西みつぐ	まちのひかり	3/26~4/15	ニコンプラザ新宿 THE GALLERY 1+2
大西みつぐ	少年伝説 1980-1982	7/17~8/10	千代田区・kiyoyuki kuwabaraAG
大西みつぐ	NEWCOAST2 なぎさの日々	10/1~10/19	中央区・ふげん社
大沼英樹	忘れぬ千本桜	3/8~3/11	仙台市・藤崎本館8階グリーンルーム
大沼英樹	桜三代	6/26~7/2	新宿区・ヒルトビア アートスクエア
大沼英樹	広瀬川の光	7/30~8/4	仙台市・晩翠画廊
大沼英樹	虹の都	8/10~8/31	仙台市・ライフスタイル・コンシェルジュ
大沼英樹	光と翳	9/27~10/6	仙台市・Artgallery 社
小河俊哉	夜風景（よふけ）の写真	11/28~12/11	千代田区・富士フィルムイメージングプラザ東京 ギャラリー
尾崎たまさき	姫竜が織りなす愛の物語	5/22~6/3	リコーイメージングスクエア新宿ギャラリーI
織作峰子	スイスアルプス鉄道の旅	5/10~5/16	富士フィルムフォトサロン大阪 スペース1
KAO'RU(柴原薫)	KAO'RU Exhibition vol.15 マルキニ回想録の世界	12/16~12/22	アートスペーススキムラ ASK ?
柿木正人	震災よ！2019	3/1~3/7	ギャラリー・アートグラフ
刈田雅文	ハコモリ2	3/19~3/31	京都市・京都写真美術館 ギャラリー・ジャバネスク
川内陽	夜明けへの憧れ	12/3~12/8	大阪市・壹燈舎
川北茂貴	光の跡 Light Trails	12/5~12/11	キヤノンギャラリー銀座
川口妙子	Tender	1/8~1/14	東京・Lotus 青山
川口妙子	やっとみつけたわたしの居場所	2/20~2/28	岡山市男女共同参画社会推進センター「さんかく岡山」
川田喜久治	影のなかの陰	5/29~7/5	港区・PGI
木原尚	白鳥（美態）	2/20~3/10	見附市・ギャラリーみつけ
木村恵一	木村恵一写真展	4/7~4/19	福島テルサ4階ギャラリー
工藤智道	列島創世	6/5~6/11	新宿区・ヒルトビアアートスクエア
熊切圭介	揺らぐ街	3/7~3/13	キヤノンギャラリー銀座
公文健太郎	曇川	9/26~10/2	キヤノンギャラリー銀座
栗林慧	昆虫	5/16~5/22	アイデムフォトギャラリー「シリウス」
桑原史成	桑原史成の写真の世界	8/24~8/30	福島市・福島テルサギヤラリー
桑原史成	報道写真家が見つめた昭和	12/1~12/21	伊達市・ギャラリー伊達
小澤太一	SAHARA	6/20~6/26	キヤノンギャラリー銀座
小澤太一	赤道海国 サントメ・プリンシペ	7/5~7/14	港区・NineGallery
小澤太一	いつものみち	8/27~9/1	中央区・Roonee247 fine arts
小城崇史	Exciting Moment of Sports Vol.1	1/18~1/24	オリンパスギャラリー大阪
小城崇史	Inaugural Seazon2019 Las Vegas	9/25~10/1	FMエキシビションサロン銀座ミニギャラリー
小城崇史	FC町田ゼルビア令和元年	12/6~12/11	オリンパスプラザ東京クリエイティブウォール
小林紀晴	孵化する夜の啼き声	12/11~12/24	銀座ニコンサロン
小林正明	土と生きる～川辺川ダム水没予定地に暮らし続けた夫婦	7/25~7/31	キヤノンギャラリー銀座
小松健一	民族曼陀羅 中國大陸	3/30~4/7	前橋市・ノイエス朝日
齋藤ジン	葉脈	2/7~2/13	キヤノンギャラリー大阪
齋藤ジン	刻む	4/3~4/16	新宿区・Photo Gallery Hiramatsu
坂井田富三	#ねこまみれ6	4/12~4/17	福岡市・aプラザ（福岡天神）
坂井田峰夫	PHOTOGRAM	10/19~11/10	世田谷区・Monochrome Gallery RAIN
坂本憲司	美しき日本 奈良	4/27~6/30	奈良市・平城宮跡いざなぎ館企画展示室、京都市
櫻井寛	ザ・カナディアン	2/8~2/13	オリンパスギャラリー東京、長野県
佐藤昭一	2駆7分・旅気分～こどもの国線の四季～	6/5~6/10	町田市フォトサロン1階
佐藤仁重	NEW YORK ~ Shadow & Brightness ~	1/18~1/31	富士フィルムイメージングプラザ内ギャラリー
三田崇博	世界遺産～ぐるっと世界一周～	1/16~2/3	大阪府・高石市立図書館
三田崇博	平成の世界遺産	4/30~5/5	佐世保市・アルカス SASEBO
三田崇博	平成・令和の世界遺産	11/23~12/1	京都府・けいはんな記念公園 ギャラリー月の庭
渋谷利雄	能登の獅子舞	8/26~9/15	輪島市・市民ギャラリー いろは蔵
渋谷利雄	気多の神と写真展	10/1~11/10	石川県・羽咋市歴史民俗資料館企画展
渋谷利雄	羽咋の郷 獅子舞写真展	11/4~11/9	羽咋市・ギャラリー雲
島内治彦	結界～ニッポンの光景	7/31~8/12	リコーイメージングスクエア大阪ギャラリー
嶋田忠	野生の瞬間 華麗なる鳥の世界	7/23~9/23	東京都写真美術館2F
嶋田忠	野鳥に魅せられた男の物語	9/7~10/20	福岡市・九州産業大学美術館
下瀬信雄	天地結界	5/23~7/7	山口県立美術館

会員名	写真展名	会期	会場
白鳥 真太郎	白鳥真太郎広告写真館	11/1 ~ 12/16	キヤノンギャラリーS
杉本 恭子	阿南町 奇祭 雪まつり	3/1 ~ 3/7	富士フォトギャラリー銀座
鈴木 一雄	サクラニシス	3/1 ~ 3/7	富士フィルムフォトサロン東京
鈴木 拓也	“VVO 孤愁”	1/23 ~ 2/2	EIZO ガレリア銀座
鈴木 拓也	LIFE IS BEERTIFUL	11/13 ~ 11/22	EIZO ガレリア銀座
鈴木 智明	風の町から	2/8 ~ 2/14	富士フィルムフォトサロン名古屋
鈴木 龍一郎	寓話／RyUlysses	5/8 ~ 6/2	JCII フォトサロン
高尾 啓介	AFTER THE GONG	5/12 ~ 5/19	原宿・カフェ・ザップ
タカオカ邦彦	夫唱婦隨 -夫婦の軌跡-	4/18 ~ 4/24	キヤノンギャラリー銀座
高砂 淳二	PLANET of WATER	6/4 ~ 6/24	ニコンプラザ新宿 THE GALLERY 1 + 2
高橋 与兵衛	徳一菩薩と仏たち	9/2 ~ 10/27	福島県・磐梯山慧日寺資料館企画展示室
宅間 國博	Enjoy the Viewpoint vol.2	10/30 ~ 11/3	渋谷区・ビクトリコ ショップ&ギャラリー表参道
竹内 敏信	日本の桜	3/15 ~ 4/3	FUJIFILM SQUARE
武並 完治	伯耆大山～神宿る山の博物誌～	10/30 ~ 11/17	鳥取県立大山自然歴史館 交流スペース
谷 泰宏	第3回タニヤスヒロ スナップ展	3/4 ~ 4/25	本巣市・大垣西濃信用金庫 真正支店ギャラリー
田沼 武能	東京わが残像 1948-1964	2/9 ~ 4/14	世田谷美術館
田沼 武能	童心 -世界の子ども	3/5 ~ 4/27	中野区・写大ギャラリー
田沼 武能	時代を刻んだ貌	9/5 ~ 11/30	湯上市・ギャラリープルーホール
田沼 武能	子どもと地蔵さま	9/6 ~ 9/11	オリンパスギャラリー東京
土屋 勝義	東京夜桜美人	3/14 ~ 3/20	キヤノンギャラリー銀座
泊 和幸	里山の宇宙	10/10 ~ 10/16	ポートレートギャラリー
中桐 輝良	北海道冬の野鳥と生きものたち	1/9 ~ 1/14	岡山市・岡山天満屋 中地下タウンアートスペース
長倉 洋海	ともだち -私が出会った世界の子どもたち	9/20 ~ 10/20	高松市・アイバル香川
中田 聰一郎	乳児院から来た天使	4/19 ~ 4/24	オリンパスギャラリー東京
中塚 雅晴	出雲大社平成大遷宮御修造	4/19 ~ 4/25	富士フィルムフォトサロン大阪
中津川 隆康	きのうのゆめ～ふしぎなたびとシアワセなじどうしゃ	11/8 ~ 11/20	千代田区・ブックハウスカフェギャラリー
中野 晴生	出雲大社	5/8 ~ 5/13	島根県立美術館 ギャラリー1・2室
夏目 安男	ユメノシマ	7/12 ~ 7/17	オリンパスギャラリー東京
奈良原 一高	奈良原一高的スペイン-約束の旅	11/23 ~ 20/1/26	世田谷美術館
西田 茂雄	阿波の面魂	1/27 ~ 2/4	徳島県郷土文化会館
西田 茂雄	著名人が贈るVサイン	4/2 ~ 4/7	京都写真美術館 2階
西田 茂雄	ソロモンの秘宝発掘に挑んだ男	11/19 ~ 11/24	京都写真美術館 1階
西野 嘉穂	海人三郎	7/11 ~ 7/17	キヤノンギャラリー銀座
野町 和嘉	地球創生 ICELANDSCAPE	1/7 ~ 1/16	キヤノンギャラリー名古屋
野町 和嘉	World Heritage Journey 世界遺産を訪ねて	1/7 ~ 2/4	キヤノンオープングallery 1
野町 和嘉	World Heritage Journey 世界遺産を訪ねて	12/24 ~ 20/2/17	キヤノンオープングallery 1
ハービー・山口	私が育った街、君を見つけた街	4/27 ~ 6/9	調布市文化会館たづくり1階
秦達夫	日だまりの黒部	11/29 ~ 12/4	オリンパスギャラリー東京
原田 寛	写真集『古都櫻』出版記念写真展	4/3 ~ 4/7	渋谷区・ビクトリコ ショップ&ギャラリー表参道
HARUKI	遠い記憶。II	1/7 ~ 1/16	キヤノンギャラリー大阪
樋口 健二	「フクシマ」抹消させてはならぬ記憶	2/22 ~ 4/26	ドイツ・ゲアハルト・ハウプトマンハウス
広瀬 明代	遙かなる余韻 -平成元年中国の旅-	1/21 ~ 1/27	新宿区・PlaceM
深澤 武	奄美・琉球 Part1	2/1 ~ 5/12	石垣島・写真美術館 MIRA
福田 健太郎	平成 桜 福島	3/8 ~ 3/13	オリンパスギャラリー東京
福田 健太郎	泉の森	9/24 ~ 10/6	港区・Nine Gallery
福永 一興	蔵出し写真展	2/13 ~ 2/19	FM エキシビションサロン銀座 アンビションギンザ 1F
ブルース・ズボーン	「親子の日 2019」に出会った親子	9/13 ~ 9/18	オリンパスギャラリー東京、沖縄
ブルース・ズボーン	親子の写真展 in 沖縄	10/16 ~ 10/20	沖縄県立美術館
松本 徳彦	没後 40 年 永遠の越路吹雪	11/7 ~ 11/13	アイデムフォトギャラリー「シリウス」
水 越 武	天と地の出会いところ 地平線	1/4 ~ 1/17	ギャラリー・アートグラフ
水谷たかひと	キヤノンイーグルス写真展2019	9/13 ~ 10/8	キヤノンオープングallery 2
水本 俊也	INSHU-WASHI PHOTO EXHIBITION	2/16 ~ 2/24	鳥取県・隼 lab./ 大江の郷自然牧場
水本 俊也	南極から見た、この地球の未来	7/13 ~ 8/25	鳥取県・氷ノ山自然ふれあい館 韶の森
水本 俊也	因州和紙 -水本俊也写真プリント展~	9/14 ~ 10/27	鳥取県・城下町とっとり交流館 高砂屋
水本 俊也	鳥取砂丘写真展	9/28 ~ 10/10	鳥取砂丘ビジターセンター
満縁ひろし	芸妓 紗月の月	5/23 ~ 6/4	京都市・ギャラリー古都
満縁ひろし	「勧く美」 -写真は一瞬の芸術	7/31 ~ 8/6	京都市・ぎゃらりい西利
三村 博史	I am 舞踏派 Vol.4	2/28 ~ 3/6	アイデムフォトギャラリー「シリウス」
宮嶋 茂樹	THE CADETS 防衛大学校の日々	4/4 ~ 4/10	キヤノンギャラリー銀座
宮武 健仁	輝く光景	6/14 ~ 6/20	富士フィルムフォトサロン東京 スペース2
宮武 健仁	輝彩列島 -日本光景-	8/30 ~ 9/18	LUMIX GINZA TOKYO
虫上 智	Unforgettable	8/29 ~ 9/4	アイデムフォトギャラリー「シリウス」
虫上 智	もう一つの Unforgettable	11/20 ~ 11/27	今治市・Photo Base Space66
茂手木秀行	僕が眠るために夢・序	8/1 ~ 8/31	EIZO ガレリア銀座
桃井 一至	和解への祈り	6/7 ~ 6/12	新宿区・早稲田スコットホールギャラリー
諸河 久	ハッセルブラッド紀行/東ドイツの蒸気機関車	10/8 ~ 10/14	川口市・KAF GALLERY
八木 祥光	2300万年前～500万年前の時のレリーフ	3/26 ~ 3/31	名古屋市・ノリタケの森ギャラリー、東京
山形 豪	FROM THE LAND OF GOOD HOPE	3/12 ~ 3/23	中央区・ふげん社
山形 豪	SAFARI	10/1 ~ 10/14	ニコンプラザ新宿 THE GALLERY 1 + 2
山縣 効	観察 (SURVEILLANCE)	2/8 ~ 3/2	港区・Zen Foto Gallery

会員名	写真展名	会期	会場
山岸 伸	瞬間の顔 vol.11	3/22～3/27	オリーブバスギャラリー東京
山口 規子	柳行李	7/9～7/22	ニコンプラザ新宿 THE GALLERY 1 + 2
山下 晃 伸	『夜光性静物観察記』～東京都足立区にある公園遊具達～	6/17～6/23	中央区・画廊一丸庵
山下 晃 伸	夜光性静物観察記～星夜に吠える恐竜たち	11/8～11/14	富士フォトギャラリー銀座
山下 恒夫	日々IV	11/8～11/21	ソニーイメージングギャラリー銀座
山本 健 紀夫	写真画	2/12～2/17	京都市・京都写真美術館 ギャラリー・ジャバネスク 1F
山本 純 一	カムイの大地 北海道・新風景	4/4～4/9	札幌市・道新ギャラリー
山本 昌 男	手中一滴	1/16～2/16	新宿区・ミヅマアートギャラリー、清里
山本 昌 男	Bonsai	2/8～3/8	ミュンヘン・Galerie stefan Vogdt、アトランタ、サンフランシスコ
山本 昌 男	ITTEKI	12/12～'20/1/18	NY・Yancey Richardson Gallery
横山 聰	gravitation	7/12～7/18	富士フォトギャラリー銀座
吉田 繁	Unique trees of the Planet	11/19～12/15	モスクワ・The Timiryazev Museum
吉田 昭二	air	5/17～5/30	ソニーイメージングギャラリー銀座
吉竹めぐみ	遊牧ぐらし～草原の民と砂漠の民～	12/14～'20/3/22	横浜市・神奈川県立地図市民かがわプラザ
吉村和敏	Du CANADA	5/10～5/23	富士フィルムフォトサロン東京
米美知子	詩的憧憬	1/8～1/23	ポートレートギャラリー
米美知子	風は、うたかた。	12/12～12/18	キヤノンギャラリー銀座
米田堅持	海上保安の情景	11/20～11/26	FMエキシビションサロン銀座2F
薺田純一	新・小説のふるさと	10/2～10/14	リコーイメージングスクエア新宿 ギャラリーI
渡辺幹夫	フクシマ無窮III－平成は、終わらない－	3/8～3/14	ギャラリー・アートグラフ
物故展（常設展は省略させていただきました）			
(故)児島昭雄	追悼 児島昭雄 写真展	12/20～12/25	オリーブバスギャラリー東京
(故)迫幸一	昭和の記録	10/7～10/18	広島市・旧日本銀行広島支店
(故)丹野章	来日したクラシック音楽名演奏家	6/17～6/22	中央区・画廊るたん
(故)林忠彦	時代を語る 林忠彦の仕事	5/27～6/7	中央区・J-POWER 本店1階ロビー
(故)藤本四八	太平洋戦争の時代	7/20～9/23	飯田市美術博物館
(故)前田真三	色彩の写真家（たびびと）前田真三 出合いの瞬間をもとめて 第1部 ふるさとの調の時代 第2部 丘の時代	1/4～2/28	FUJIFILM SQUARE 写真歴史博物館
(故)真島満秀	鉄道回廊～一枚に秘められた舞台裏～	8/2～8/8	富士フォトギャラリー銀座
グループ展（会員中心のものを掲載させていただきました）			
グループ展名			
会員数			
第1回 JPS 関西写真展「平成～ひと・もの・とき～」	会員 88名	1/4～1/10	富士フィルムフォトサロン大阪、京都市
明治・大正・昭和を生きる	笹本恒子、田沼武能	1/15～3/22	中央区・ノエビア銀座ギャラリー
ASIA II	楠本秀一、辻良雄、福島雅光、松浦稔	1/25～1/31	オリーブバスギャラリー大阪
Flowers	秋山庄太郎（物故）、竹内敏信、前田真三（物故）	3/6～4/4	キヤノンオープンギャラリー1
昭和を見つめる目	田沼武能、土門拳（物故）	4/20～7/15	酒田市・土門拳記念館
JPS2019年新入会員展「私の仕事」	会員 42名	7/11～7/17	アイデムフォトギャラリー「シリウス」、大阪
永遠の海・海中2万7000時間の旅	中村征夫、中村卓哉	9/21～10/27	熊本県立美術館 本館1階展示室
中国建国70周年記念・第7回日本中国写真藝術協会展「五彩斑斕の日本と中国」	会員 8名	10/25～10/31	港区・ギャルリー・フィレンツェ
-resonance-JPS2016年度同期入会会員展	会員 24名	11/1～11/6	オリーブバスギャラリー東京
2017-18 JPS 関西同期展「視生活」	会員 11名	12/26～'20/1/8	ニコンプラザ大阪 THE GALLERY

## 第46回 2021 JPS 展 応募規定（抜粋）

テーマ：自由 \*注意事項をよくお読みください。

応募資格：アマチュア、プロフェッショナル、年齢、性別、国籍を問いません。ただしJPS会員は除きます。

応募部門：●一般部門：年齢を問いません

●18歳以下部門：2002年4月1日以降生まれの方

応募プリント：用紙サイズはA4または六つ切8×10インチ(203×254mm)に限る。カラー、モノクロ共プリントのみ（デジタル・銀塩を問いません）。デジタル加工も可。ただしデジタル加工・合成等の欄に印を入れること。作品は、必ず応募者本人が撮影したものであること。

出品点数：単写真＝制限はありません。組写真＝5枚までを1組の限度として何組でもかまいません。組写真は、左より順に並ぶように構成して番号をつけてください。ただし、写真同士を貼り付けないこと。また台紙にも貼らないで応募してください。

受付手数料：一般部門：1枚につき2,500円（組写真の場合も1枚2,500円）18歳以下部門：1枚につき800円（組写真の場合も1枚800円）

受付及び締切：2020年11月10日（火）～2021年1月15日（金）まで。郵送または宅配便に限ります。直接持参されても受付いたしません。最終日消印有効。

審査員：野町和嘉（審査員長）、小林紀晴、齋藤康一、秦達夫、大塚茂夫（『ナショナルジオグラフィ日本版』編集長）（予定）

審査結果：3月中旬頃、応募者全員に文書にて通知。また、ホームページ

(<https://www.jps.gr.jp>)とメールマガジンでも発表します（電話でのお答えはいたしません）。

展示用作品：入賞・入選作品は、後日指定する期日までに各自で指定サイズに引伸し、再提出していただきます。文部科学大臣賞、知事賞（仮称）と金・銀・銅賞作品については大型サイズになる場合があります。

展示及びパネル製作費：入賞・入選作品は、当協会特注パネルにて展示しますので、一般部門は1枚につき10,000円、18歳以下部門は1枚につき5,000円を指定の日時までに納入していただきます。応募者の申し出による入賞・入選の辞退はできません。

図録：第46回 2021JPS 展図録の刊行を予定しています。図録の原稿には応募作品を使用します。

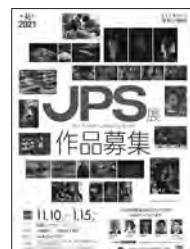
展示会場・会期：東京都写真美術館 2021年5月22日～6月6日（予定）

京都市美術館別館 2021年6月22日～6月27日（予定）

愛知県美術館 2021年7月（予定）

\*応募規定を熟読のうえ、ご応募ください。

JPS 展公式ホームページから応募作品目録のダウンロード・入力ができます。  
[https://www.jps.gr.jp/2021jpsten\\_oubouyoko/](https://www.jps.gr.jp/2021jpsten_oubouyoko/)





## 奈良原 一高 名誉会員

2020年1月19日、心不全のため逝去。88歳。

1958年入会、2008年より名誉会員。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1931年福岡県大牟田市生まれ。1954年、中央大学法学部を卒業し、早稲田大学大学院芸術専攻(美術史)修士課程に入学。1956年に開催した初個展「人間の土地」が大きな反響を呼び、写真家としての道を進めた。1958年、個展「王国」で日本写真批評家協会新人賞を受賞。1959年、東松照明・細江英公・川田喜久治・佐藤明・丹野章と「VIVO」を結成。1996年に紫綬褒章、2006年に旭日小綬章を受章された。

### ライバルであり友であった

細江 英公

1956年の5月、銀座にあった小西六フォトギャラリーで私は第1回写真展「東京のアメリカ娘」を開いた。その時斜め向かいある松島画廊では同じく初個展を開いた奈良原一高さんの「人間の土地」が展示されていた。タイトルが示すように非常に崇高で重いテーマを見事に表現しており、彼は新彗星の出現とも評された。そして、私はその時以来、ライバルとして、友人として長年尊敬してきた。

同じ年の夏、ある地方で行われた創造美育協会(全国の幼稚園・小中学校などの先生で組織された、美術を通した教育を目的とした会)の全国大会が開かれ、この大会を記録するため奈良原さんと私は派遣された。出席者公称300人を撮影し、求められれば個人的な肖像写真も撮った。この会の参加者にはある有名な音楽家のマネージャーと称する人物がいて、彼の発案で急ごしらえのスタジオが旅館に設けられ、「若

き国際的報道写真家があなたのポートレートを撮る”等々のポスターが街中に貼り出され、お陰で即席写真館は大繁盛した。撮影助手は参加者がボランティアで一人付いてくださったが、私を手伝ってくれたのは後に奈良原夫人となる中川恵子さんであった。

この撮影会には余談がある。当時前金で徴集した現金はかなりの売上げがあったが、前出の音楽家マネージャーが全て持ち逃げてしまい、彼も私も本当に困った。だが、創造美育協会の発案者であった美術評論家の久保貞次郎さんが全額負担してくださり、事なきを得たのである。今では思い出として笑い飛ばせるが、若い二人の写真家にとっては冷や汗ものであった…。

あれから64年、どうぞ安らかにお眠りください。



## 佐納 徹 正会員

2020年2月2日、胃がんのため逝去。  
59歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。  
(2002年入会)

### 佐納徹さんを偲ぶ

総務委員会

1960年 大阪府生まれ。  
1982年 中京大学法学部卒業、法律事務所に3年間勤務し退職。  
1985年 写真家楳大介氏に師事。  
1987年 独立後、スタジオローズコートを創立し、以後、スイスの光を中心活動。  
1997年 東京JCIIクラブ25、大阪富士フォトサロンにて写真展「スイスの光」開催。東方出版(株)より写真集『スイスの光』出版。  
2000年 大阪アメニティホールにて写真展「スイス、光の中で」開催。  
2001年 大阪富士フォトサロンにて写真展「スイスアルプスの光」開催。東京銀座キヤノンサロン、大阪梅田キヤノンサロンにて 写真展「スイス、光彩瞬時」開催。  
2002年 大阪ヒルトンホテルにて写真展「スイスアルプス、光のメモリー」開催。東方出版(株)より、写真集『SWISS LOVE』出版。  
2005年 大阪富士フォトギャラリー、新宿クリエイトギャラリーにて写真展「WATER SMILE」開催。  
2006年 大阪富士フォトギャラリー、新宿クリエイトギャラリーにて写真展「水のダイヤ」開催。  
スイス撮影旅行並びに国内撮影旅行(現地撮影指導として)同行多数。航空会社機内誌、企業発行情報誌面の撮影等担当。カメラメーカー主催のセミナーの講演及び撮影の指導担当。フォトコンテストの審査員を行う。  
入会17年目の2020年2月2日胃がんでお亡くなりになりました。ご冥福をお祈りいたします。



## 植村 正春 正会員

2020年3月16日、逝去。  
72歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。  
(1972年入会)

### 「見る人は見ている」が口癖だった

藤村 大介

突然、何の前触れも無く師匠が亡くなってしまった。写真の事しか頭にない、根っからの筋金入りの写真家でした。名前よりも金よりも、良い写真を求める欲求と、歳をとってもなお今後のプランを立て突き進み続けるバイタリティは、人生のエネルギーを早く消費させてしまったかもしれません。そんな岡太い生き方、写真家としての在り方は、写真家と名乗る現代の撮り手には多くは見られない、昭和の姿みを感じられる写真家でした。

弟子入りは1991年。竹内敏信先生の紹介でした。ひたすらフィルムのマウントをしていたのを思い出します。その頃の写真はシルクロードの作品だったと思います。事務所では一日中イーグルスの「ホテルカリヨルニア」が流れているのも懐かしい。

代表作「世界の駅舎」シリーズは、これ以上の作品を撮っている写真家はない、世界一の作品群。世界中の駅や街並み、文化などを大判で完璧に写しとする技術、旅のノウハウ。たくさん学びました。

私の若い頃のモンサンミッシェルの夜景は、唯一褒められた作品。6月には渾身の写真展を開催するので見に来いと。私も前面に出てくれた世界の夜景や建築などは師匠の影響。改めて思えばスナップに似ていて、似ていて思ひ付かされ驚きました。

独立後にかけられた「大介、お前は俺には追いつかない。なぜなら俺はまだ撮り続けるから」という言葉は、圧倒的で強く記憶に残っています。もちろん今はまだ追いつかない師匠のアドバナンテージ、私が死ぬまでには追いついたと言えるように頑張らないと、と思います。不器用で非社交的、営業下手なため、世間ではほとんど無名。しかし本物の写真を撮る写真家の名前を挙げよとの場では、よく出てきた師匠の名前。一匹狼という言葉が似合つた写真家でした。

最近は会う機会が減り、少し前に話した時に深く話せなかつたのが悔やまれます。写真について語り始める時と何時も続く情熱とエネルギー、もう一度写真談義をしたかった。

兎にも角にも今の自分の礎を築き導いてくれた師匠には感謝しかありません。安らかに。合掌。



## 塩田 直孝 正会員

2019 年逝去。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(1989 年入会)



## 清水 薫 正会員

2020 年 4 月 2 日、脳幹部出血のため逝去。56 歳。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(2005 年入会)

## 経過報告(2020年1月～2020年7月)

### ○1月 21 日 写真学習プログラム指導者説明会

PM200～400 JCII 会議室 参加者 32 名

### ○1月 24 日 2020 年関西 JPS 会員新年親睦会

PM7:00～9:00 クロステラス(オリックス本町ビル 28 階) 参加者 68 名

### ○1月 24 日～30日 2019 年第 15 回「名取洋之助写真賞」受賞作品写真展(東京展)

富士フィルムフォトサロン東京 入場者 7,581 名

### ○2月 5 日 page2020 オープン・イベント「日本写真保存センター」セミナー

PM2:00～4:30 池袋サンシャインシティ文化会館 7 階 参加者 63 名

○写真原板データベースとジャパンサーとの連携—写真原板のより広い利活用を目指して—

## 編集後記

○2020 年、協会は創立 70 周年を迎えた。JPS 及び写真界にとって厳しい状況下での 2020 年度の幕開けとなった。JPS 会報の発行は今号から従来の年 3 回から年 2 回発行へと変更になる。回数は減っても従来通り、会員並びに愛読者の皆様の期待に応える紙面作りを心がけていく所存だ。(田沼)

○今号から JPS 会報の発行は、従来の年 3 回から 9 月と 3 月の年 2 回へと変更になった。新型コロナウイルス感染症による非常事態宣言発令で、会報編集に関わる委員会活動はほぼ 3 ヶ月間停止状態となり、協会の主要な影響も中止が相次ぎ、会報の紙面作りにも影響が出ていたが、無理はせず新しい生活様式に対応していく。(小池)

○コロナ禍で写真学校の授業も、急速オンラインで行うことになりました。久しぶりに取り出したノートパソコンは沈黙しました。量販店で新品を買お、そのまま近所のパソコン教室へ。還暦過ぎて干からび始めた脳みそに難打って何とかオンライン授業をクリア。自分で自分を褒めた一日でした。(飯塚)

○いややはや大変な春となってしまいました。個人的には、「ならば取材に出かけず家に籠って文字を書け」と

いう依頼を何本か頂き、結局は家からまったく出ることのない春となりましたが。退屈なのでコンビニに向かう道をえみ、おお、この道は撮影ができると引っ越して 10 年後の発見も。ただ、桜の写真は皆無です。(池口)

○新型コロナウイルス感染症で世の中でんてこ舞いしている状況の中、いろいろと自粛と言う中収入激減しても生きていかなくてはならない。この新型コロナの収束後の世の中がどうなっているのか? 全く先の見えない時代の生き方、今後の自分に必ず大切な時間になるだろう。(川上)

○5 月に開催予定だった所属する日本建築写真協会「鏡座ジャック 再び!」写真展がコロナで延期となつた。展示プラン、DM デザインが完了し、展示用プリント製作前のタイミングであった。来年 6 月に開催で調整となり、今度は実現してほしい…(小野)

○新型コロナウイルス対策を実施した上で再開された J リーグ公式戦。感染防止対策は取材陣にも例外なく適用され、某クラブのオフィシャルフォトグラファーを務める私も毎日検温しています。ただ公衆衛生は約束事を守らない人が 1 人でもいると崩壊してしまうだけに、これから先が大変だと感じています。(小城)

○最近は、オンラインの新製品発表会も増えている。どこからでも参加できる便利さ反面、事前登録が必須なので、メールチェックで見落とすと参加することもできな

い。会場で顔見知りと情報交換できないことや開始時間までの時間潰しが結構なストレスだったりする。新しい生活様式に対応するには、まだまだ時間がかかりそう。(柴田)

○新型コロナウイルスの先が見えません。先が見えないのは写真業界も同じ。月刊カメラマン、アサヒカメラ休刊、そしてオリンパスのカメラ部門撤退にはビックリです。今号は写真誌 4 編集長の HOT な座談会を実施した。皆さまのご感想は?

写真誌ばかりではなく、この会報も今年から年 2 回発行に縮小。JPS も大変なのです。(伏見)

○この半年でリモート通話での打ち合わせや取材が急増。それに伴い、映像の高画質化も加速。各社から、パソコン接続用ソフトが用意されて、手元にある一眼カメラを通じた、いわゆるテレビ電話が簡単にできるようになってきた。でも、眺めるのはオジサンの顔ばかり。自分の顔はボケてくらいで、ちょうどです。(桃井)

○新型コロナウイルスによる自粛生活が続いている。イベント仕事は頓挫し、撮影も思うままに進まない。一方で子どもと過ごす時間が増えた。遊びに勉強、少しは父親らしい振る舞いができるているかもしれない。また過去の写真を眺めるうちに新しいアイデアも生まれた。思ひぬ副産物があるのだ。(山縣)

## 日本写真家協会会報 第 174 号(年2回発行) 2020 年 9 月 10 日 印刷・発行 ◎編集・発行人 野町和嘉

URL <https://www.jps.gr.jp/> Email [info@jps.gr.jp](mailto:info@jps.gr.jp) 本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます

額面 年 2 回発行: 2,500 円(消費税・送料共込)

出版広報委員 田沼武能(理事)、小池良幸(委員長)、池口英司(副委員長)、飯塚明夫、小野吉彦、川上卓也、小城崇史、柴田 誠、伏見行介、桃井一至、山縣 勉

発行所 公益社団法人日本写真家協会 (JPS)

〒102-0082 東京都千代田区一番町25番地 JCII ビル303 電話 03(3265)7451(代表) FAX 03(3265)7460

印刷所 株式会社光邦

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3丁目11番18号 飯田橋 MK ビル 電話 03(3265)0611(代表)



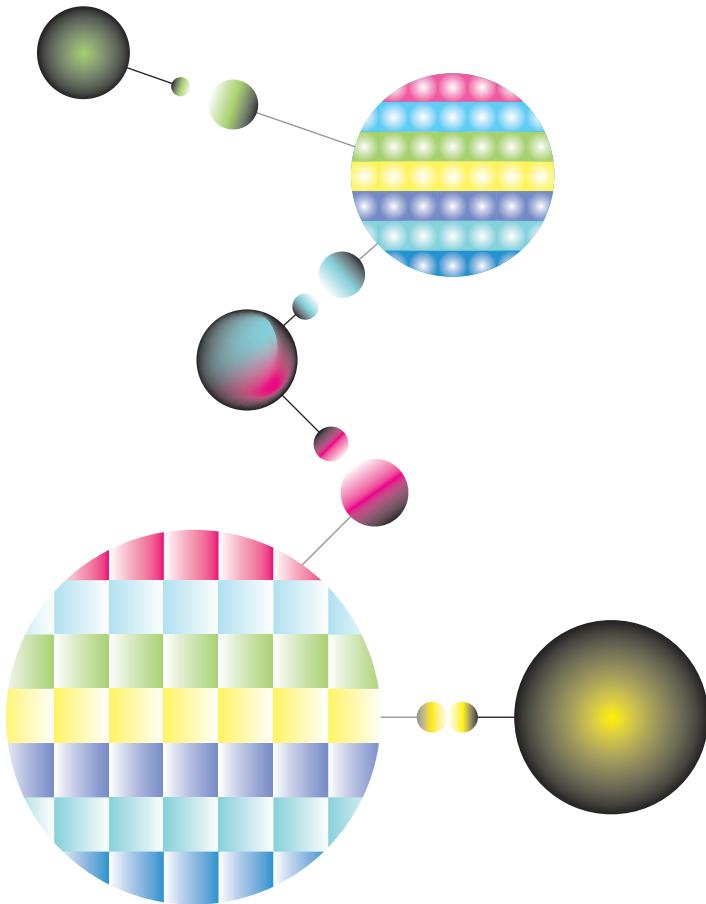
1/400, F5.0, ISO 100, EV -1.0, WB: 次選光, JC: ハードモード

**RICOH**  
imagine. change.

株式会社リコー／リコーアイメージング株式会社 [www.ricoh-imaging.co.jp](http://www.ricoh-imaging.co.jp)

**GR**

# 写真著作権を失わないために 撮影依頼を受けた時には 契約をしましょう



撮影の依頼を受けた時、公表の提案を受けた時、  
**必ず契約をしましょ。**

文面は難しいものでなくても大丈夫。  
覚書やメモでも**双方が認めていれば契約は有効です。**  
ほとんどのトラブルは、契約がないことが原因なのです。  
そして、著作権が写真家に残るよう、**交渉することも大切。**

たとえ写真著作権の保護期間が死後 70 年あったとしても、  
著作権譲渡契約が交わされたら、あなたの著作権は失われてしまいます。  
**契約は著作権の基本です。**

**写真著作権を大切に**



一般社団法人  
**日本写真著作権協会**

<https://jpca.gr.jp> 〒102-0082 東京都千代田区一番町 25 JCII ビル 403

[会員団体] 公益社団法人日本写真家協会／公益社団法人日本広告写真家協会／一般社団法人日本写真文化協会／日本肖像写真家協会／一般社団法人日本写真作家協会／全日本写真連盟  
一般社団法人日本スポーツプレス協会／一般社団法人日本自然科学写真協会／日本風景写真協会／公益社団法人日本写真協会／一般社団法人日本スポーツ写真協会

この広告は、公益社団法人日本複製権センターからの分配金による公益事業の一環として制作されています。

# HCLファインアートプリントサービス



**ILFORD  
CERTIFIED PRINTER PARTNER**

イルフォード 認定ラボ

作品を極限まで表現した「ファインアート・プリント」を国内外有数のアーティスト用紙でご提供します。

ファインアートプリントの高い技術と知識を有する

熟練のプリンティングディレクターが作品制作をサポートします。



## ハーネミューレ ファインアート バライタ

深い色合い、上質な光沢と質感、  
広い色再現域、高い最大濃度と  
滑らかなグレーの階調表現で、  
特にモノクロ写真に最適です。

## ハーネミューレ フォトラグ

精細で滑らかな面質により  
多目的に使え、モノクロとカラー  
写真のどちらにも適し、深みを  
感じる絵画的な作品に仕上がり  
ます。

## 伊勢和紙 芭蕉

滑面と粗面があり、制作意図に  
応じてどちらの面でもプリントが  
可能で違った風合いを表現でき  
ます。

〈写真は全てイメージです。〉

このほかにも条件により各種ファインアートペーパー出力の対応が可能ですのでご相談ください。

トイメイジングセンター 神田  
東京都千代田区神田小川町2-6-14  
☎ (03) 6854-9581

トイメイジングセンター 青山  
東京都渋谷区神宮前3-41-6  
☎ (03) 3479-5351

大阪営業部 営業課  
大阪府大阪市北区万歳町3-17  
☎ (06) 6313-2351

株式会社 堀内カラー

ファインアートプリントサービスの詳細はこちら▶  
webからも注文できます！ [horiuchi-color.co.jp/](http://horiuchi-color.co.jp/)



# おめでとうございます

協会では、写真技術に関する発見・発明および写真文化の発展等について、著しい貢献もしくは寄与・功績のあった個人または団体に対して「日本写真家協会賞」を贈り顕彰しています。

今回の第46回日本写真家協会賞は凸版印刷株式会社印刷博物館に贈呈します。表彰理由は、「写真文化を支え続けているものに印刷会社がある。凸版印刷株式会社はわが国の印刷業界を牽引する代表的な会社であり、運営する印刷博物館は、印刷に関わる歴史的資料の収集展示とその技術を保存継承する博物館である。私たちが日常手にする新聞雑誌から、活版印刷の原点である42行聖書などの貴重な印刷物と、それを生産した機械を展示している。付属する工房「印刷の家」では、自らが手に取って印刷体験を通して歴史に触れができる知の宝庫である。この多くの人に親しめている博物館の運営に対して」。飯田橋の印刷博物館で館長の権山紘一さんにお話を伺いました。

## —印刷博物館設立の趣旨と目的についてお聞かせください。

**権山：**博物館設立前から史料館がありました。印刷

にかかるコレクションを集めしていくという趣旨のもので、分量としてはかなりの量の資料がありました。博物館設立前に印刷博物誌という出版物を作成している時に蓄積された収蔵物を稼働できる状態で見てもらうという構想が持ち上がりました。また、日本の印刷産業を100年間支えてきた責任も踏まえて、社会一般の方にも見てもらいたいという想いがあり、2000年の凸版印刷創立100周年の記念行事の一つとして博物館を設立する事になりその10月に開館いたしました。

## —収蔵品の概要と簡単な説明をおねがいします。

**権山：**世界で一番最初に印刷されたグーテンベルク42行聖書の1枚はグーテンベルクがマイツで印刷された物も展示しています。

重要文化財である日本最初の銅製活字、駿河版銅活字も収蔵しています。1607年頃徳川家康が静岡の駿府城で朝鮮伝来の銅活字にならって銅活字をつくり、「大藏一覧」11巻、「群書治要」47巻を刊行しており、これらは駿河版と言われているものです。当館では「群書治要」を収蔵しております。

西ヨーロッパを中心とした印刷物や東アジアの印刷物など多數収蔵しております。

## —印刷博物館の展示の特長や利用方法などを教えてください。

**権山：**ドイツのグーテンベルクを中心とした西ヨーロッパの印刷の歴史と中国・朝鮮・日本などの東ア

ジアの印刷の歴史があり2つの印刷の伝統、歴史を比較しながら、2つの歴史が出会うことにより現代印刷に繋がっていくところも博物館の展示で見ても

らしいと考えています。

また、活版印刷の体験や印刷に関するワークショップなども開いています。

来場者も年間3万人を超えているなか、印刷関係者の方をはじめ社会人の来場が一番多く、一般の方では、高齢者が多いのが特長ですが、修学旅行で来ていただいたり、学校での授業で来ていただいたりしていることはありがたいと思っています。若い世代の方が来場して印刷の仕組みなど知つていただく事は有用だと思っています。もっと若い世代の方に来場してもらい印刷の大しさなどを伝えたいと思っています。

## —印刷の将来についてどのようにお考えですか。

**権山：**西洋における印刷の始まりは、グーテンベルクで宗教関連の42行聖書か

ら始まっています。日本でも宗教関連で延命や除災を願う経文、「百万塔陀羅尼經」が日本最古の印刷物だと言われております。

法律の交付や行政文書などは膨大な数の印刷物になる事で合理的に実施出来た事などあり、宗教と行政が印刷のリーダーシップをとっています。それは、現在も変わらず続いているし、今後も変わらないと思います。

## —本日はありがとうございました。

(2020年7月29日 印刷博物館にて、聞き手／副会長・松本徳彦、撮影・構成／出版広報委員・川上卓也)



権山 紘一さん

(凸版印刷株式会社 印刷博物館 館長)

## 2019年度小学生を対象とした「写真学習プログラム」報告

# 写真の楽しさ、面白さを伝える

-協力：富士フィルムイメージングシステムズ株-

2005(平成17)年より、毎年レンズ付きフィルムカメラによる小学生を対象とした「写真学習プログラム」を、小学校20クラスで実施している。

デジタルカメラは勿論のこと携帯電話の普及によって手軽に写真が撮れ、インターネットでの情報提供のツールとして写真が活用されているのが現状である。写真の原点ともいえるフィルムによる写真撮影が大幅に減少するなか、あえてフィルムを使っての「写真学習プログラム」は、単に写ったという喜びだけでなく、児童だからこそ必要とされている「事物の観察、物事を注意深く見る、疑視することの大切さ」を写真を通じて会得し体験してもらうことに意義を見いだしている。このことは写真という優れた記録媒体を使っての「記録・表現することの意味」を理解し、家庭や社会で広く写真を活用してもらおうとの願いがある。

「写真学習プログラム」は、協会の教育事業として15年間に延べ696人の会員による指導で、24,045人の児童に、「写真学習プログラム」の授業を実施して、「写真への興味を喚起すること」を体験してもらっている。

また、多くの方々にこの児童たちの作品を見ていただこうと、「写真学習プログラム」参加児童の作品を特別企画「PHOTO IS 小学生の眼」として、富士フィルム(株)・富士フィルムイメージングシステムズ(株)が主催する「PHOTO IS」想いをつなぐ「10万人の写真展」で展示される予定だった。しかし新型コロナウイルス感染拡大を受け開催を見送ることになったため、2021年以降に開催の写真展で展示される予定だ。



## [2019年4月～2020年3月実施校]

No.	実施校	県名	参加人数
1	三原市立幸崎小学校 5年生	広島県	12
2	三原市立本郷西小学校 5年生	広島県	36
3	羽後町立高瀬小学校 5年生	秋田県	9
4	羽後町立高瀬小学校 6年生	秋田県	14
5	江戸川区立大杉東小学校 4年1組	東京都	27
6	江戸川区立大杉東小学校 4年2組	東京都	27
7	江戸川区立大杉東小学校 4年3組	東京都	27
8	横浜市立菅田小学校 6年1組	神奈川県	25
9	横浜市立菅田小学校 6年2組	神奈川県	24
10	水戸市立柳河小学校 4～6年生	茨城県	39
11	水戸市立大場小学校 4～6年生	茨城県	39
12	成田市立中台小学校 4年生	千葉県	30
13	成田市立中台小学校 5年生	千葉県	26
14	高森町立高森南小学校 6年1組	長野県	36
15	高森町立高森南小学校 6年2組	長野県	35
16	瑞穂町立瑞穂第五小学校 5年生	東京都	35
17	瑞穂町立瑞穂第五小学校 6年生	東京都	31
18	那須塩原市立青木小学校 6年生	栃木県	16
19	横浜市立美しが丘小学校 5年1組	神奈川県	34
20	横浜市立美しが丘小学校 5年2組	神奈川県	33
参加人数合計			555

**[2019年度実施校児童の作品から]**



三原市立幸崎小学校生の作品



三原市立本郷西小学校生の作品



羽後町立高瀬小学校生の作品



羽後町立高瀬小学校生の作品



江戸川区立大杉東小学校生の作品



横浜市立菅田小学校生の作品



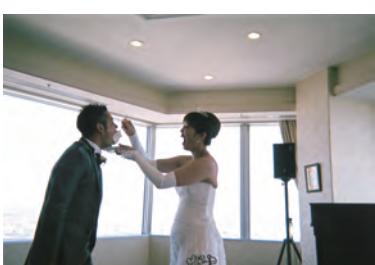
横浜市立菅田小学校生の作品



水戸市立柳河小学校生の作品



水戸市立大場小学校生の作品



成田市立中台小学校生の作品



成田市立中台小学校生の作品



高森町立高森南小学校生の作品



高森町立高森南小学校生の作品



瑞穂町立瑞穂第五小学校生の作品



那須塩原市立青木小学校生の作品

# Message Board

## ◆溝縁ひろし（1982年入会）

私のライフワークのひとつは京都の花街です。1973年の初夏、祇園で偶然舞妓さんにお会い、その街の伝統美に魅せられました。以来、約半世紀にわたり飽きることなく撮り続け、各種出版物にまとめてきました。

今回出版した本『花街と芸妓・舞妓の世界』は2020年2月に発刊しました。花街文化や女性史、職人などを研究する女性たちが執筆し、私が写真を担当取材した本です。

京都をはじめ15地域の25花街を取り上げました。社会の変化の中で、地域性を大切にしながら生き続けてきた花街には興味深いものがあります。花街の文化が未来へと守られ伝えられることを願ってやみません。

（京都府宇治市在住）



は今も信じており平安遷都以来1200年以上の歴史が

ある。箱庭的な京の美は自然美と二千数百を越える寺社仏閣、町屋等の人工的な美しさがうまくかみ合い京都特有の風景をかもし出している。北には丹波の山々があり日本海へと通じ、南は賀茂川上流の湧き水が淀川となり太平洋へと流れ出る。今回の写真集は2冊セットで、京の彩・桜、京の彩・楓であり、桜は種類と背景の豊富さ、楓は赤を中心とした色彩が特徴で、京都市内を中心に桜と楓の彩が表現されている。

（京都府京都市在住）



## ◆芥川 仁（1982年入会）

昆虫少年でもなかつた私が精魂込めて「蜜蜂と人間の物語」を撮影することに。養蜂場に足を踏み入れウォーンと羽音が体を包むと、恐怖心が先に立つ。しかし、6年間も取材していると羽音を聞けば蜜蜂の機嫌が分かるようになっていた。働き蜂は寿命一ヶ月余りの間に、スプーン一杯分の蜂蜜を集める。花へ向かって一直線に飛び出す蜜蜂を見ると健気さに感動する。養蜂家は春の蜂蜜を頂く代わりに冬の保温と餌を提供する。そんな物語が小さな写真集『羽音に聴く』になった。



10月22日から28日までキヤノンギャラリー大阪で同名の写真展を予定。小さな命である蜜蜂は自然界の変化に敏感だ。羽音に耳を澄ませて自然界のメッセージを聴き取って欲しい。

（宮崎県宮崎市在住）

## ◆橋本健次（1984年入会）

京都は日本列島の中でも特に四季がハッキリと感じられる土地であり、三方を山に囲まれ冬の底冷えと夏の蒸し暑さが特徴で四方を青龍、白虎、朱雀、玄武の四神に守られていると京都の人

に同名の写真展をフジフィルムイメージングプラザ東京で開催いたしました。新型コロナの影響で延期になっていた大阪展も8/26-9/14にフジフィルムイメージングプラザ大阪で開催されました。

（奈良県生駒市在住）



## ◆今井しのぶ（2020年入会）

初めてクリップオンストロボを購入した、持っているがなんとなく使用しているという方向けのストロボ撮影入門書です。出来るだけ大きな写真やイラストを使い、わかりやすいように解説をしています。

ストロボを使用したポートレートの撮影方法やライティングのコツなどを作例とともにガイドしました。オシカメラだけでなく、オフカメラにもチャレンジするページもあります。



クリップオンストロボはコンパクトでいろいろな光を作ることができ、とても便利です。

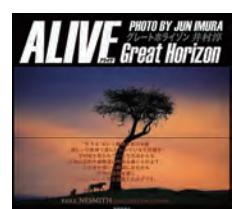
ストロボを使って人物を自然にライティングしたい、雑貨や料理、スイーツを室内できれいに撮りたいという初心者にぜひ読んでほしい1冊です。

『はじめてのクリップオンストロボ』  
(玄光社刊) 著 今井しのぶ

（神奈川県川崎市在住）

## ◆三田崇博（2014年入会）

奈良県在住の三田と申します。今年出版いたしました写真集『絹道遺産～Silk Road and the World Heritage～』を紹介させていただきます。かねてより憧れていたシルクロード沿いの世界遺産を中国からイタリアまで2017年から2019年までの3年間に取材した作品をまとめたものになります。2月



に浮かび上がる動物のシルエットを天と地の境界線として狙っています。この本の後半は、私が動物を撮り始めた頃から狙い続けているサバンナの日常である弱肉強食の世界で、狩の瞬間や親子の場面で組んでいます。生きるために他の生き物を狩る生と死の境界線です。臨場感に溢れサファリを擬似体験していただける本です。

今年は新型コロナウイルスの影響で海外取材が全て中止となってしまいました。早くサバンナに安心して行けるようになることを切に願っています。

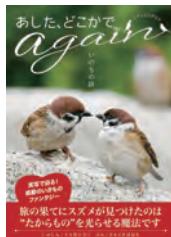
（神奈川県横浜市在住）

## ◆うえだこうじ（2017年入会）

『あした、どこかで。again  
〜いのちの詩〜』

シリーズ第4作となる本作は、実写で迫る感動の“いきものファンタジー”です。人生をより良く生きるためにには、物質的な幸せだけを求めていたら道を踏み外してしまいます。また困難にも度々出会いうでしょうが、変化が必

要な時もあります。この作品は、野生のズメを通してただまつすぐに「生きる」とは何なのかを写真と短い言葉だけで物語にしました。



人生の門出に、再出発する二人

に、挫折しちゃった人に、元気を出したい人に、幸せに生きるためにシンプルなコツをズメが教えてくれます。

■写真：うえだこうじ

■文・構成：さえぐわはなえ

■単行本：172ページ

■定価：本体 2,000円+税

(東京都江戸川区在住)

### ◆吉村和敏（2014年入会）

100年以上の時を超えて、夢とロマンを語り継ぐ伝説の回転木馬「カルーセルエルドラド」は、東京都練馬区の遊園地「としまえん」にある。1907年、ドイツ人の機械工ヒューゴ・ハッセによって生み出されたこの回転木馬は、ヨーロッパ各国の遊園地を巡回し、その後、アメリカへ渡り、そして日本にやって来るという数奇な物語を持っている。私は遊園地の定休日に足を運び、豚、馬、ライオン、女神、天使、馬車、そして天井画にいたるまで、じっくりと時間をかけて撮影を行った。

ファインダーを覗くときに常に意識していたのは、すべての彫刻や人物画から伝わってくる「心」だった。瞳から伝わってくる喜びや悲しみ、畏怖のような感情を、1枚の作品に置き換える努力をした。



吉村和敏写真集『カルーセルエルドラド』（丸善出版、価格 4500円+税）  
(東京都江東区在住)

### ◆諸河 久（1982年入会）

『阪急電車（上巻・下巻）』を上梓  
1980年に関西出版社の雄だった保育社から『カラーブックス日本の私鉄シリーズ』京阪神急行電鉄（現・阪急電鉄）の撮り下ろしを依頼された。出版社勤務からフリーになったばかりの私には幸運な仕事だった。

同書は1980年10月



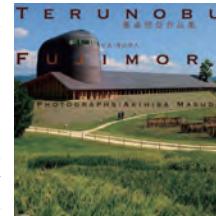
に刊行され、5万部の初版が忽ち重版されるなど、好評理に販売部数を伸ばしていく。

40年の歳月が経過した今冬、当時の「阪急」を記録したカラー・ボジフィルムを再編集した写真集『阪急電車の記録』をフォト・パブリッシングから上梓する運びとなった。

外式処理のコダクロームで撮影したカラー作品に、新たにデジタルリマスターしたアマチュア時代のモノクロ作品を加えた上下巻構成で、往年の阪急電車の魅力を現代に蘇らせることができた。  
(東京都中央区在住)

### ◆増田彰久（1971年入会）

『藤森照信作品集』TOTO出版  
建築・土木関係の色々な本を出版してきたが処女作は1971年6月に毎日新聞社からの『写真集・明治の西洋館』だった。解説文は当時、東京大学助教授の村松貞次郎先生に書いていただいた。そして、この年、藤森さんが東北大學から村松研究室に来られ、長いこと建築史家として過ごされていた。

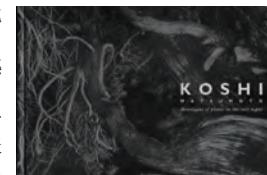


1989年、彼は幼なじみの守矢早苗氏と茅野市より神長官守矢資料館の設計依頼があり引き受けた。作品は好評であったが注文がくることまではなかったので、自邸のタンポポハウスを建てたという。それから2019年までに60余件の設計をして、今回、作品集として出版された。

(東京都町田市在住)

### ◆松本コウシ（1995年入会）

写真集『真夜中のエーテル』  
都市と都市の狭間に存在した植物たちの異世界、そこに死は無く「厳しくもある再生」の存続が一度たりとも同じ貌を見せせずに繰り広げられていました。暗闇の中で微候の明滅を重ねる植物たち。小さな森に入ると「彼ら」同士の囁く声が聞こえ、人が感じる周波数の外にある「気」となって森の粒子と共に舞い上がっていました。草木が放出する眼に見えない壮大な生命循環の匂いに幻想され、その官能的な闇に向けて私は光を放ちました。輝く闇、利那「彼ら」のコミュニケーションは視覚化され、人が感じるこのとどける「表出」へ



と変わったのです。

『真夜中のエーテル』とは、植物たちが闇の中でじっとエネルギーを放つ様の例えです。小さな森の中で作者が感じた“気の流れ”を興がって頂ければ幸いです。

(大阪府東大阪市在住)

### ◆前川貴行（2007年入会）

今年2月に写真絵本『しまふくろうの森』あかね書房刊、6月に写真絵本『ハクトウワシ』新日本出版社刊、7月に写真集『SOUL OF ANIMALS』日本写真企画刊を上梓した。



野生動物の撮影は、一気に大量に撮れるものではないので、物語を展開できる様々なシーンを捉えるには、それなりの時間が必要となる。痛感するのは、ワンカットの積み重ねがやがて実をむすぶと言うこと。地道な歩み無くして、作品をまとめることはできないと、あらためて思う。動物たちと対峙する喜びがあつてこそ続けて行けるのだが、それは彼らがいつも違う表情を見せて僕を驚かしてくれるからだ。これからも一冊でも多く、優れた内容の著作を作り続けたいと思っている。

(東京都八王子市在住)

### ◆田中達也（1996年入会）

『ナイト・ネイチャーフォト』

近年カメラのミラーレス化に伴い常用 ISO 感度や低輝度性能が向上しました。それにより暗所での構図確認が容易になり、夜の風景や星空が手軽に撮影できるようになりました。特に天の川や夜景といったイメージを搔き立てられる被写体は人気で夜の時間帯に目を向ける人も増えました。

本書は新しい自然夜景の入門書という位置付けで、月夜の風景、月による光学現象、天の川風景、夜露、

虫、マジックアワー、雷など、夜の時間帯を舞台とした被写体を自然撮影する方法を解説したガイドブックです。自然現象としての夜景はもちろんのこと、人工光を利用した夜の風景まで、幅広いシーンの撮影方法と被写体別の RAW 現像のポイントをわかりやすく解説しました。

(愛知県尾張旭市在住)

# Canon

make it possible with canon

# 5



## 5であることが、すべて。

常に過去の5を塗りかえてきた、孤高のEOS。EOS Rシステムでも、期待を凌駕する完成度を実現した革新のフルサイズミラーレス。そのカメラの真の完成は、あなたが手にする、その時。多くの言葉はいらない。5であることが、すべてなのだから。

NEW

# EOS R5

写真是進化する。 EOS R SYSTEM



東京2020ゴールドパートナー  
(スチルカメラ)



EOSは2019年9月20日に累計生産台数1億台\*、  
交換レンズ<sup>†</sup> (EF,RF,CN-E) は2018年12月19日  
に累計生産本数1億4,000万本を達成しました。  
※映像制作用シネマカメラを含む



◎ キヤノン EOS R5 ホームページ  
[canon.jp/eos-r5](http://canon.jp/eos-r5)

キヤノンマーケティングジャパン株式会社

# SIGMA



SIGMA初フルサイズミラーレス専用超望遠ズーム

DG DN版「ライトバズーカ」誕生

## C Contemporary

### 100-400mm F5-6.3 DG DN OS

希望小売価格(税別) 120,000円 Protective Cover(PT-31)、フード(LH770-05)

対応マウント:Lマウント用、ソニーEマウント用

\*Lマウントはライカカメラ社の登録商標です。

シグマの新しいプロダクト・ラインについては、こちらへ。

[sigma-global.com](http://sigma-global.com)



*Photo Takajyo Yoshiharu*